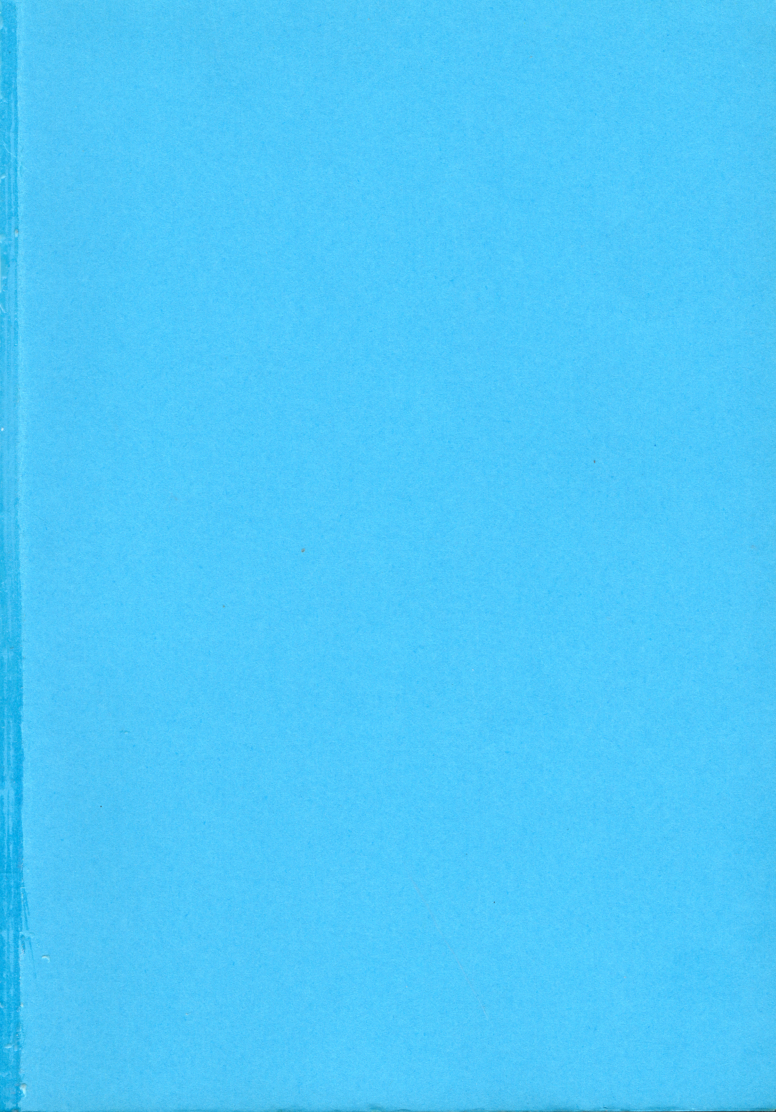
SPECIAL STORY
TALES OF PHANTASIA®
テイルズ オブ ファンタジア
真紅の瞳
矢島さら
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

1961年、横浜市生まれ。ジュニア小説、恋愛小説、エッセイなどを手がけるほか、麻宮筐の名で、ファンタジー小説でも活躍。また、かえるを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著作に『あなたがそばにいるだけで』(福武文庫)他、多数。

松竹徳幸
Tokuyuki Matutake

アニメーション制作会社「プロダクションI・G」を通じて本編であるプレイステーション版「テイルズ オブ ファンタジア」OP・ED部分の作画監督を務めたフリーのアニメーター。おもに携わった作品に、「テイルズ オブ デスティニー」OPなどが上げられる。

カバーイラスト　松竹徳幸

テイルズ オブ ファンタジア

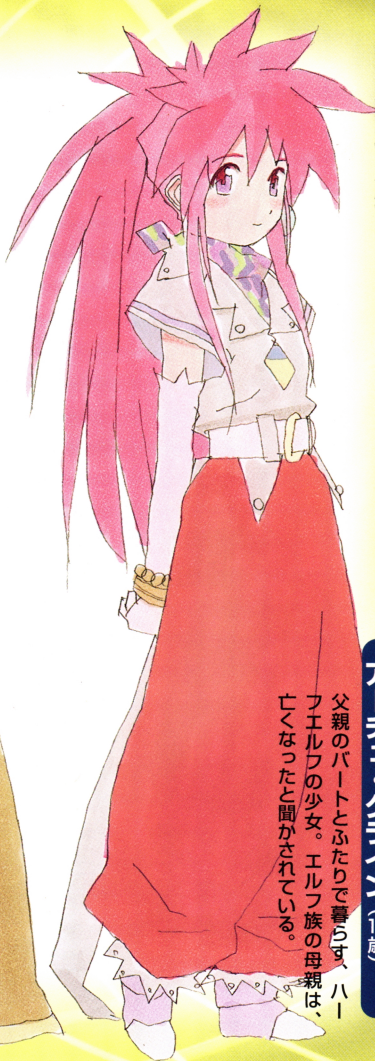
真紅の瞳

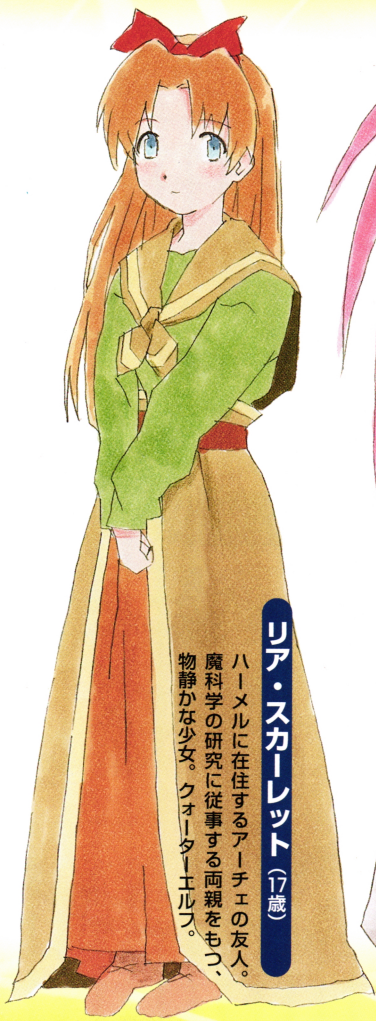
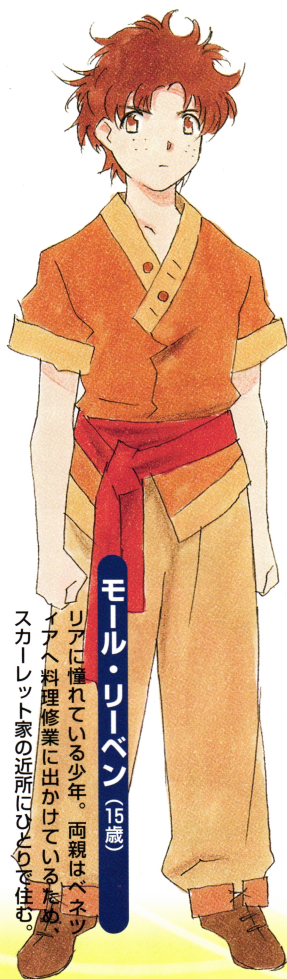
矢島さら

TALES OF PHANTASIA®
真紅(しんく)の瞳(ひとみ)

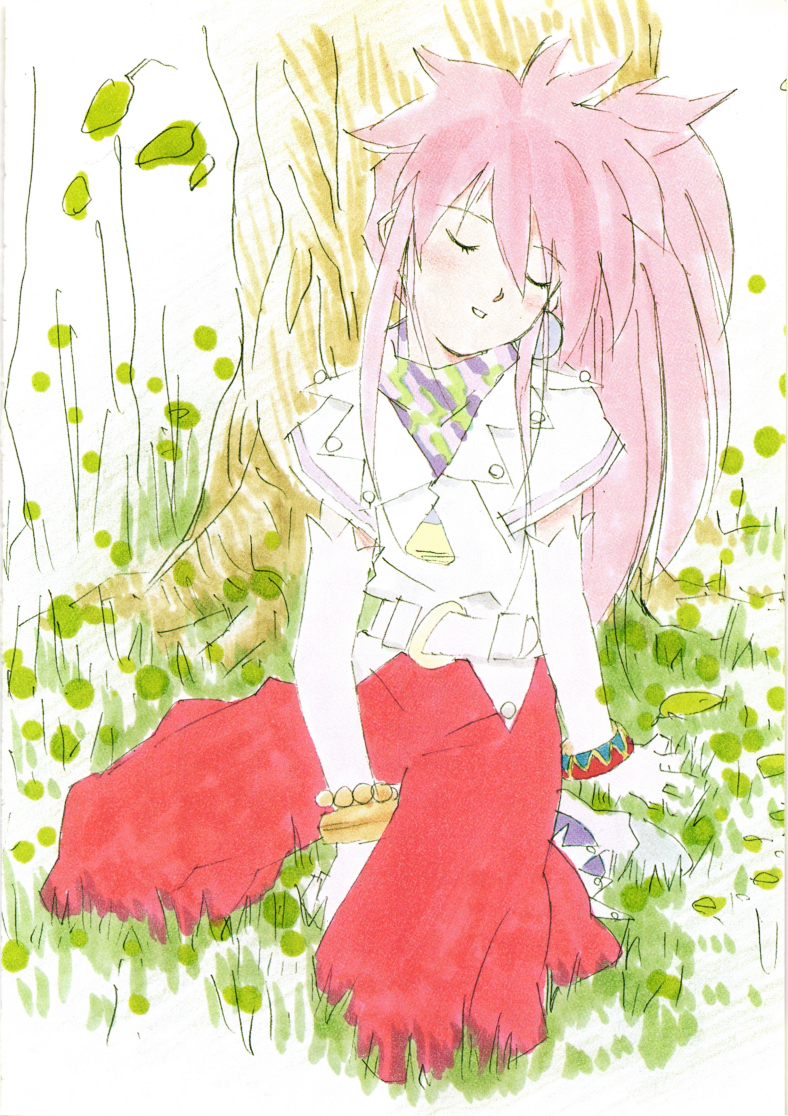
主な登場人物

アーチェ・クライン（16歳）

父親のバートとふたりで暮らす、ハーフエルフの少女。エルフ族の母親は、亡くなったと聞かされている。

リア・スカーレット（17歳）

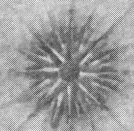
ハーメルに在住するアーチェの友人。魔科学の研究に従事する両親をもつ、物静かな少女。クォーターエルフ。

シノン・ハーディア（19歳）
謎の剣士。かつてはダオスの手下・ジャミルに洗脳されていたが、亡き義理の姉・ミリアムによって解き放される。
モール・リーベン（15歳）
リアに憧れている少年。両親はベネツィアへ料理修業に出かけているため、スカーレット家の近所にひとりで住む。

テイルズ オブ ファンタジア

真紅(しんく)の瞳(ひとみ)

矢島さら

アセリア歴四二〇二年

ダオス城
白樺の森
ヴァルハラ平原
ミッドガルズ
12星座の塔
モーリア坑道
熱砂の洞窟
オリーブヴィレッジ

浸食洞
ベネツィア
西の孤島
ハーメル
ローンヴァレイ
ユークリッド
アルヴァニスタ
精霊の洞窟
エドワード邸
ベルアダム
精霊の森
水鏡ユミルの森

時空（とき）は、未来編より一年遡る
アセリア歴四二〇一年——。

目次

第一章

カタン、カタンという耳障りな音が、さっきから不規則に聞こえている。
(ドアが鳴ってる……?)
きのうの嵐はまだおさまっていないのだろうか。バート・クラインはハッと目を開け、ベッドから体を起こしかけた。
「う、たたたっ」
体の節々が軋(きし)むように痛む。
「アーチェ、玄関のドアが開けっぱなしだぞ」
バートは自分の声がすっかりしわがれていることに顔をしかめながら、娘のアーチェを呼んだ。
「おい、いないのか」
「いるよー」

アーチェが台所から手をふきふき出てくる。
「ドアがどうしたって？　ちゃんと閉まってるよ」
アーチェは玄関を覗（のぞ）いて肩をすくめ、ピンクの髪をかきあげた。
「しかし、さっきからカタンカタンとうるさいじゃないか。いったい……」
「ああ、ひょっとしてあたしが野菜を切ってた音かな」
「え」
バートは面食らって、くちびるの端をピクリとさせる。
(アーチェが料理だって!?)
決して自慢できることではないのだが、今年十六歳になった娘の料理センスは皆無に等しいのではないかとバートは密かに思っている。
料理だけではない。洗濯も掃除も、幼いころから父ひとり子ひとりで暮らしてきたわりには、はっきり言って下手だった。
もっとも、娘かわいさについ過保護になり、家事一切をやってやるバート自身にも大いに問題はあったのだが。
「で、なにを作っていたのかな、お嬢さんは」
気を取り直してバートが訊ねると、アーチェはにこっとした。

「風邪にはおかゆ。これっきゃないじゃん？」
「おかゆ、ね」
「だいたいきのうみたいな嵐の日に、いくら仕事だからって谷に入ったりして。風邪ひくのはあたりまえだよ、お父さん。あたしがあんなにやめといたほうがいいよって言ったのに」
アーチェはベッドに近づいてきて、父親の額にやわらかな手を当てた。
「ほーら、まだ熱があるよ。もうすぐできるから、とりあえずこれで冷やして待ってて」
さっき手をふくのに使った、湿ったタオルをバートに押しつけ、アーチェは台所に戻っていった。
「やれやれ」
バートはタオルにくっついていた野菜クズをつまみあげ、くしゃみをした。
「あれえ、翠竜湯（すいりゅうとう）がないよ」
常備薬がしまってあるはずの引出しをかきまわしながら、アーチェはもの問いたげな視線をバートに向けた。
翠竜湯というのは、翠（みどり）ツルクサという薬草から作る薬のことだ。風邪だけでなく、

ちょっと体調を崩したときなどによく効くので、いつも高値で売れる。

「ああ、この間使い切ってしまったんだ。きのう谷へ入ったのもそれが気になっていたからさ」

バートはふらつく体でテーブルにつきながらそう説明した。

ふたりが暮らすローンヴァレイは淋しい土地だが、深い谷間には珍しい薬草が自生している。かつてバートがエルフである妻のルーチェとここに居を構えたのも、それが大きな理由だった。

ルーチェはエルフ族に伝わる、さまざまな薬に関する知識を豊富に持っていた。バートが谷でとってきた薬草にルーチェが特殊な加工を施し、それをベネツィア市やハーメルの町の薬屋に卸すことで、ふたりは生計をたてていたのだった。

訳あってルーチェと別れて暮らすようになってからも、バートは妻が残していった書きつけに従って薬を作りつづけている。

きのうは朝からひどい嵐だったが、そろそろ薬を納めに行かねばならない時期だったので、無理に谷に入った。けっきょく、薬草を見つける前に風雨が激しくなり家に戻ることになったうえ、すっかり風邪をひいてしまったというわけだった。

「あたし、ハーメルまでちょっと行ってくるよ」

アーチェが言う。
「薬を買いにか？　自分が売った薬を娘に買わせるなんて、んなばかばかしいこと」
「だって、治らないとお父さん困るでしょ。ささっと行ってくるからさ」
そわそわと壁に立てかけてあったほうきを手に取る娘に、バートは微かに眉をひそめる。
「この間みたいに、あっちこっち寄り道するんじゃないぞ。万が一、おまえになにかあったら……」
「わかってるって。死んだお母さんに申し訳ないっていうんでしょ」
「む……そういうことだ」
バートは咳払いした。アーチェには、ルーチェは病気で亡くなったと説明してある。
「じゃあね。ちゃんと寝てるんだよ」
アーチェが手を振りながら出ていってしまうと、バートはテーブルの上に用意されている皿に目を移す。そしてがっくりと肩を落とした。
「こいつはひどい……アーチェのやつ、おかゆとおこげの区別もつかんのか」
野菜も焦げてるし。バートはまじまじと皿の中を覗き込んだ。

ハーメルは豊かな水源に恵まれた美しい町だ。
圧倒的に岩肌が多いローンヴァレイから訪れるたびに、樹々の緑が体に染みこんでくるような心地よさを覚えることができるのだった。
ハーメルの町とローンヴァレイは、古びた橋でつながっている。橋を向こう側へ渡るのがアーチェは大好きだった。なんともいえない開放感にひたれるからだ。
「へっへぇ、お天気はすっかりいいし、お金もちょびっとだけど持ってるし、楽しいなっと」
ほうきに乗って飛んでいるアーチェの顔に、笑みがこぼれる。
いくら仕事のためとはいえ、淋しい谷での暮らしが十六歳の少女にとって退屈でないわけがなかった。ときどきバートの目を盗んで遊びに出かけることはあったが、今日のように大義名分があるときは、よけい心が晴ればれするのだ。
「薬屋、薬屋、と。どのへんだっけな」
町に入ったアーチェはほうきから降りると、きょろきょろとあたりを見回した。
「あ、あった」
薬ビンをデザインした見覚えのある看板を見つけ、中に入る。
「こんにちは～」

「おやっ、バートさんとこのアーチェじゃないか」

店番をしていた主人が、ずり落ちそうな眼鏡を直しながら、上目遣(づか)いで驚きの声を上げた。

「お父さんの薬を持ってきてくれたのか。翠竜湯と湿布薬が残り少なくなって困ってたんだ。助かっ……」

「よかった、まだあるんだね？　その翠竜湯、買ったっ！」

勢いよく手を出したアーチェに、店の主人は面食らった顔になった。

「そんな顔しないでよ、おじさん」

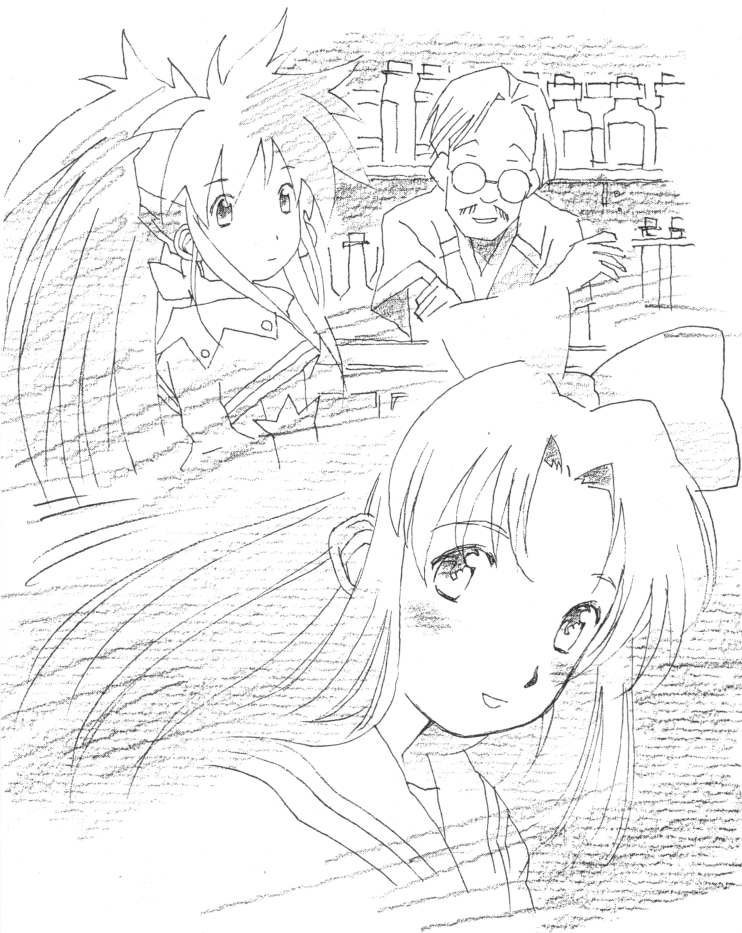
「しかしバートさんの薬は人気があるんでね。わざわざ身内のあんたが買うことはないだろ」

そのとき、入り口のドアが静かに開いた。

「いらっしゃい」

主人の営業用の笑顔に迎えられたのは、ひとりの少女だった。アーチェと同い年くらいだろうか、美しい琥珀(こはく)色の髪を長く伸ばしている。ゆったりしたロングのスカートがよく似合っていた。

「こんにちは。あのう、母が風邪ぎみなんですけど、なにかいいお薬をいただけません

か」
　げっ、とアーチェは口の中でつぶやいた。
「ありますとも。お嬢さん、ラッキーですよ。なんてったってよく効くんだなこれが」
　主人は薬棚から翠竜湯の入った小さな紙袋を持ってくると、少女に手渡した。
「三百ガルドだよ。さあ、早く帰ってお母さんに飲ませてあげなさい」
「ええ。そうします」
　少女はカウンターにコインを並べ、微笑(ほほえ)みながら踵(きびす)を返した。無遠慮なアーチェの視線に気づくと軽い会釈をして、外へ出て行く。緩慢というわけではないが、ひとつひとつの動作がひどくおっとりしていた。
「綺麗な娘だったな」
「うん……」
　アーチェは生返事をし、それからあわてて、
「あたしにも薬」
　とふたたび手を出す。
「なに言ってるんだ。いま見てたろ？　翠竜湯は完売、あれが最後のひと袋だったんだ」
「うそっ」

「いつごろ補充してもらえるかな……おい!?」
　アーチェの姿は消えていた。

「ねえ、ちょっと待って」
　通りに飛び出したアーチェはほうきにまたがると、少し前を速足で歩いている琥珀色の髪の少女を追いかける。
「……私ですか?」
　振り返った少女はアーチェがほうきに乗っているのを見て一瞬目を見張った。が、すぐに「ああ」といった表情になった。
「いま、そこのお店で」
「うん。あのさ、すっごく申し訳ないんだけど、その薬半分譲ってもらえないかな」
　アーチェが少女の胸に大切そうに抱かれている紙袋を指さすなり、
「いやだ。私ったらもしかして横入り……した、とか?」
　と、うっすら頰(ほほ)を赤らめる。
「うーん。そういうわけでもないんだけどさ」
　アーチェはそう言うと、くすっと笑ってしまった。目の前に立っているお嬢様然とし

た少女と「横入り」という言葉が、ひどくアンバランスに思えたからだった。
「いいですよ。私の家、すぐこの先なんですけど、よかったら来ませんか。そこで半分こしましょうよ」
「ほんと？　でも、お母さん寝てるんでしょ」
いえいえ、と少女は大げさに首をふる。
「風邪ぎみだから薬を買っておくように私に言って、出かけて行っちゃいました。もしかしたら飲まなくてもいいくらい、元気に帰ってくるかもしれないし……家にはいま誰もいないんですよ。ですから、ね？」
「ありがと。じゃ、そうさせてもらおうかな。あ、あたしアーチェ。アーチェ・クラインン」
「リア・スカーレットです。どうぞよろしく」
リアは髪と同じ琥珀色の瞳を優しげに細めた。
スカーレット家は教会のすぐそばに建っており、ちょっとしたお屋敷といった風情だった。
建物もさることながら、樹々がうっそうと生い茂った庭も、かなり広いようだ。

この町で一番か二番の大きさじゃないかな、とアーチェは思った。
「まあ。それじゃお父さまがこのお薬を？」
ダイニングルームの大きなテーブルで粉薬を別の袋に分けながら、リアは目を見張った。
「あははっ。うちのはお父さまなんてガラじゃないよ。ただの人間のおじさん」
アーチェが笑うと、リアの瞳はますます大きくなる。
「じゃああなたはハーフエルフなんですね。目があんまり綺麗な真紅（しんく）だから、薬屋さんで会ったとき、純粋なエルフ族の人かなあと思ったんですけど」
「お母さんはエルフだったらしいよ。もう死んじゃったけどね」
「……それはお気の毒に」
リアは半量の薬が入った紙袋を、そっとアーチェの前に滑らせた。
「気にしないでよ。ああ、この薬だけど、スプーン一杯分をぬるま湯で飲むように用法を書いた紙が入ってたでしょ。でもほんとはお湯に溶かしてから飲むほうが効くんだって。吸収が早くなるからね」
「なるほど」
リアは頷（うなず）きながら、壁に立てかけてあるアーチェのほうきに、ちらりと視線を走らせ

た。

「それにしても立派なおうちだねえ。ここに両親と三人だけで？」

「いえ、父の助手がひとり住み込んでいて、今は四人。もっと前はデミテルさんというお弟子さんもいて、五人だったんですけど」

「助手？　弟子？　お父さんってなんかのお師匠さん？」

リアは答えず、席を立つとアーチェのほうきの前に立った。

「ちょっと借りますね」

「うん、いいけど……」

何を思ったのかほうきの柄をぐっと掴（つか）んだリアは、スカートをたくしあげ、テーブルによじ登る。

(なに、この子……!?)

アーチェはよく光る瞳を見開いた。リアはいつもアーチェがやっているようにほうきにまたがったと思うと、勢いよくテーブルを蹴（け）った。

「えいっ！」

「えっ!?」

ドシンと派手な音をたてて、リアが床に転がる。

「痛たたた」
「ちょ、ちょっと、大丈夫？」
アーチェがあわてて尻もちをついているリアに駆け寄る。
「なに無茶なことしてるのよ。あのね、魔法が使えなきゃほうきでは飛べないんだよ。知ってると思うけど魔法っていうのはエルフの血が入ってないと……」
「おかしいなあ」
「え」
リアは自分の尻をさすりながら、情けなさそうにアーチェを見上げた。
「アーチェさん、私、これでもエルフ族の血を受け継いでいるんですよ」
「……うそ」
「本当です。私の両親はふたりともハーフエルフで……つまり私はクォーターというわけなんですけど」
「へえっ！」
アーチェは自分も床にしゃがみ込むと、同じ高さでリアの顔をじっと見た。
「べっこう飴（あめ）みたいな目だ……ぜんぜんエルフっぽくないや」
「ええ。人間の血のほうが強く出てしまったらしくて」

リアはゆっくりと立ち上がると、ほうきを拾い上げてもとあった場所に戻した。
「両親は魔術師なんです。ふたりともなにかむずかしい仕事をしているらしくて、私には仕事のこと、話してくれないんですけど。それもこれも、私がほとんどまったく魔術を使えないせいなんですよね……」
「そっか。クォーターになるとそういうこともあるんだねぇ。あたし、最初に見たとき絶対人間だと思ったもん」
アーチェは感心しながら椅子に腰かけ直した。
「あーあ。ひょっとしたら飛べるんじゃないかと思ったんですけどねえ。アーチェさんがうらやましいわ」
ため息をつくリアは、なおも未練がましく横目でほうきを見つめている。
「なにもそんなにがっかりすることないじゃん？　魔術が使えなくたって人生終わったわけじゃなし」
「ええ。私も、べつに魔法にこだわっているんじゃないんです。ただ、もしもっとエルフの特性が強く出ていたら、こんなふうに毎日留守番ばかりじゃなく、父や母と一緒に出かけてなにか仕事の手伝いができたんじゃないかと思って」
リアの言葉に、アーチェはくるくるっと瞳を動かしてみせ、

「じゃあローンヴァレイにおいでよ。そんでもって薬作りでも手伝ってみる？　孤独で過酷な作業だよぉ」

と脅かすように提案した。

「え……」

「あははっ。うそだってば」

アーチェは手をひらひら振って笑い出した。

「けど、近いうちにまたお邪魔してもいい？　分けてもらった翠竜湯、持ってくるからさ。ほかにも常備薬を見つくろってくるよ」

「本当？　あ、いえ、お薬なんてどうでもいいの」

リアは身を乗り出し、

「私、いつもひとりだから。来てくれると本当にうれしい。これからもお友だちでいてくれますか？」

と頬を紅潮させた。

「もちろんだよ。ときどきほうきも貸してあげるから、気がすむまで練習すれば」

「ありがとう。アーチェさんて……その、なんていうか」

「ん？」

「ええと、私が魔術師に対して持っていたイメージと違うというか」
「どんなイメージよ」
「厳粛で、近寄りがたくて、ストイックで、ちょっと怖い。それから……」
リアは宙を睨みながら、懸命に考える。
「たはは……そりゃたしかに違うね」
アーチェは苦笑しながら席を立った。バートをひとり残してきたことだし、そろそろ帰ったほうがよさそうだった。
「じゃあね、リア」
門のところまで見送りに出てきた新しい友人に手を振り、アーチェは橋に向かって歩き出す。
(リア・スカーレットか……これからちょくちょく遊びにきちゃお)
たったひとり友だちができただけで、自分がよそ者でなくなったような気がした。ハーメルの町を行き交う人々に、なんとなく親しみさえ感じてしまう。
「それにしても、厳粛で、近寄りがたくて？　それってリアの両親のことなのかなあ」
いったいどんな人たちなんだろう、とアーチェは思った。
ふとそのとき、背後から視線を感じた。

「ん？」
しばらく素知らぬふりで歩きつづけ、突然さっと振り向く。自分のま後ろを歩いていたひとりの少年とまともに目が合った。驚いたのは少年のほうだった。
「うわあっ！」
「なによ、あんた」
アーチェは、すっとんきょうな叫び声をあげたあと立ちすくんでいる少年をじっと睨みつけた。
くせの強い黒髪はくるくると巻いており、人なつこそうな目に丸い鼻という取り合わせが、彼を幼く見せているようだった。実際は十四、五歳というところだろうか。
「あたしのこと、つけてきた？」
「い、いや、とんでもないっ！」
少年はぶんぶんと首を振った。
「俺はただ、スカーレットさんちを覗き込んでた怪しいやつを見張ってたら」
「なにそれ。誰が覗き込んでたって？」
アーチェはリアの家の話題が出たことに眉をひそめ、少年を無理やり道の端に引っ張っていった。

「し、知らないやつだよ。頭から縄だか蛇だか生やしてる男。俺が見てることに気づいたらそいつ、逃げちゃって。そしたらあんたが中から出てきたんだ……」
「へええ、縄や蛇が頭から？　どうせウソつくならもうちょっとうまいのを考えなよね。ホントはあたしが可愛いからついてきたんでしょ？」
　ぶっ。少年が吹きだした。
「なんでそうなるんだよ。へっ。だーれがおまえなんか」
「なんですってえ!?」
　アーチェの片眉がぐぐっと上がる。
「自分だって縮れたイカ墨スパゲティみたいな頭しちゃって、よっく言うわよ」
「！」
　少年はニキビの跡がある頬を歪め(ゆが)、くちびるをわななかせた。
「ね、年長者のそーゆー暴言が、健全なる青少年の成長を傷つけ妨げるんだぞっ。スパゲティは縮れないっ！」
「なーに言ってんの、あんた」
　アーチェはぽかんとし、
「この町に住んでるの？」

と訊ねた。
こくり。少年は頷いた。
「名前は？」
「モール」
「あっそう」
ひらりとほうきにまたがったアーチェを見て、
と、あわてて訊ね返す。
「名前は？」
「バイバイ」
「ああっ！　ちょっと待てよっ。どうしてそういう態度……」
振り上げかけたモールの拳が、中途半端な位置で止まった。
アーチェがさっさと行ってしまったからだった。
「ちきしょう。父ちゃんの言ってたとおりだ。エルフなんてロクなもんじゃないぞ。いったいあの家に何の用があったんだろう」
モールはしばらく考え込んでいたが、やがてもと来た道を戻り始めた。

「ほう、リア・スカーレットね。そんなに美人だったのか」
アーチェがローンヴァレイの家に戻り、ハーメルでのできごとを話して聞かせると、バートは咳き込みながらも興味津々といった顔つきになった。
「うん。むこうのほうがひとつお姉さんなんだけど、育ちがいいっていうか、おっとりしてるんだよね」
「そりゃあ今度ハーメルへ行ったら、ぜひ御尊顔（ごそんがん）を拝んできたいものだな」
「ダメだよ。次はあたしが店に薬を持って行ってあげる。この分、リアに返しに行くからついでにね」
アーチェは翠竜湯を溶かしたカップを父親に渡しながら笑う。
「すまんな。でも朝よりだいぶよくなった感じだ」
「そう？　回復早いじゃん」
「強靱（きょうじん）な肉体の持ち主でなければエルフと生活を共にしようなどとは思わんよ。あっちは何百年と生きるわけだし」
「だよね」
アーチェはにこにこと頷く。
「なんだ、楽しそうだな」

「へへっ、まあね」
バートは、娘がうきうきしているのを感じて微笑んだ。
(友だちができればここでの単調な暮らしに多少の変化も出て、退屈しなくてすむようになるだろう)
風邪を治したらなるべく早く薬を作ってやらねば、とバートは苦い薬をぐっと飲み干した。

復調したバートが、大急ぎで作った薬ができあがったのは、ほぼ一週間後のことだった。
アーチェはそれを大きな布袋に入れてハーメルまで運び、待ちかねていた薬屋の主人のところまで納めに行った。
「さて、と。仕事はおしまい」
受け取ったばかりの薬の代金をしまうと、空を仰ぐ。教会のとんがり屋根が見えた。
アーチェはほうきをかついで、スカーレット家へ急いだ。
「リア！　リア！　いる？」
門の前で叫ぶと、前庭の木立ちを透かして、窓が開くのが見えた。顔を出したのはリ

アだ。
「アーチェさん!?」
「うんっ。あたしだよ」
リアの顔はすぐに引っ込み、玄関のドアが開けられた。
「来てくれたんですね。さあ、早く入って」
満面に笑みを浮かべたリアは、アーチェの背中を押すようにして招き入れる。
「そ、そんなにあわてないでよ」
苦笑しながらダイニングルームへ足を踏み入れたアーチェは、一瞬ぎょっとなって体を固くした。
「なに、どうしたの、これ……」
床いっぱいに、色とりどりの花の鉢植えが置かれている。テーブルの上にはお茶の用意が整い、食べることなら誰にも負けないアーチェが十人でかかっても食べきれないくらいのお菓子が山のように盛ってあった。
「まさか……とは思うけど……これ全部あたしのために？」
リアはうれしそうにこっくりと頷いた。
「アーチェさんがいつ来てもいいように、毎日作ってたんですよ」

「ええっ。そ、それはどうもありがと」
アーチェは、クッキーと巨大なプディングの皿を見つめてつぶやいた。
(毎日……？　おっとりしてるんだかエキセントリックなんだか、よくわかんない子だよね……でもおいしそう)
「食べていい？」
アーチェはリアの返事を待たずに、クリームがたっぷり載ったひと口サイズのケーキを口に放りこんだ。
「ひえぇ～、おーいしいっ。こんなの作れるなんて魔法よりすごいかも」
リアはうれしそうにちょっと肩を持ち上げてみせた。
「お花は二、三日前に偶然来たユークリッドの行商の人から買ったんです。ひと鉢でいっていうのに、こんなにサービスしてくれちゃって」
「五……十……、えー、二十鉢はあるじゃん。美人は得ってこと？」
アーチェはもぐもぐと口を動かしながら、近くにあった陶器の鉢のひとつを目の高さまで持ち上げて眺(なが)める。やや肉厚の黄色くて可愛らしい花びらが揺れた。
「うくっ！」
次の瞬間、なんともいえない嫌な気分に襲われ、アーチェは危うく鉢を取り落としそ

うになった。心臓が跳ねる。
「どうかしましたか」
「う、ううん。なんでもないよ」
アーチェはさりげなく鉢をテーブルの隅に置くと、椅子に腰かけた。
「これ、薬ね。お父さんがいろいろ揃えたから、よかったら置き薬にしてよ」
「まあ、どうもありがとう。母がこの間の翠竜湯、でしたっけ？　とてもよく効いたと喜んでいました」
「そう？」
アーチェはまだどきどきしている心臓を意識しながら、今のはなんだったんだろうと考えていた。
だが、それ以上おかしなことは起こらなかったので、リアがいれてくれた香りのいいお茶のおかげで、次第に落ち着きを取り戻した。
「私、あさってまでひとりなんです。父たちは仕事で遠出してしまって……」
リアは皿の上でクッキーを割りながら、ため息をついた。クッキーは口に運ばれることなく、どんどん割られて小さくなる。
「それは物騒だね。こんな広いうちに……」

アーチェの脳裏にふと、先週の帰りに出会った少年のことが浮かんだ。
「ねえ、リア。物騒で思い出したんだけど」
「はい？」
「モールっていう男の子、知ってる？　すごいくせっ毛の子」
アーチェは自分の頭の上に、指でくるくると円を描いてみせる。
さあ、とリアは首を傾げ、
「その子がどうかしたんですか」
と訊ねた。
アーチェが先日のできごとを話して聞かせると、リアは眉をひそめる。
「なんだか気持ちが悪いわ。モールっていう子のことはともかく、うちを覗いてた怪しい男がいたなんて」
「まあ、それもほんとかどうかわかんないんだけどね。ごめん、怖がらせちゃった？」
すると、リアはきっぱりと否定した。
「いいえ、全然。できればアーチェさんに泊まっていって欲しいですけど、別に怖いというわけでは全然、ないです」
「あはは。無理しちゃって」

思わずアーチェが笑ってしまったときだった。

バーンッ!

突然、床でなにかが爆発した。

「きゃあっ!」

「リア、早くテーブルの下へっ!」

アーチェは叫び、もうもうと迫ってくる煙から身をかばいながら異変の正体を見極めようと、目を凝らした。

バンッ!　バーンッ!!

「きゃああっ!」

(鉢植えの花!?)

信じられないことに、二十個の鉢が次々と炸裂し、破片を飛び散らせているのだった。

アーチェは無意識に近くにあったほうきの柄を掴み、自分もテーブルの下へ潜ろうとした。

と、そのとき偶然に窓の外に視線が向いた。

「え、なに」

それは窓を突き破って進んでくる、まっすぐな光の矢だった。

光はたったひとつテーブルに載っていた鉢を直撃する。鉢は弾(はじ)かれ、宙を飛んで食器棚の中に飛び込んだ。ガラスの割れる音。続いて、耳をつんざくひときわ大きな爆発音が響き渡る。

ドカーンッ!!

「いやあぁっ！　なんなのよ一体ぃっ!?」

アーチェは潜り込んだテーブルの下で、リアの肩をしっかりと抱きながら叫ぶ。が、その声は食器棚が倒れかかるものすごい音にかき消された――。

「……生きてる？」

「ええ、なんとか」

あたりが静かになってからテーブルから這(は)い出したふたりは、顔を見合わせてほうっと息をついた。

「なんで花が爆発なんか」

「えっ、花が？」

リアは心底驚いた表情になった。

「あきれた。見てなかったの？」

「ええ……怖くて、耳を塞いで目をつぶってましたから」
「……ま、いいや。とにかく今夜はあたしがここにいるより、リアがローンヴァレイに泊りに来たほうがいいみたいだね」
「なぜ？」
「なぜ、って」
アーチェはいらいらしてリアの肩を掴んだ。
「わかってないなあ。リアは狙われたんだよ。いたずらにしちゃ手が込んでると思わないの？　もし花の近くにいたら今ごろ死んでたよ、絶対」
「……！」
アーチェはリアの腕をとって立たせると、
「裏口はどこ」
とすばやく訊ねた。
度重なる爆発音を聞きつけた町の人々が門の前に集まってきているのが、割れた窓の向こう、木立ち越しに見えたからだった。
「こっちです」
ようやく事情がのみ込めてきたリアは、奥を指さしながらぶるっと身ぶるいした。

「薬の代金でしょ。黒こげクッキーに、鉢の破片」

アーチェは家に帰りつくなり、バートの目の前にばらばらと持ち帰ったものをぶちまけた。

バートは突然やって来た娘の友人と、焦げたクッキーを見くらべていたが、

「なにかあったらしいな。話を聞こう」

と、リアに椅子をすすめた。

「ふむ……火薬の匂いはしないいな」

アーチェの話を聞き終わったバートは、破片を鼻に押し当てて首を振る。

「でしょう。これはあたしのカンだけど……魔術だと思う」

「えっ」

それまでうつむいていたリアがハッと顔を上げる。

「リアには言わなかったけど、あの鉢を手に取ったとき、すごーく嫌な感じがしたんだよ。邪悪な感じ。激しい憎悪――」

「いやだ」

リアが口もとを押さえた。

「それに、見たの。窓を割って入ってきた光の矢。あれは普通の光じゃないと思う」
バートは頷き、リアに向かって優しく語りかけた。
「リア。なにか心当たりはないのかな。ユークリッドの行商人についてでもいいし、きみやきみのご両親を怨んでいそうな人物とか」
「いいえ……すみませんが、考えてもさっぱりわからないんです」
「そうか。いや、気にしなくていいよ。こんなあばら屋だが、今夜は安心してゆっくりしておゆき」
「ありがとうございます」
リアはようやく白い歯を見せた。
「さささ。そうと決まったらとにかくお風呂にはいろ？　すっかり埃かぶっちゃって、美人が台無しだよ。お父さんもさっさとおもてなしの支度！」
アーチェは友人の気分を盛りたてようと、ことさら明るい口調で言った。

大小ふたつの半月がかかっている。
その幻想的な夜空の下で、スカーレット家は無残な傷を剝き出しにしたまま、重たく

静まり返っていた。

と、微かな足音が近づいた。ひと気のない道から、ひょいと門を跳びこえて庭に侵入する。若い男のようだった。

男は携帯用の簡易ランプに灯を入れると、しばらく家の外壁に沿ってなにか調べているようだったが、ダイニングルームの中を照らしてみてギョッとなった。

「遅かった？……いや」

めちゃくちゃになっているのがひと部屋だけらしいとわかると、彼はほっと胸を撫(な)でおろす。

「警告、というわけか」

男はフッとランプを吹き消すと、長身を闇の中に躍らせた。

数時間後。濃いミルク色をした朝靄(あさもや)に濡れ、息をきらせて走ってきたのは、ひとりの少年だった。スカーレット家の中を覗き込んで、

「あちゃー」

と声をあげる。

「ひっでーな、こりゃ。ほんとに誰もいないみたいだぞ」

彼はついさっき両親のいるベネツィアから戻ったばかりだった。途中の宿屋で偶然出会った知り合いから、昼間のできごとを聞かされたのだ。

少年は真っ黒い巻き毛の中に手を突っ込み、がりがりと掻き（か）ながら破損した窓の大きさを目で測った。

「いくらふだん近所づきあいをしない家だからって、放っておかなくてもいいじゃないか。ドロボーが入ったらどうすんだよ、なあ？」

彼はいったんスカーレット家から離れ、どこからか調達してきたらしい数枚の板切れを持って再び現れた。そして、器用な手つきで窓に打ちつけ始める。

「リアさんはどうしたんだろう」

リアの名を口にすると、胸がキュンとした。思わず手元が狂い、彼は釘のかわりに嫌というほど自分の指を叩いてしまう。

「あいたたたっ！　いってーなちきしょうめっ、ばーかばーか！」

未だ晴れぬ靄の中に、子供っぽい悪態が響きわたった。

「ほんとに送らなくていいのか」

バートはハーメルへと続く橋のたもとで、リアに何度目かの念押しをした。
「はい。ここを渡れば町はすぐですし」
「お母さんたちが帰ってくるのって明日なんでしょ。だったらもうひと晩泊まっていけばいいのにさ」
アーチェがくちびるを尖(とが)らすと、リアは笑い、
「そんなに甘えられないわ。それに、掃除もしておかないといけないし」
とすっかりうちとけた口調で答えた。
「なにかあったら逃げてくるんだよ」
「ありがとう。ああ、そうだわ、すっかり忘れてた」
リアはアーチェとバートを順に見て、
「来週、町のカーニバルなの。アーチェさんに会ったら誘おうと思っていたんだけど、よろしかったらお父さまもご一緒にいらっしゃいませんか」
と、微笑んだ。
「もうそんな時期か。そう言えばいい季節になったものな」
というバートのつぶやきを、アーチェが聞き漏(も)らすはずはなかった。
「ハーメルのカーニバル！　お父さんたらあたしのこと一度も連れてってくれたことな

いじゃん？　毎年恒例なんでしょ？」
「い、いや、はてさて。どうだったかな？」
「ひっどーい！　おいしいものがいっぱいあるに違いないのにっ」
アーチェは眉を吊り上げて怒った。
「し、しかし、ただでさえうるさいおまえを、あんな賑やかなところに連れていったら大変……ぐえっ！」
アーチェのパンチが父親の脇腹に沈む。
リアはくすくすと笑い出した。
「仲がいいんですねえ。今年はうちも当番なので、両親もいますから」
「行く行くっ。絶対遊びに行くからさ」
「ふふっ。それじゃ待ってますね、アーチェさん」
リアは小さく手を振ると、橋を渡って帰って行った。
後ろ姿が見えなくなるまで見送って、バートはしみじみと漏らした。
「お父さん、ああいうもの静かな娘が欲しかった」
「もう一発お見舞いされたいみたいね」
拳を突き出す娘に、バートはふっと苦笑する。

「そんな暇があったら友だちのために祈ってやることだ。これ以上危険なことが起こらないように」
「……そうでした」
アーチェは素直に頷いた。

ハーメルの町のカーニバルは、毎年春に催される。最初は町の人々だけでこぢんまりと春の訪れを祝っていたのが、いつの間にかかなり遠方の住民たちもやってくるようになり、現在の形に落ち着いたのだという。
「へええ〜、これがカーニバルかあ！」
町の入り口に立ったアーチェは、目を丸くした。ぴょんと跳び上がってみても、人の頭がぎっしりで、先がまったく見通せない。
道の両脇には露店が並び、色とりどりの風船が飾られている。日用雑貨や特産品を売る、北ユークリッドやベネツィアの行商人たちの店だった。彼らの威勢のいい呼び込みに行き交う人々が足をとめるため、よけい混雑しているのだ。
「お祭りっていうよりは、市みたいだね。どっからこんなに人が来たんだろ」

「ふむ。ここの連中は信心深いから、いちおうは神への感謝という範疇でやってるつもりなんだろうがな。だが、そのうち酒が入ったよそ者たちが騒ぎだす。盛り上がるのはこれからさ」
　薬を納めに来たときに何度かカーニバルに遭遇しているバートが笑った。
　そのとき、人ごみの中から、
「アーチェさぁん！」
　というリアの声が聞こえた。リアは人の波に押されながら、アーチェたちのところへ走ってきた。
「リア！　よかった。人が多くて会えないかと思ったよ」
　アーチェがリアの手を握りしめた。
「大丈夫よ、アーチェさん。混雑しているのは店の出ているこのあたりだけですから」
　リアは言い、バートに向き直ると会釈した。
「父と母がお待ちしています。どうぞ」
　リアの両親は、町の中央にある広場にいた。
　まわりを豊かな水に囲まれ、ちょうど浮島のように見える。そこではハーメルの住民

が食べ物の屋台をいくつか出していたが、ふたりは今年、持ち回りの当番でそれらの責任者をしていた。
「これはこれは。先日は娘が大変お世話になったそうで」
バートとアーチェを認めるなり、すかさず頭をさげたのはリアの父親のほうだった。
初対面の者に威圧感を与えるのに充分な、立派な口髭(くちひげ)をたくわえていたが、腰は低いらしい。やや遅れて会釈した妻は、きつい感じの美人だった。
「いえいえ。なんのおかまいもできませず……」
堅苦しい挨拶が苦手なバートが口の中でもごもご言っている間、アーチェは屋台が気になってきょろきょろとあたりを見回していた。
(きゃー、りんご飴に海鮮焼きに、ステーキまで!? どれから食べよう)
「え」
アーチェの目がぴたりと止まる。白とオレンジの縞模様(しまもよう)のひさしの下に、見覚えのある顔を見つけたからだった。黒い巻き毛の少年だ。
(あの子……モール?)
視線を感じたのか、なにか調理していたらしいモールが顔をあげる。
目が合ったとアーチェが思った瞬間、モールの瞳が大きく見開かれた。

「ああっ!?　なんだあれっ」
アーチェの背後を指さして叫ぶ。浮島に居合わせた数十人の人々の視線が、いっせいにモールの示す方向に注がれた。
「あっ」
アーチェはまず、水面を走ってこちらに近づいてくる速い波を見て驚いた。
「危ないっ！」
バートが叫ぶ。リアの父親が浮島の水際へあとずさった。
グワオォォーッ！
獣の咆哮（ほうこう）と共に姿を現したのは、人間の五倍の大きさはあろうかという、豹に似た一匹のモンスターだった。浮島に着地したモンスターは、弾みをつけてリアの父親に襲いかかった。
「きゃあああっ、お父さまっ！」
リアが叫ぶ。
と、モンスターと父親の間でなにかがきらめいた。
「早く逃げるんだ！」
どこから現れたのか、ひとりの若者が抜き身の剣を構えてモンスターを睨みつけてい

る。

若者は枯葉色のマントを着ており、長身で、絹のように細い銀髪を肩まで伸ばしていた。

(ど、どうなっちゃってるの？　まさかカーニバルの余興じゃないよね)

アーチェの目の前で、標的を変えたモンスターが若者に躍りかかる。が、銀の刃はあざやかな弧を描き、目にも止まらぬ速さで獣の肉を幾度も斬り刻んだ。

グ、ググワアアァァァァ――ッ!!

断末魔の声をあげながら、モンスターが落ちる。派手な水しぶきがあがった。

第二章

「あ、ありがとうございました……」
モンスターが水没したあと、浮島を包んでいた沈黙を破ったのは、リアだった。
リアは水際に立っている若者に近づくと、深々と頭を下げる。
「いや」
若者がちらりと歯を見せると、まわりの者たちはようやく緊張がとけたように、ほうっと吐息をもらした。
「お若いかた。私はこの町に住むランブレイ・スカーレットといいます。これは妻のネリー。そっちが娘のリアです。危ないところをお助けいただき、礼の申し上げようもない」
リアの父親は、いかにも人馴れした口調で右手を差し出す。
「お名前をお聞かせいただけまいか」

「私はシノン。シノン・ハーディアです」
シノンと名乗った若者は、ランブレイに自分の手を委ねながら軽い会釈をした。細くしなやかな銀髪がさらりとすべる。
「シノン君か。実にいい腕だった。きみがいなかったら今ごろは私が水の中に沈んでいたことだろう。さぞや高名な剣の使い手なんだろうね」
「とんでもありません。私はただの流れの剣士です。旅の途中で今日のカーニバルに出会い、見物しているうちに先刻のモンスターが目の前に現れたものですから……ご無事でなによりでした」
シノンは青味がかったグレイの瞳を細めて微笑んだ。
そのとき、水を隔てた向こう岸から、男の声が響いた。
「おーい！　誰か落ちたのかぁ？」
やはり今年当番にあたっている武具屋のおやじだった。さっきの水音をどこかで聞いていたらしい。
「大丈夫、なんでもない！」
ランブレイは大きく手を振ってみせる。それからシノンに向き直ると、
「シノン君、先を急いでいるわけでないのなら、あとでちょっと話をしないか。礼もし

たいし、ぜひうちに寄ってくれたまえ」
「……いえ、そんなつもりでは」
躊躇（ちゅうちょ）するシノンに、妻のネリーがたたみかける。
「ぜひそうしてくださいな。あなたのように美しい男性が来てくださったら、リアも喜びますわ」
「はあ」
シノンが横にいたリアに視線を注ぐと、彼女は真っ赤になって、
「お母さまったら。なに言ってるの！」
と、恥ずかしそうに顔をそむけた。
「おっと、見回りの時間だ。それではのちほど」
スカーレット夫妻が浮島にかかる橋を渡って行ってしまうと、黙って一部始終を眺（なが）めていたアーチェが、初めて水際に近寄った。
「お父さん」
「ああ。浮いてこないな」
しゃがんで水中を覗き込んでいたバートが頷く。
「ここの水って海の水？」

「いや、この町の水脈は複雑でね。海水と真水の両方が流れ込んでいるんだが、ここは真水らしい」

アーチェはひとさし指の先を水につけ、ぺろりと舐めてみた。

「ほんとだ。しょっぱくないや。海水なら浮いたかもしれないのにね、モンスター」

そのとき、背後の気配に気づいたバートはなにも答えずに立ち上がった。すぐ後ろにシノンがいた。

「きみ、ここは初めてか」

「はい」

シノンが頷いた。

「じゃあ案内するよ。といってもそんなにでかい町ってわけじゃないけどな。ああ、私はバート。この娘の父親だ」

「お供します」

バートはシノンを橋のほうへ促しながら、アーチェに言った。

「そういうわけで、夕方ここで落ち合おう。あんまりバカバカ食い過ぎるなよ」

くっ、とシノンが喉の奥で笑う。

「な、なによっ。ひとをうわばみみたいにっ！」

アーチェは地面をダンッと踏み鳴らして喚(わめ)いていたが、バートたちの姿がすぐに向こう岸の人の群れの中に消えてしまうと、くるりと振り向いた。
「さありア！　なに食べよっか」
その顔には幸せそうな笑みが浮かんでいる。
「私はなんでもいいですよ。そんなにお腹もすいていませんし」
「あ、あいつ。こっち見てる」
「え、誰？」
アーチェは屋台のひとつを指さした。
「ほら。右からふたつ目の。あれが前に話したモールだよ」
「えっ」
アーチェはリアの腕をとるとずかずかとモールの屋台に近づいた。
「あんた、なにやってんのさ」
「なにって、見りゃわかるだろ。スパゲティ屋でございい」
モールは両手を広げて肩をすくめた。
「じゃあ、アーチェさんの言っていた怪しい男って」
「ううん。怪しい男を見たっていう、もっとずっと怪しい少年」

「こらっ」
モールがスパゲティをすくうトングを突きつけた。
「誰が怪しいんだよっ。俺はリアさんを心配して……」
「私をご存知なんですか」
リアが驚く。とたんにモールの顔に失望が走った。
「あ、やっぱり俺のこと知らないんだ……リアさんの家の近くに住んでるのに。ときどき道ですれ違ったりするじゃないか。俺、モール・リーベン」
「リーベンさん？　もしかして御夫婦揃ってベネツィアへ行ってらっしゃるっていう」
「そうそうっ」
モールはぱっと顔を輝かせ、急に饒舌になった。
「俺の父ちゃんと母ちゃんはさ、あと何年かしたらこのハーメルの町で食堂を開くことになってるんだ。今は勉強のためにベネツィアの料理店で修行中なんだよ。だから俺はひとりここに残って家を守って、独学で料理をやってる」
「まあ。えらいのね」
リアが感心すると、モールはふにゃっとにやける。
「それほどでも、ないけどさ……そう言えばこの間はかってにあんなことして悪かった

な」
「あんなこと？」
　首を傾げるリアから離れ、アーチェはそっとモールの背後にまわる。そして屋台に置いてあったスプーンを手に取ると、鍋の中で湯気をたてている何種類かのスパゲティソースを順番に味見しだした。
「いや、だからリアさんちの窓に板を打ちつけたりして」
「ええっ、あれ、あなたが!?　父も母も誰の親切だろうって、ご近所に聞いてまわったんですけど、結局わからずじまいだったの。どうして言ってくれなかったの」
　モールは「へへ」と頭を掻き、
「男は自分の善行をわざわざひけらかしたりしないもんだろ」
　と胸をはった。
「ひけらかしてるじゃん。ぺーらぺらぺーらぺらと」
「ああっ！　おまえ、なに食ってんだよっ！」
　突然脇からにゅっと顔を出したアーチェに、モールは驚きの声を上げた。
「トマトソースはいまいちだけど、このイカ墨はなかなか……」
　にいーっと笑うアーチェの歯は、まっ黒だった。

「売りもんだぞ、これはっ」
「ははーん。この間、あたしが言ったからイカ墨売ることにしたんだね」
「うるさい。ちょっと頭からはなれなくなっちゃっただけだよっ」
モールは、しっしっとアーチェを追い払う仕草をした。
「ごめんなさい、モールさん。彼女、アーチェさんは私の大切なお友だちなの。お金はお支払いしますから」
リアがおろおろすると、モールは太い眉毛を思いっきり下げ、
「いや、金なんかいいんだけど。リアさん、ほんとにこんなハーフエルフと友だちなのかい」
と訊ねる。
「こんな、ハーフエルフ?」
アーチェがぎろっと少年を睨む。
「どういう意味よ。なーんかいま、すっごーい差別された気がした」
「だって俺、純血の人間の女性しか好きにならないって決めてるんだもん」
「あーっ、しゃあしゃあとこの小僧がっ」
アーチェはイカ墨のついたスプーンを投げつけたが、モールはひょいとかわす。スプ

ーンはきれいな弧を描き、水の中にぽちゃんと落ちた。
「なんでそういうこと言うかな」
アーチェはモールをじっと見つめた。
「あたしはたまたまハーフエルフに生まれたけど、それだけのことじゃん」
「けど、エルフの血を引く女と一緒になったら不幸になるって、父ちゃんが。寿命が違うからな。おまえ……アーチェだっけ？　どうせ何百年も生きるんだろ」
「まあね」
「だったら俺はやっぱリアさんがいいな～。思ってたとおりの優しい人だし」
モールは、ぽっと頬を染めて照れる。
「なにそれ」
「あのう、モールさん。私……」
アーチェはすばやくリアに首を振ってみせた。リアは素直に口をつぐむ。
（この子、リアのこと人間だと思ってるんだ……）
確かに、ランブレイもネリーもハーフエルフにしてはその特徴があまり顕著でないようだった。
尖っているはずの耳は髪に隠れていたし、瞳も光線の加減によっては赤色っぽく見え

るという程度だろう。なによりリア自身が人間とほとんどまったく変わらないのだから、モールが勘違いするのも無理はなかった。

(わざわざ夢をこわすこともないよね)

アーチェはふうっとため息をつく。

「リアさん。あっちのテーブルで待っててよ。俺、ここらの屋台のうまそうなものみつくろって持って行くよ」

モールが浮島の真ん中あたりにしつらえてある休憩用のテーブルと椅子を示した。

「あたしの分もよろしくね。ステーキはよく焼いてもらって」

アーチェはそう言い置くと、さっさと屋台の前を離れた。さっきより大分人が増えてきたようだ。

「ふん。年下のくせに生意気なやつぅ」

ちょっとかわいいけどね。アーチェは言葉には出さず、密かに思った。

バートとシノンは、人ごみに押されながら歩いていた。

「あんた、生まれはどこだい」

「……」

「ユークリッドじゃなさそうだが、アルヴァニスタ？」
「……いえ、ミッドガルズです」
シノンが答えると、バートは一瞬目を見張った。
「ふうん。それにしてもずいぶん戦い慣れてるんだな」
「そんなことはありませんよ」
一周した、とバートがつぶやくと、シノンは耳を寄せた。
「町をひと周りしちまったって言ったんだよ！　ああ、こううるさいとおちおち話もできんな」
バートはシノンの袖をひっぱって、細い路地へ逃れた。
「ふう。なあシノン。ちょっと前にさっきのスカーレットさんの家で異変があったんだが、それについてなにか知らないか」
「いいえ」
シノンは驚きの表情で、きっぱりと首を振った。
「言ったでしょう。私はさっきこの町に着いて、たまたまあそこに……」
「そうかな」
バートは目の前の若者の剣にじっと視線を注いだ。

「間違っていたら許せよ。タイミングやあのときの立ち位置からして、俺にはどうしてもおまえさんがあの場所で待っていたとしか思えないんだな」
「は。待っていたって、誰を？」
「決まってるじゃないか。モンスターが出るのをだよ」
シノンがハッと息を飲む。
「バカな……！」
「そうか。ならいいさ。俺の思い過ごしらしい」
バートはあっさりと頷き、深く追求することはせずに、
「この先をまっすぐ行くと浮島だから」
と教えた。
「俺は先にローンヴァレイに帰る。娘に会ったらそう伝えてくれ」
「いいんですか、一緒に帰らなくて」
「なあに、コクジャクソウが待ってると言えば納得するさ」
バートはひょいと片手を上げると、路地を出て人ごみに紛れた。
ひとり残されたシノンは、しばらくの間自分のブーツの先を険しい目でじっと見つめていた。表通りの喧燥(けんそう)もほとんど耳に入らない。

が、やがて顔を上げると、浮島に向かって歩き出した。
来賓用のダイニングテーブルには、湯気の立つ料理が、ところせましと並べられている。
昼間のうちにランブレイの報せを受けた、助手のサムズが用意したものだった。サムズは二十代半ばくらいの、痩せてひどく顔色の悪い男だったが、料理を並べ終わってしまうとランブレイになにか仕事を言いつけられたらしく、奥へ引っ込んでしまった。
テーブルについているのはスカーレット家の三人と、アーチェ、シノン。そしてリアから話を聞かされ、ランブレイが急きょ招待したモールの六人だった。
「さあさあ、どうぞ遠慮なく召し上がれ」
ネリーが客たちのグラスに、赤いワインを満たしてゆく。
「うわあ、きれいな色！」
アーチェがグラスを持ち上げて舌なめずりすると、ネリーが微笑んだ。
「でしょう？　これは我が家のハウスワインなんですよ」
「へえ？」
「アーチェさんはスカーレットの意味をご存知かしら。スカーレットは緋色、赤よ。あ

なたのきれいな瞳のようにね」
　モールが小声で、
「けっ」
　と吐き捨てる。
「そっかあ。だから赤ワインね」
　アーチェはぐいとグラスをあおった。
「おお、いける口だな。お父上にも寄っていただければよかったんだが」
　ランブレイが残念そうに言うのに、
「いいんだよ。カーニバルの日にコクジャクソウを干してくるのが悪いんだもの」
　と、けらけら笑う。
「コクジャクソウというのはなんなんだ?」
　シノンが訊ねた。
「黒い雀の草って書くんだよ。谷で採れる薬草なんだけど、単独ではあんまり使わない。三日か四日干してから他の薬にほんのちょびっと混ぜると、効き目が増すの。でも日没後の風に当てると、逆に薬効が弱くなっちゃうんだ」
「それで早めに家路についたのか」

「そういうこと」
グラスを明かりに透かしていたモールが、
「すげえシャンデリアだな」
と漏らす。ランブレイは笑い、
「よそ者に盗まれなかったのは、きみが機転をきかせて窓をふさいでくれたおかげだよ」
と礼を言った。
「しかしシェフを目指しているだけあって、器用なものだったな。私はてっきり大人の手だと思ったがね」
「いやあ。俺、包丁持つ前は剣士になりたかったんです。カッコいいから」
モールは横顔を見せているシノンに憧れのまなざしを向けた。
モンスターを倒すところを目の当たりにして、すっかりファンになってしまったらしい。
「あなた」
ネリーが夫に目配せする。ランブレイは頷き、シノンに話しかけた。
「ところで、きみはしばらくこの町にとどまる気はないか」

「と、おっしゃいますと？」
シノンはフォークを静かに置いた。
「きみの腕を見込んで、単刀直入に言わせてもらう。リアを守って欲しいのだ。ま、平たくいえば用心棒だな」
リアが驚いて父親とシノンを見比べる。
「実は先日ダイニングルームに置いてあった花の鉢が爆発してね……ああ、ここじゃなく、家族用のダイニングなんだが、原因がさっぱりわからない」
「ええ。そのことは昼間パートさんに少し聞きましたが……」
「私たちは仕事がら留守にすることが多くてね、心配なんだよ。幸い、空いている部屋はいくつもあるし、礼のほうも充分に……」
「は、反対っ！」
ローストビーフの固まりを口に入れたまま立ち上がったのは、モールだった。
「そんな、それじゃリアさんとふたりっきりになるじゃないか。俺、許せねぇよ」
「いや、しかし」
「しかしもなにも、どうしてもっていうなら……ええと、そうだな、うん。俺んちに来ればいい！　どうせひとり暮らしだし」

アーチェは、頬を紅潮させているモールをじっと見つめた。だが、彼は自分の思いつきに夢中になっており、アーチェなど目に入らないようだ。
「いいだろ、シノン。暇なときは俺に剣を教えてよ。そのかわり、毎日うまい飯食べさせるよ。誰かに試食してほしかったんだ」
「都合のいいこと言っちゃって」
アーチェがつぶやくと、シノンは苦笑し、
「さて、どうしたものかな」
と考える顔つきになった。やがて、
「そんなに長期でなくてよろしいのなら、お引き受けしましょう。お役に立てるかどうか、わかりませんが」
と、ランブレイに返答する。
「本当ですの？　ああよかった」
ネリーがほっと胸をなでおろした。が、リアは眉をひそめる。
「なんだか怖いわ。お父さまがシノンさんにそんなお願いをするということは、あの鉢の爆発と今日のモンスターとの間になにか関係があると思ってらっしゃるのでしょう？」

「ただの偶然かもしれん。念のためだよ、リア」
ランブレイが娘を慰めた。
「そうと決まれば俺、シノンのベッドを用意しなくちゃ。うちは教会の裏だから、あとからゆっくり来るといいよ」
モールは勢いよくナプキンをテーブルに戻し、出て行った。
「さて、と。じゃああたしも帰るかな」
「えっ、アーチェさん、もう？」
カタンと音を立てて椅子から立ち上がったアーチェの腕に、リアが触れる。
「もう少ししたら花火が上がるの。とても綺麗よ。見て行ってほしいわ」
「ありがと。でもお父さんに遅くならないように言われてるんだ。ごちそうさま」
アーチェはその場にいる全員に向かい、曖昧(あいまい)に微笑みながら頭を下げると、スカーレット家を辞した。

玄関のドアをそっと後ろ手に閉める。
アーチェのくちびるから微笑が消えた。
(なんだろう。この気持ち……)

胸がジリジリする。

（今日はそうとう食べたからなあ。胸やけ？）

すうっと息を吸いこむと、夜の匂いがした。薄闇に耳を澄ますと、通りのほうでカーニバルの客が騒いでいるらしい声が聞こえた。

モールの顔が脳裏に浮かぶ。

「俺、許せねぇよ、か。ふんっ」

アーチェはハッとなる。

（あたし……やきもちやいてる!?）

「たはは。あんなガキンコにまさかね」

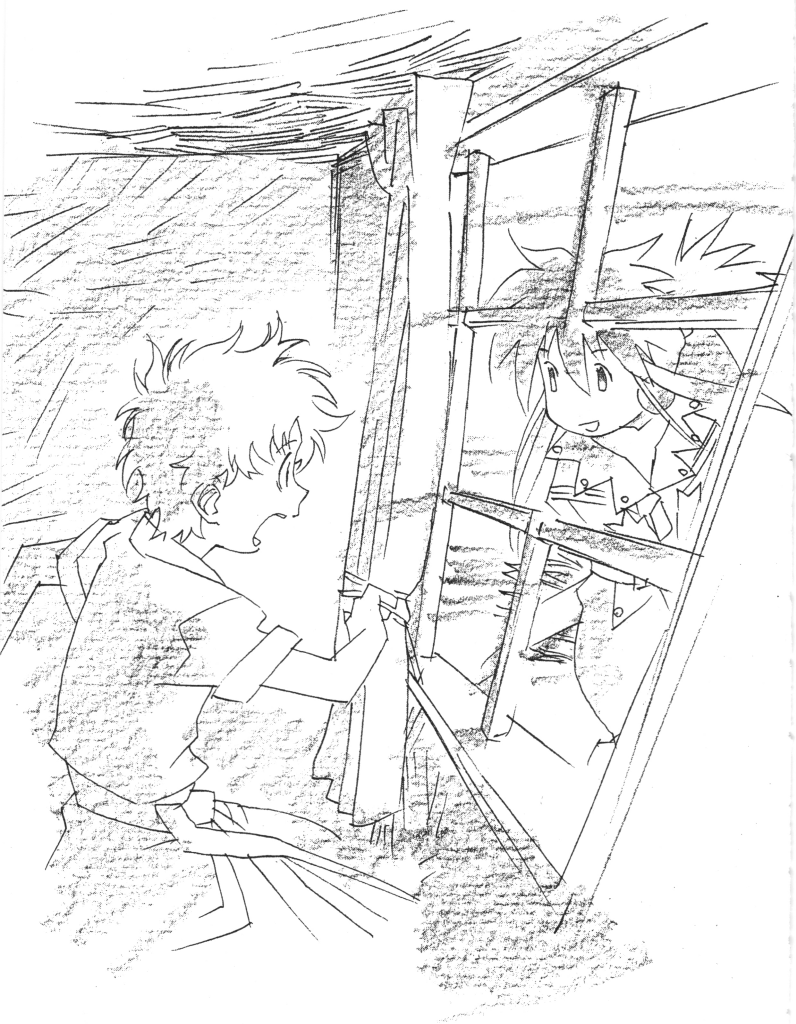
アーチェは自分でも気がつかないうちに、教会のほうに歩き出していた。人々が談笑している入り口を通り過ぎ、裏手にまわる。

モール・リーベンの家はすぐに見つかった。

こぢんまりした白壁の二階屋は、古びてはいるが、夜目にもなかなか住み心地がよさそうだ。

「ここかぁ」

アーチェは二階に明かりが灯っているのを認めると、ほうきにまたがった。

「あれ、いないや」
飛び上がって部屋の中を覗いた窓から、教会側の窓も開け放たれているのが見える。
その下に置かれたベッドに清潔なシーツがかけられているところをみると、ここが今夜からシノンの部屋になるらしい。
と、トントンと階段を上ってくる足音がした。モールだ。パンのかたまりや野菜を抱えている。
「おす」
「！　どわあっ!!」
アーチェが声をかけると、モールは飛び上がって驚いた。二階の窓の外に人影がふわふわ浮いているのだから無理もない。
「あたしだよ～ん」
アーチェは窓枠に腰かけて、にやっとした。
「なんだよ、魔女」
モールは部屋の隅にあるミニキッチンに食材をどさりと置くと、不機嫌に言った。
「それなに？」
「見りゃわかるだろ。自家製パンにからしバターにスモークハムに、晒(さら)しオニオン、レ

タス、きゅうり、トマトもある。シノンの夜食にするサンドイッチの材料だよ」
「ふーん」
アーチェはしばらく足をぶらぶらさせていたが、
「ねえ、料理人ってさ。味だけじゃなく、スピードも要求されるんでしょ」
と、小首を傾げてみせた。
「とーぜん」
「じゃあさ、サンドイッチもぱぱぱぱぱっって作れんの？　やっぱ無理？」
アーチェの好戦的な態度にモールはむっとし、
「見てな」
と吐き捨てる。
それから怒ったように手を動かすと、たちまち二人前ほどを作り上げた。
「やるじゃん？」
アーチェが楽しそうに声をあげて笑ったとき、教会側の窓の向こうが明るくなった。
シュルルルルル……パ――――ンッ！
「打ち上げ花火だっ、ほらっ」
「へっ。そんなの珍しかねぇよ」

パ————ンッ!!
大輪の花が次々と夜空に咲き、モールの横顔を美しい赤や緑に染め上げる。アーチェは思わず、ストンと窓枠から部屋の中に降りた。
「……モール」
「ん？」
「あ、いや、なんでも……」
キッチンにあったナプキンを勝手に広げ、アーチェは手早くサンドイッチを包む。
「じゃ、そういうことで。ごちそうさん」
「なにっ!?　言ったろ、それはシノンのだって！」
アーチェは眉を吊り上げているモールを振り返ると、薄く笑った。
「ちょっと見え見えなんじゃない？　親切そうにしてるけど、結局はシノンの世話をすればリアに近づけると思ってるだけじゃん」
「悪いかよ」
「そうは言ってない。けど、だったらあたしにも親切にしたほうがいいんじゃないの？あたし、リアの友だちだもんね」
「……」

シュルル……パパァ――ンッ！
窓を背にしたモールが、今度はブルーに染まる。
「やな女だな、つくづく。さすがは」
「さすがはハーフエルフ？　ふふん」
「青い花火の下でも真っ赤だぜ、目」
アーチェはもうなにも言わずにすたすたと窓に近寄り、ほうきにまたがると夜空へ飛びたった。

食後の酒をすすめられたシノンは、やんわりとそれを断ると、ランブレイに訊ねた。
「二、三、お聞きしたいのですが……ご夫妻はどんなお仕事を？」
ネリーはすばやく、「研究職ですわ」と口をはさみ、
「リア、花火が始まったようよ。二階で見ていらっしゃい」
と娘を促した。
「そうします」
リアが出て行ってしまうと、ランブレイが口を開く。
「我われ夫婦は魔術師でね。それに関係したことをいろいろとやっているんだ」

「そうですか。ひょっとして以前ミッドガルズにいらっしゃったことはありませんか」
シノンの唐突な問いに、夫妻は黙って顔を見合わせた。
「いや、実は私はミッドガルズの出身なのですが、きょうおふたりを見たとき、どこかでお会いしたことがあるような気がしたもので……」
「ほう」
ランブレイは微笑を浮かべたまま、油断のないまなざしでシノンを見た。
「確かにミッドガルズに住んでいたことはあるが……」
「ええ。でもシノンさんのような美青年とお会いしていたら、主人はともかく私が忘れるわけはありませんし……人違いじゃありません？」
ネリーはまるで、ミッドガルズと自分たちを結びつけてくれるなというような口ぶりで言った。
「そうですか。じゃ、きっと私の勘違いでしょう。それからランブレイさん、過去に今日のような危ない目に遭われたことは？」
「おいおい、モンスターにだって!?　あんなこと度々あってたまるものかね。せいぜい猫に引っ掻かれたくらいだよ」
大げさな身振りでランブレイは答え、それから、

「そういえば」
と宙を見つめた。
「闇夜で酔っ払いに襲われたことはあったっけな。そう、あれはミッドガルズだった。訳のわからない言葉を叫びながら刃物を振るわれたが、なんとか逃げたんだ。それくらいさ」
「わかりました。念のためお聞きしたまでのこと。お気を悪くなさらないでください」
シノンは静かに立ち上がった。
「モール君が待っているだろうから、これで。明日の朝またおじゃまします」
「待ちたまえ」
ダイニングルームのドアに手をかけたシノンの背中を、ランブレイが引き止める。
「自分のことはなにも話さないのか。ミッドガルズに家族はいないのかね」
「私ですか。私はひとりです――」
シノンはゆっくりと振り向いた。
「親は三人いました。実の両親と、母の死後家に入った義母です。三人ともすでに亡くなりましたが……。その後、義母の連れ子だった義姉(あね)と暮らしていました」
「まあ。じゃあお姉様はご結婚されて?」

ネリーの言葉に、シノンは淋しげに微笑んだ。
「ひとりだと言ったでしょう。義姉も亡くなったんです」
「……！」
「美しいひとでした。あなたがたと同じハーフエルフでね。自害したということになっているが、本当は殺されたも同じなんです……ダオスに」
「ダ、ダオスですって⁉」
ネリーの顔からさっと血の気が引いた。
「失礼します」
シノンが出て行ってしまうと、ネリーは思わず夫の肩を掴んだ。
「あなた、あの人……」
「うむ。もしかしたらデミテルの手の者かもしれん」
「まさか。デミテルが突然うちを出て行ってから、もうずいぶんたつじゃありませんか」
「しかし、我われの魔科学に関する研究が完成に近づく頃合いを見計らっていたのかもしれないだろう？」
ランブレイは、目をかけていた弟子のデミテルに裏切られたときの悔しさを思い出したのか、口髭に半分隠れたくちびるを噛みしめた。

「どちらにしてもすべては憶測に過ぎん。たしかにミッドガルズにいたとき、世界征服を狙うダオスの手下に研究をやめるよう脅されたことはあった——魔科学という未知の力が脅威だったんだろう。だがミッドガルズやダオスのことを口にしたからといって、怪しいという法はない。誰でも知ってることだからな。そして私たちはリアを守ってくれる者を早急に必要としている。大丈夫、シノン・ハーディアについてはサムズに調査させるとして、しばらく様子をみようじゃないか」

最後は子供に言い聞かせるような口調で、ランブレイは妻を安心させようと大きく頷いてみせた。

冷んやりした夜の空気のなか、シノンは一歩一歩大地を踏みしめるように歩いた。

小一時間前、アーチェが辿(たど)ったのと同じ道である。

(どうやら顔は見られていなかったらしいな。しかも酔っ払いの仕業だと思っているようだし……)

シノンは今さらながらにほっと息をつく。首尾よくスカーレット夫妻に近づけただけでなく、リアの身辺警護のためにこの町にとどまるという大義名分まで与えられたのは、幸運としかいいようがなかった。

教会の横を曲がったときだった。斜め上に邪悪な気配が生じる。
(来たか?)
シノンは剣を抜き、暗い上空に視線をさまよわせたが、なにも捉えることはできなかった。が、突然なにかが彼の肩をかすめて飛ぶ。
「たあぁっ!」
ビシュッ!
剣を払うと、意外なほど軽い手応えが伝わってきた。
「なんだ、コウモリか」
シノンは、まっぷたつになって地面に落ちている黒いかたまりをブーツの先で転がして苦笑する。
〝忘れないで――!〟
ふいに、せっぱつまった女の声が脳裏に甦った。シノンの目の前で自害した、義姉のミリアム・ハーディアの声だ。
「ねえさんっ?」
シノンはハッと顔を上げる。
〝忘れないで、シノン! 二度とダオスの手下なんかの言いなりになっちゃダメよ。心

が迷いそうになったら今日のわたしを思い出しなさい！〟
目の前の暗がりに、ミリアムの鮮血が飛び散ったのを見た気がして、シノンは、
「うわあっ」
と声をあげ、その場にうずくまってしまう。頭の中が軋むように痛んだ。
「うう……」
シノンはしばらくじっと耐えていたが、眉間にぐっと力を込めて再び歩きだす。
モールの家に着くと、呼び鈴を鳴らした。
「シノンっ⁉」
勢いよくドアを開けた少年の顔がうれしそうに輝くのを見て、シノンの中に再び現実がすとんと落ちてきた。
「遅かったじゃないかぁ」
「悪い。スカーレットさんに酒をすすめられて」
「来て。シノンの部屋、二階にしたからねっ」
モールはシノンの手をとると、階段のほうへ引っ張った。
「ははは。そう急ぐなよ」
「あ、笑った。シノン、ずっと怖い顔してたから、笑わないひとかと思ってたのに」

「まさか」
シノンは自分の胸の高さにある少年の巻き毛を、すっと撫でた。
二階に上がると、モールはまず綺麗に盛りつけられたサンドイッチの皿を差し出した。
「これ、夜食な。ほんとはもっといっぱいあったんだけど、さっきあのバカ女が飛んできて、持ってっちゃったんだ」
「飛んできた？　アーチェのことかい」
頬を膨らませるモールに、
と、訊ねる。
「そうっ。あのハーフエルフだよ。リアさんもなんでよりによってあんなのと友だちなんだろうな」
シノンは教会側の窓を閉め、ベッドに腰かけた。
「モールはアーチェが嫌いなのか。それともハーフエルフが？」
「んー、両方だな」
モールは、階下から持ってきたランプの灯を、器用な手つきで別のランプに移した。
「しかし、嫌いは好きの裏返しというじゃないか」
「ばっかみてぇ！」

モールがいきりたつ。
「俺、あの真っ赤な目がダメなんだって。吸い込まれそうで怖いんだよ」
「怖いは好きの裏返し……とはいわないか。まあいい」
シノンはちょっと肩をすくめ、
「とにかくこれからよろしく頼むよ。仕事のことは明日の朝スカーレット夫妻が出かける前にいろいろ決めてくるつもりだが、たぶん剣を教える時間はたっぷりあると思う」
と笑う。
「やったねっ。それじゃ、俺は階下(した)で寝るから。おやすみ」
モールはトントンと階段を降りかけたが、すぐに戻ってきて、照れたように言った。
「あのさ、シノン。俺、あんたみたいな兄貴がいたらどんなにいいだろうって、チビのころからいつも思ってたんだ。うれしいよ」
「買い被るなよ……でも、ありがとう」
「うん」
シノンは遠ざかる足音を聞きながら、ベッドに入るためにブーツを脱ぐ。
もしこのときアーチェが入ってきた窓を開けてみたなら、道を隔てて生えている樹の陰に隠れ、リーベン家の二階の様子を窺(うかが)っている男を発見することができたかもしれな

い。
男は目をぎらぎらさせて荒い息を吐いた。その髪は何本もの太い房になって垂れ下がっている。まるで蛇か縄のようだった。

肩先が冷える感覚に、バートはハッと目を覚ました。
「いかん……寝ちまったらしい」
ローンヴァレイに帰り着き、無事に黒雀草を取り込んだあと、ソファに横になったのがいけなかった。
「ん？　アーチェ、いつ帰ったんだ？」
バートは体を起こしながら、膝を抱えて窓枠に座っている娘に声をかけた。
「おい、アーチェったら」
「あ？　ああ。起きたの、お父さん」
「いつ戻った？」
「……けっこう前。もう夜中だよ」
バートは身を乗り出すと、訝しげに娘の顔を覗き込んだ。
「どうしたんだ。ぼーっとして、おまえらしくない。疲れたか？」

「んー」
「腹が減ったか」
アーチェはゆっくりとバートを振り返り、「サンドイッチ」とテーブルの上の包みを指さす。
「や、これはありがたい。ハーメルで買ってきてくれたのか」
「ううん。いたいけな少年をだまくらかして、ちょろまかしました〜」
バートは一瞬ぎょっとなったが、
「一緒に食べよう」
と娘を誘う。
「いーらない。見てよお父さん。夜半の月の悲しいこと！」
アーチェは窓の外を仰ぎ見る。谷の上に、大小ふたつの月がかかっていた。
「月が悲しい？　なに言ってんだ。ほんとに食べないのか？　寝るときになって口さみしくて眠れないとか言いだすなよ」
「口さみしいというよりは、ひと恋しいというカンジ」
「はぁ？」
バートは首を捻（ひね）っていたが、「まあな」と納得したように口を開いた。

「こんな淋しい谷に、若いみそらで隠遁生活だもんなあ。今日みたいに賑やかな場所へ出かけたあとは、気が抜けるのも無理はない」
「……」
なーるほど、とアーチェは密かに考えた。
(こんな谷にお父さんとふたりっきりだもんなあ。誰が訪ねてくるわけでなし……あたしは他人を受け入れることにも、拒絶したりされたりすることにも免疫がなさすぎるんだ)
いったん腑に落ちてしまうと、寄り添う月にまで嫉妬していた自分がバカバカしくなる。
アーチェは窓枠から降りると、テーブルでサンドイッチをぱくついているバートのそばへ行った。
「おい、えらいうまいぞ、このパン」
「そお？　あのさ。あたし、これからしばらくハーメルに通っていい？　リアのことも心配だし、それに……」
「ちょっと待った、あのシノンという男だが、あいつは……」
バートがあわてて真顔になるが、アーチェは遮り、

「違うよ。そのサンドイッチ作った子に料理を習おうと思うんだよね」
と言った。
「なんだ、結局は口さみしいんじゃないか、うちのお嬢さんは」
アーチェは包みからサンドイッチをさっとひと切れさらうと、
「へへっ」
と笑い、目を細めた。

第三章

「でも、それはどうかしら……」
リアは、アーチェの話を聞くなり、とまどい顔になった。
カーニバルから二日後の昼下がり。アーチェはリアを訪ね、いつものダイニングルームで、モールに料理を習いたいのだと打ち明けた。
「わかってるよ。あいつはあたしのこと、嫌ってるもんね」
「そうじゃなくて。彼なら二、三日のうちに屋台を出すんですって。ほら、アーチェさんと初めて出会った薬のお店の並びに、ちょうど空きスペースがあるでしょ？」
「んー？」
アーチェは前髪の先を見つめるような上目遣いになって考えたが、
「思い出せないな」
とつぶやいた。

「でもさあ、どうせ料理の屋台なんでしょ」
「ええ。修行するんだって、きのうシノンさんと一緒にうちに来て、はりきってたわよ。町の人たちのテーブルに、ひと品でいいから自分の料理をのせてもらいたいんですって」
「ふーん。どっちにしても手はあったほうがいいってことだよねえ」
アーチェがほくそ笑むと、リアが珍しくからかうような表情になる。
「アーチェさん。どうしてモールさんに？　お料理ならいちおう私だって得意なんだけどな」
「い、いや、それはそれとして……」
アーチェが口ごもると、リアは、
「彼が好きなの？」
と静かに友人を見つめた。
「そっ、そんなんじゃないもんっ。ただちょっと腹が立つくらい興味があるだけ。もっとあいつをよく知って、弱点も知って、やりこめてやりたいんだよ！」
あわてて言い訳するアーチェに、リアは困ったような笑みを浮かべる。
「なあんだ。そんなの、好きとは言わないと思う」
「え？」

「アーチェさん、彼に反発しているだけみたい。人を好きになるって、もっと切実なものよ。忘れようとしてもその人のことが頭から離れないとか、気がつくといつも目で追ってしまっているとか……」
「や、やけにくわしいじゃん？」
アーチェはどぎまぎしながら、
「でも、料理習いたいって気持ちはほんとなんだよ。モールのことも、にくたらしいけどたぶん、す、好きだと思う……」
とつぶやいた。
「あ……でもひょっとして、リアもモールを好きだっていうなら話は別だけど？」
「そんな心配はいらないわ。ぜーんぜん」
と、リアが笑う。
「あーっ、いまのセリフ聞いたらあいつ、首くっちゃうかもよ？　リアさんリアさんって、うるさいんだから」
そのとき、コツコツと窓を叩く音がした。
「あれ、シノンじゃん」
アーチェは窓の外にシノンの長身を認めた。

「ええ。カーニバルの翌日から、日に何度か様子を見に来てくださってるの」
「ふうん。ほんとに守られちゃってるんだ、リア」
「おかげさまで、なーんにも起こらないわ」
鍵のかかっていない窓が音もなく開いたかと思うと、枯葉色のマントをひるがえして
シノンがひらりと部屋の中に入ってきた。
「やあ、アーチェ、来てたのか」
「……」
(あれ？　なんかこないだと感じが違うような……)
馴れ馴れしいというのとは違う。だが、先日のシノンは窓から気軽に出入りするよう
なタイプには見えなかったのだ。
「いつも窓からこんにちは、なの？」
アーチェの問いに、シノンはにやっとした。
「一日何度も来るのに、いちいち玄関の呼び鈴鳴らしてたんじゃリアだってたまらんだ
ろ。で、ふたりで考えてリアしかいないときは、この方式で行くことにしたんだ」
リアは「そうなの」と頷き、、
「アーチェさんも、よかったらこんどは窓からどうぞ」

と笑った。
「モールのところへも窓から入ったと聞いたぞ。私たちは気が合うかもしれないな」
シノンは軽口を叩きながら、家の中に異変がないかどうかを調べるため、ダイニングルームを出て行った。
「まだそんなにたくさん話をしたわけじゃないけど、シノンさんて意外と面白い人みたい。気難しかったら嫌だと思ってたんだけど」
リアが小声になる。アーチェはそわそわし、手を合わせてみせた。
「ねえ、さっきの話の続き。いまから一緒にモールのところへ行ってくんない？　リアがいれば一発ＯＫじゃん？　あいつ今どこにいるの」
「たぶん屋台でいろいろ準備しているんじゃないかと思うけど。ここに来るとき会わなかったかしら」
「えー、気づかなかったなあ」
アーチェは廊下を通るシノンの姿をドアの隙間に見つけ、
「ねえねえ。今からリアとふたりでモールのところへ出かけたいんだけど、いい？」
と、声をかけた。シノンは戻ってくると、
「もちろんかまわないさ。別にリアは軟禁されてるわけじゃないんだから、自由にして

いてくれ。けど、私も同行するよ。ちょうどあいつに剣を教える約束をしているし」
と言った。
「へえ。じゃああたしは魔法でも教えようかな」
「アーチェさん！　それはわたしのほうが先でしょうっ⁉」
真剣な顔でリアに迫られ、アーチェは、
「冗談だってば」
と苦笑した。

スカーレット家を出た三人は、モールのところへ行く前に、武器屋へ寄ることになった。
シノンが少年のために剣を注文しておいたのだという。武器屋は教会の前をまっすぐローンヴァレイ方向に進み、橋をふたつ越えたところにあった。
アーチェもリアも武器屋に入るのは初めてだった。店内は薄暗く、壁という壁にびっしり飾られた弓や剣が、鈍い光を放っている。
が、シノンは慣れた様子で奥まで進むと、
「いい出物はあったかな」

と、そこに腰かけていた店員に訊ねた。
「ああ、いらっしゃい。長剣で軽目のものをお探しでしたよね。みつくろっておきました」
店員はカウンターの上に、何種類かの剣を大切そうに並べてみせた。
シノンはひとふりずつ手に取り、丁寧(ていねい)に調べていたが、
「これにしよう」
と、ややごつい感じのする剣の柄をポンと叩く。
「えーっ。シノン、こんな長い剣モールに持たせて大丈夫なの？　あいつたぶん、包丁より長いもの持ったことないよ。ケガするんじゃあ」
アーチェが思わず口を出すと、金を払っていたシノンは首を振った。
「いや、身につけるからには実戦で通用する剣でなければ」
「あ……そういうもん？」
アーチェはドキリとして目を伏せる。
（シノンはほんとの剣士なんだっけ）
あの日、浮島でモンスターを切り刻んだシノンの姿が脳裏に甦った。

モールの屋台はまだ骨組みしかできていない状態だった。しかもついさっきまで町の所有である屋台一式の貸出許可を取るために、あちこち駆けずりまわっていたという。アーチェがモールを発見できなかったのも無理はなかった。
空き地はちょうど家一軒分ほどのスペースで、屋台ひとつのためにはどう見ても広すぎる感じだ。
モールはアーチェを見るなりなにか言いたそうに口を動かしたが、シノンが手にしている真新しい剣に気づくと、そちらに釘づけになってしまった。
「すっげぇ……シノン、ほんとに貰っちゃっていいのか？」
「ああ。木の枝を握って向かって来られても困るからな。それに」
シノンはモールに剣を手渡しながら、
「剣術はこれからおまえが生きて行くのに、きっと必要なものになるだろう」
と言った。
「う、うん」
モールはその理由がよくわからなかったのだが、曖昧に頷いた。
「なんだ、知らないのか？　この町はまだ平和で美しいが、世界はいま、次第に緊迫した状況になりつつあるんだぞ」

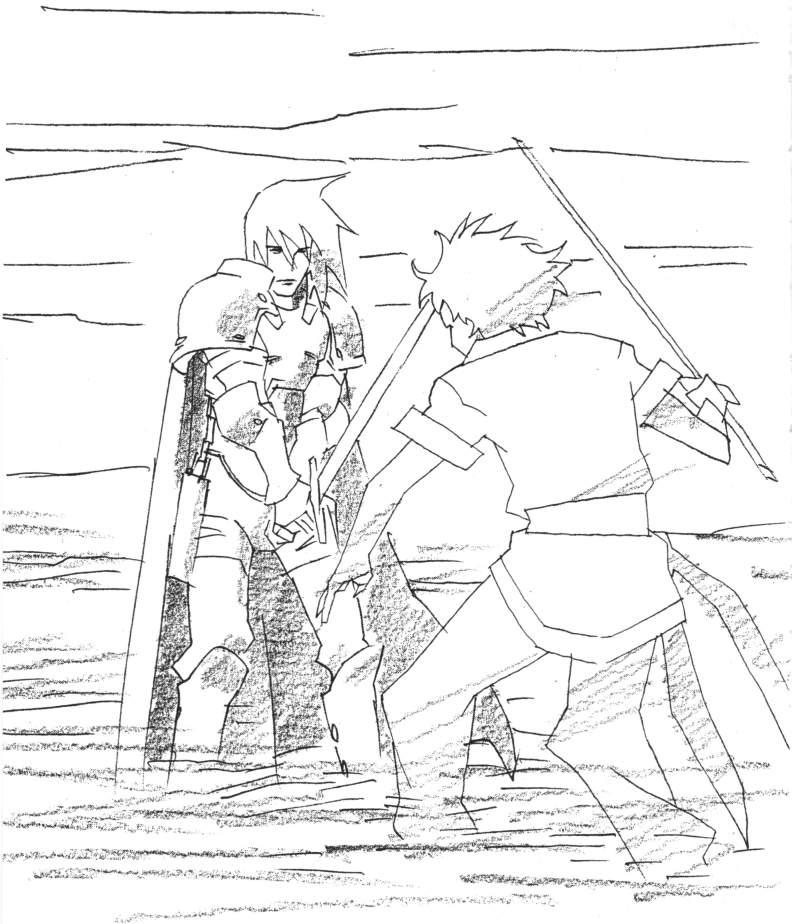
「なんで？」
「なんでって……まあいい。そのうち話してやるよ」
シノンは、軽いものを選んだにもかかわらず、剣の重みに目を白黒させているモールに薄い笑みを投げると、道の真ん中に出てきょろきょろしているアーチェに視線を移した。
「へーっ。二軒向こうが薬屋なんだぁ。こんなところに空き地があったんだねーっ」
「薬屋がどうしたって？」
シノンが訊ねると、
「アーチェさんのお父さん、薬を作ってらっしゃるんですよ」
と、リアが説明する。
「ほう、あの人がそんな仕事を」
シノンは、カーニバルの日に自分がランプレイの身辺を密かに守っていたことをバートに見破られそうになったことを思い出し、ほっとした。
（ただの薬師だったのか……）
そのとき、薬屋の扉が開き、中から主人が出てきた。
「誰がバカでかい声を出しているのかと思ったら、アーチェじゃないか。なにしてるん

だ」
　主人はモールとリアに親しげな笑顔を向け、
「なんだ。いつの間にやらみんな友だちってわけだな」
　と、納得したらしい。
「まあね。翠竜湯が取り持った仲ってやつですか」
　アーチェがわざとらしくリアの肩を抱き寄せると、主人も大げさに顔を顰(しか)める。
「困るんだよなあ、この町で友だち作られると。俺んとこに薬を買いに来なくなるだろ？　バートの薬は必ずうちを通してくれよな」
「だ、大丈夫ですよ。わたし、アーチェさんにそんなにたくさん薬を貰ったりしていませんから」
　リアがあわてて首を振る。
「正直だなあ。黙ってりゃわかんないのにさ」
　とアーチェが笑った。
「モールよ。うちのかみさんがおまえさんの屋台料理を楽しみにしてるんだ。晩飯の支度、手抜きができるってな。あんまりうまいもの作らんでくれよ」
　薬屋の主人はモールにも声をかけると、シノンをちらりと見、そのまま店に戻って行

った。
「せっこいなあ。必ずうちを通せ、だって」
　アーチェが肩をすくめる。
「あたりまえだろ。それが商売なんだからよ」
　モールはあきれた。
「なによぅ。あたしを助手に雇ってくれるお礼に、やけどと切り傷の薬くらいサービスしようと思ってたのにな」
「だから、そんなことしたらおまえの家の収入が減って……ええっ、お、おい、今なんて言った!?」
　モールがただでさえ大きな目をギョロリと剝いた。
「手伝うよ、屋台。もちろんボランティアだから気にしないで」
「か、勝手に決めるなっ！」
「だって、人手はあったほうがいいじゃん。あたしは料理を覚えられるし、みんなハッピー。ねっ」
　アーチェはすましてリアに同意を求める。
「……え、ええ。もっともモールさんがよかったらの話だけれど……」

「きったねーぞ、アーチェ」
モールはカッと赤くなり、はあっとため息をつく。
「人手があるんなら、わざわざこんなちっこい屋台なんか出すかよ……」
「どういうことだ?」
笑いを噛み殺していたシノンが訊ねる。
「うん……あのさ、ほら俺、ときどき父ちゃんと母ちゃんに会いにベネツィアへ行くだろ? 途中、山道が続くんだけどけっこうキツくてさ。ところが誰もいない宿屋があるんだ。通称つるばみ亭。シノン、知ってる?」
「いや。それで?」
と、シノンが先を促す。
「まあ、座ってよ。それ、ベンチ代わりにしようと思って持ってきたんだ」
モールは空き地に転がしてあった何本かの丸太を指さし、自分がまず腰かけに行った。
アーチェたちも続き、それぞれ適当な丸太を選んだ。
「その宿屋、前はちゃんと旅人のために営業してたらしいんだ。ベネツィア港の輸出入品を扱う商人たちの宿だよね。主(あるじ)がシェフも兼ねていてけっこう繁盛してたらしいんだけど、何年か前に突然モンスターどもの襲撃を受けて、廃虚になった」

「まあ怖い」
アーチェの横で、リアが小さく身震いする。
「以来、ずっと空き家状態だったんだけど、だんだん旅人たちのお休み処として知られるようになってさ。俺もそこを通るときは寝泊まりさせてもらってるんだ。アブない奴もなかにはいるけど、泊まり合わせたいろんな人からいろんな話を聞けて、けっこういいんだよな。ただ、食い物がない」
「なるほど。モールはそこで旅人たちのために料理をしたいというわけだな」
「そういうこと。父ちゃんと母ちゃんがハーメルに戻ってくるまでの間でかまわない。前の主がどんな人だったかは知らないけど……最近じゃモンスターが出たなんて話も聞かないし。だいいち旅の山中で思いがけなくあったかい飯にありつけたらうれしいじゃないか。そうだろ」
モールは目をキラキラさせながら、説明を終えた。
(熱い口調で語っちゃって……でも、いいじゃん?)
アーチェは膝に肘をつきながら、ぽけーっと少年の顔を見つめていた。
「と、まあ、これは理想の話。さあ、早いとこ屋台を作っちまおう」
モールは貰ったばかりの剣を適当に構え、さっと立ち上がった。早くシノンに稽古を

つけてもらいたくて仕方ないらしい。
「行こうよ！　その宿屋へ!!」
アーチェが叫んだ。
「はあ？　なに言ってんだ、おまえ。非現実的なやつだなあ。ひまなら手伝えよ」
「うん。そのかわり、助手の話はのんでよね」
アーチェは「ごっくん」とおどける。
「ははははは。術中にはまったな、モール。来い！」
シノンが剣を抜いた。むろんふざけているのだが、研ぎすまされた真剣は、モールには刺激が充分すぎるようだった。
「お、おう、行くぞっ。たあぁぁぁ――っ!!」
めちゃくちゃに斬り込む。モールの剣はシノンがわざわざ差し出してやった刃にあたり、かちん、と情けない音を立てた。
「きゃはははは～っ！　かちん、だって。かちん」
「んだとっ？」
アーチェはムッとしているモールを目の端に捉えたまま、ほうきにまたがって浮上する。

「敵をビビらせるには、もっと派手にやんなきゃ！　えいっ!!」
さっと右手を振り下ろすと、指先で何かがスパークしたように見えた。
ドッカアァァァ――――ンッ!!
アーチェの指から発せられた光が空き地に刺さったと思うと、抉れた土が宙に舞う。
「うわあぁあっ!!」
モールはびっくりして剣を取り落とした。屋台の骨組みはすっかり土をかぶり、すぐ横に直径二メートルくらいのかなり深い穴が、ぽっかりと口を開けている。
「あ、穴が穴がぁっ！　どうしてくれるんだよっ」
「どうって……ゴミでも捨てれば？」
アーチェは、すーっと降りてきた。
「だああぁっ、だから客商売のわかってない魔女はやなんだ！」
すぐ埋めなきゃ、とモールは頭を抱えた。

濃い霧に、石が黒く濡れている。
ヴァルハラ平原の北東にかかる石橋は、いつもながらのぞっとするような冷たさに包

まれていた。
「ジグビル、遅かったではないか」
橋の向こうから姿を現したのは、猛々しい獣のような女だった。
「手間どっているようだね。ダオス様もご立腹なさっておられる」
「はっ。申し訳ありません、ジャミル様」
目の前にひれ伏している部下は、その太い束のようになった髪を震わせて返答する。
「じ、実は、ジャミル様のお言いつけどおりハーメルのスカーレットを見張っていましたところ、意外な者を見かけまして……」
「ほう、意外な？」
ジャミルは微かに首を傾げる。
「それが、以前我われの洗脳を解いて逃走した、シノン・ハーディアなのです」
「なんと、あやつが！」
カッと目を見開いたジャミルは、ジグビルに鋭い声を浴びせた。
「すでに私の洗脳が解けているにもかかわらず、かつてのターゲットのもとに現れたとはどういう訳だ、ジグビル!?」
ジャミルは我慢ならないというように、拳を振り回す。怒りのために髪が逆立った。

「さ、さあ……ただ、おかしいのはそれだけではないのです。シノン・ハーディアはなぜかスカーレットたちを守っておるようでして……」

ふふふ、とジャミルが今度は低く笑う。

「まあいい。とにかくあの男はまだハーメルにとどまっているのだね？　ならばおまえはこれから急ぎ引き返し、あやつを再び洗脳するのだ」

「はっ！」

「そして、事が済んだら始末しておしまい。一石二鳥というわけさ」

「かしこまりました」

「ダオス様の信頼厚いこの私、ジャミルにこれ以上恥をかかせたら承知しないよ！」

「はっ」

ジグビルがゆっくり顔をあげたとき、すでにジャミルの姿はなかった。

霧がますます濃くなる。ジグビルは橋の向こうにそびえたっているはずのダオスの城を透かし見ようと試みたが、すぐに諦め、その場を立ち去った。

ちょうど同じころ。ヴァルハラ平原の南、ミッドガルズ城下には、サムズの姿があった。

ランブレイ・スカーレットの助手である彼は、言いつけに従い、シノン・ハーディアの生家を探して歩いていたのだ。
かつてスカーレット一家と一緒にミッドガルズで暮らしていたこともあったのだが、いざ一軒一軒の表札を調べてまわろうとすると、あらためて都の広さを痛感しないわけにはいかない。もともと体が丈夫でないうえ疲労が重なり、ただでさえふだんから顔色のよくない彼はすっかり青ざめてしまっていた。
(……少し休もう)
サムズは値段の安そうな食堂に入ると、壁際に腰をおろす。すると、隣りのテーブルで酒を飲んでいた中年の男が、
「にいちゃん。どっか具合でも悪いのかい」
と声をかけてきた。
「まっ青だぜ。オレはまっ赤っ赤だろ？　なんでも噂じゃあ、もういつ戦争がおっ始まってても不思議じゃないっていうじゃねえか。俺ぁナイーブでよぉ、おっかなくってついつい飲んじゃうんだ」
怠け者め。サムズは思ったがむろん言葉には出さず、
「ハーディアさんのうちを探しているんですが」

と切り出した。
「ハーディアだって？　それは城の東に住んでいた、あのハーディアのことか」
「シノン君というんです。その、昔の友だちで」
「あー、うんうん。しかしそりゃ訪ねてくるのが遅かったな。俺ぁよく知ってるが、あそこの連中はみんな死んじまったよ。ひとり残った息子のシノンは旅にでも出ちまったのか行方知れず。家はついこの間取り壊されちまってね」
サムズは色の悪いくちびるを歪めてにやりと笑った。確認がとれたのだ、一刻も早く戻らねばならない。
ちょうどやる気のなさそうなおかみが注文を取りに来たが、それを手で遮って席を立つ。
男は酔いに濁った目でサムズを見上げ、下卑(げび)た笑いを浮かべた。
「あれ、もう帰るのかい。しかしなんだな、類友ってのは、ありゃ嘘っぱちだね。あんないい男とにいちゃんみたいのが友だちとはねえ」
「……」
サムズは黙って外へ出、それからさすがにちょっと気にして、自分の顔をするりと撫でた。

そのとたん、肩をぐいと引き戻され、よろよろっとなる。
「待ちなよ」
「!?」
振り向くと、男が酒臭い匂いを撒き散らしながら立っていた。サムズを追って店から出てきたらしい。
「ハーディアのこと教えてやったんだ。酒代くらい置いてけや」
「……急ぐんだ。どいてくれ」
「なんだとぉ、このっ！」
男の拳がサムズの顔面を直撃する。
「うぐぅっ……」
サムズはあっさり仰向けにひっくり返った。

「だあぁぁぁ――っ！　違うったらっ。飲み込みの悪い女だなっ」
「ふん。悪かったわねぇ。あんたの教え方が悪いんじゃん？」
ペティナイフとにんじんを手に、アーチェは師匠であるモールに思いっきり「いーっ」

と歯を剥いてみせた。
　半ば強引に屋台を手伝うことになったので、今日はモールの家で野菜の下ごしらえを習っている。
　二階のミニキッチンと違って、階下の台所はまさにちょっとした「厨房」だった。広々とした調理台、三つもあるシンク。両親の寝室の何倍もあるというスペースの隅には、アーチェが見たこともない固形燃料が山と積まれている。
　モールは、
「あのなあ」
　とため息をついた。
「だから、面取りっていうのは、角をちょびっと落とせばいいんだよ。おまえのはまるで薪割りじゃないか。ただでさえ皮を分厚く剥いてるのに、ほんとに食べるとこなくなっちまうよ。いいか？　こうやるんだよ」
　と、アーチェが持っているにんじんで手本を示そうとする。すると自然、モールの指がアーチェの手を包みこむかっこうになった。
「あ」
　アーチェが思わず声を出すと、モールは、

「な、なんだよ。変な声出すなよな」
　と、たしなめる。
「ふ、ふたりきりだね」
「それがどうした。ここは台所です」
「……はあ？」
　モールはアーチェを軽く睨み、
「どっちも単なる事実だってことだよ」
　と言う。
　アーチェは、さっと体の向きを変えると、ナイフを調理台の上に放り出した。
「ちょっと準備……じゃなくて、トイレ行ってくる」
「トイレだ？　ったくもう、やる気あるのかよ」
　アーチェは、厨房のドアの横にある小さなテーブルの脇を通って廊下へ出ていこうとした。さりげなく振り返り、モールがこちらに背中を向けていることを見てとると、テーブルの上に置いてあったインク壜（びん）を手に取る。
　やがて戻ってきたアーチェはなぜかカッと目を見開いていた。
「さっさと続きをやってくれよ……なんだ、どうした」

モールはアーチェの様子がおかしいのに気づいて、思わず顔を覗き込む。そして真っ赤な瞳とまともに視線を合わせると、あわてて目をそらした。

「モール……」

名前を呼ばれ、またおそるおそる視線を戻す。

「え、なんでおまえまばたきしないの？」

「力入れて我慢してるから」

「そうじゃなくてっ！　なんでかって聞いてるんだよ。明日店開きで俺は忙しいんだっ、ふざけるなら」

モールはとうとう怒り出してしまった。

「……キスして」

「もう帰って……え」

「キスしてよ、モール」

ぐぐっと近づいてくるアーチェの顔に、モールはくちびるをひくつかせた。

「こ、断る！　俺にはリアさんが……」

「ぜんぜん相手にされてないよ？」

「いいんだっ。それにだいいち俺、赤い目ん玉って苦手……」

と、アーチェの見開かれた瞳から、大粒の涙がはらはらとこぼれ落ちた。モールがハッとする。
「おい、な、泣くなよ」
「違うって、目が乾いただけ。とにかくその問題はクリアーしました」
アーチェはゆっくりと目を閉じる。とたんにモールの絶叫が響き渡った。
「うわあああぁぁぁぁ〰〰〰っ!!」
アーチェのまぶたには、黒ぐろとした眼球が描かれていた。左右の大きさが違うところが、なんとも不器用なアーチェらしかったが、ご丁寧にぱっちりまつ毛までついている。
「寄るな寄るなっ、気持ち悪い！」
「ひっどぉーい。女の子にここまでさせてその仕打ち？」
アーチェは目を閉じたまま、ダメ押しのようにくちびるをチュッと突き出してみせた。
「かんべんしてくれ……」
モールが後ずさったとき、ドアが開く音がした。
「楽しそうだな」
「ああっ、シノン！　なんていいところに帰ってきてくれたんだ」

モールはシノンに駆け寄ると訴える。
「頼むからしばらくふたりでどっか行ってて！　こいつがいたらとても明日の開店に間に合いそうにないよ」
「わかった」
シノンはあっさり頷くと髪をかきあげ、アーチェに、
「おいで」
と微笑みかけた。

「なるほど、それでこんな落書きをしたのか」
くくくっと笑いながら、シノンは濡れタオルでアーチェのまぶたをぬぐってやる。
「だってくやしいじゃん。モールはあたしが嫌いっていう以前に目の色が嫌いなんだよ？」
二階のシノンの部屋で、ベッドに腰かけたアーチェは頬をぷうっとふくらませた。
「まあそう怒るな。外見をとやかくいうのはまだ子供だという証拠だよ」
まぶたをすっかりきれいにしてしまうと、シノンはそう言ってミニキッチンでインクに汚れたタオルを洗う。

「少なくとも私は真紅の瞳は好きだがね」
「え」
驚いて顔をあげたアーチェの横に、シノンは腰かけた。
「大切な……とても大切に思っていた女性がハーフエルフだったんだ」
「……」
「おまえと同じ綺麗なルビー色の瞳をしていたな」
じっと見つめられ、アーチェは思わずどもってしまう。
「た、た、大切に思っていたって、そのひとにもうふられちゃったの？」
「いや……」
シノンの瞳に苦しげな翳り(かげ)が走るのを、アーチェは見逃さなかった。
(なにかつらいことがあったのかな……)
その先を聞いてみたい衝動に駆られながら、でもくちびるが動かない。シノンには、今までアーチェが出会ったどの男性とも違う固さが秘められているようだった。
「リア、なにしてるかな」
しばらく沈黙が続いたあと、ぽつりとアーチェが漏らすと、
「もう少ししたらまたスカーレット家に行くよ。一緒に来るかい」

シノンも気を取り直したように笑う。

「ううん、今日はやめとく。チキンの詰め物とか野菜の皮剝きとか慣れないことやって、なんだか疲れちゃったからこのまま帰るよ」

「そうか」

「階下に降りたらモールに、明日は売り子くらいやるからって言っておいてくれる？」

アーチェはほうきにまたがると、開け放たれた窓からふわりと外へ飛び出した。

「気をつけて帰るんだぞ」

「わかってるよ。なんだかすっかり保護者じゃん？」

ローンヴァレイの方角にほうきを向け、アーチェはシノンをからかう。

「ありがとね」

目をごしごしとこする仕草をして手を振ると、ちょうど沈みかけた太陽が彼女の背中をオレンジ色に染めた。

しばらく飛んでから振り返ると、シノンが窓枠に両手をついて立っているのが見てとれた。だが視線はアーチェを追ってはおらず、どこか遠いところを見つめているようだった。

モールの屋台は予定通りにオープンし、なかなかの繁盛ぶりをみせていた。
小さな町とはいえ、メインストリートに出したのがよかったらしい。ときには夕べの祈りを捧げに教会にやってきた人々が、評判を聞きつけてわざわざ買いに来ることもあった。
アーチェは自分から言い出したとおり、売り子に徹していた。
オープンから一週間ほどたったある日、アーチェは通りの向こうから歩いてくる不気味な人間を見つけて、
「いっ!?」
と声をあげた。
頭、顔、手足。とにかく露出している部分のほとんどを、白い包帯でぐるぐる巻きにしている。男ものの服を着ているからたぶん男かな、とアーチェは思った。
「モール、なんか変なのが来たよっ」
男はどうやら料理を買いに来たらしい。まっすぐこちらに向かってくる。
「客にそんなこと言うんじゃない」
ボールの中の野菜を和えていたモールが、目を上げずにたしなめる。
「けど……魔界からの使いみたいな……あっ、もしかしてモールの料理は味がいいって

噂が化けもんの世界まで届いて」
「なに言ってんだ……!!」
ようやく顔を上げたモールは、すでに目の前まで迫っていた包帯男を見てギョッとなった。
「い、いらっしゃい」
男は、屋台にところせましと並べられた料理をさっと一瞥（いちべつ）する。
「やってるね、おふたりさん。ふふふ……繁盛してるそうでなによりだ。四人分……夕食用になにかみつくろってくれないか」
くぐもった男の声に、アーチェはさっと身構える。
「あんただれ!?」
「え、やだなあ。サムズだよ」
「サムズって……リアさんちの助手の?」
モールとアーチェは顔を見合わせた。
男は包帯頭を振り振り、
「いやあ、先生に用事を頼まれて出かけた旅先で、ちょっとアクシデントがあってね。きのう戻ったんだけど、これじゃ食事の支度は無理だろう?　僕がいるのにリアお嬢さ

んにさせるわけにはいかないしね」
と、肩をすくめた。
「あっやしいなあ。ほんとにサムズ？」
「もちろんだよ。なんなら包帯取ってみせようか」
「やだよー。中身は透明でした、なんつったらあたし泣く」
「ふは」
包帯男は曖昧な笑い声をたてながら、するすると包帯をほどいた。
「げっ、青あざ赤あざ満開じゃん！」
アーチェはあらわになった男の顔に、思わずのけぞった。だが確かにサムズだ。
「これでも勇敢に戦ったんだぜ。ま、名誉の負傷というやつだね」
サムズはモールが手早く包んだ料理を受け取り、金を払うと、包帯をびらびらなびかせながら帰って行った。ちょうど擦(す)れ違おうとした行商人が、驚いて道の脇までとびすさる。
「驚いたな。サムズって剣士だったのか？」
モールが唸(うな)った。
「バーカ。あれはボコボコにされただけだって。どうせ酔っ払いかなんかに殴られたに

決まってるよ」
アーチェは鼻の頭に皺を寄せて笑っていたが、ふと真顔になり、
「もともと具合悪そうな顔してたけど、包帯があんなに似合うやつって初めて見たなあ」
と感心する。
「うん……けど、リアさんの両親っていったいなんの仕事をしてるんだろう」
モールがつぶやいたとき、新しい客が数人やってきた。
「いらっしゃーい！　ミイラ男も買いに来る、モールのお惣菜だよっ。リクエストがあればこの場で作るから言ってね！」
アーチェの明るい声につられて、客たちの間にも笑顔が広がった。
深夜。リーベン家の二階で眠っていたシノンは、重苦しい空気にうっすらと目を開けた。
「起きろ――シノン・ハーディア」
「!?」
ランプの明かりを遮る影に、シノンはハッと身を起こす。

「誰だっ⁉」
無意識のうちに枕元に立てかけてあるはずの剣に手を伸ばすが、見つからない。
「シノンよ。俺を覚えていないか」
シノンは薄闇を透かし、目の前に立ちはだかっている男をじっと見た。血走ってギラつく目、束になって垂れている毛髪……。
「ジャミルの手下だな……ジグビル、といったか」
シノンはうめいた。かつて何度もジャミルの命を伝えに来た男だった。
「ふむ、思い出したか。貴様がジャミル様の命に背き、逃走してからというもの、必死で捜したぞ。俺の用件はわかっているな」
「知るか」
シノンは吐き捨てる。
「わからなければいま再び言おう。ランブレイ・スカーレットとその妻ネリーを殺すのだ」
「バカな！　私がどんな思いで貴様らの洗脳を解いたと思ってる！」
「義姉の壮絶な死によって、ではないのかね」
「！　なぜそれを⁉」

すると、ジグビルは愉快そうに笑い出した。
「ふははは！　知りたければ教えてやろう。貴様の義姉ミリアムに自害を勧めたのはこの俺だからさ」
「なんだとっ」
「ミリアムが義弟の心を取り戻すためなら、どんなことでもすると言ったのでな。それなら、シノンの目の前で死んでみろと知恵をつけたのだ。それくらいのショックを与えればあるいは、と言っただけだが、まさか本当にやるとは……ふん、単純な女だったんだな」
「……」
　ジグビルは、まっ青になってぶるぶると震えているシノンの顔を覗き込んだ。
「いいか、よく聞け。スカーレットが魔科学の研究を完成させたとしても、もはや我われの脅威ではない。時が熟せば、潰すことなどたやすいわ。ならば今のうち、単身手柄を立てて点数を稼ぐのが得策ではないかな」
「断るっ」
「ならばスカーレットに貴様の正体を明かそうか。罪の意識かなにか知らんが、この期に及んであいつらを守るなど笑止！」

ジグビルはにやりと笑いながら、じりっとベッドに近づいた。
「さあ、俺の目を見るがいい。そうすれば苦しまずに、あの夫婦を始末することができるぞ」
「く……っ。私は……もう誰もダオスの犠牲にしたくはないのだ」
(いけない……見てはいけない！　またあのときと同じことになるぞ)
邪悪な目に視線を吸い寄せられながらも、シノンは必死でベッドの下をまさぐった。
指が剣の柄を捉える。ジグビルが蹴り飛ばしでもしたのだろう。
「覚悟っ！」
シノンは一気に剣を引き抜くと、ダオスの手下に躍りかかった。
「むうっ！」
ジグビルも剣を抜き、応戦する。
狭い室内に、ふたりの男の殺気がぶつかり合った。
昼間の疲れから熟睡していたモールは、二階から聞こえてくる激しい物音に目覚めた。
(こんな夜中にシノンはなにをやってるんだ……？)
ややあって、足音がふたり分響いてくることに気づいた彼は、がばっと起き上がる。

そして自分の剣を持つと、息を殺して階段を上った。
「こんなことをしてもなんの意味もないぞ！」
野太い声が響いた。モールは思わず身を縮める。
「我われはいつも貴様を監視している。もう逃れるすべはないのだ」
「うるさいっ」
(シノンはいったい……とにかく助けなきゃ)
震える指で教わったとおり剣を構えると、モールは階段の最後の数段を駆け上り、部屋に飛び込んだ。
「ああっ!?」
「こらあああぁぁぁ――っ！　俺の兄貴になにするんだ……」
モールはだが、シノンの敵をひと目見るなり、
と声をあげた。
「おまえはいつかリアさんの家を覗いていたやつだな、蛇あたまっ！」
「モール、隠れていろっ。おまえの手に負える敵じゃない」
シノンが鋭く叫ぶ。
「ははは、今夜はここまでとしよう。この小僧まで貴様のために命を落とすはめにな

らんといいな、シノンよ」
ジグビルは愉快そうに言い放つと、姿を消した。
「うわっ、消えちゃったよ！　どうなってるんだ」
モールが騒ぐ。
「あれは魔物だ。神出鬼没さ」
「魔物……あっ、シノン、血が」
モールはシノンの頬に流れる血に気づき、階下へ降りようとした。
「アーチェにもらった傷薬があるんだ。よく効くよ」
「いや、いい」
シノンは首を振り、ベッドにどさりと腰かけた。
「ねえ、どういうことなんだよ。リアさんちの鉢を爆発させたのってあいつだぜ、絶対」
「ああ」
モールはシノンの横顔をじっと見つめ、
「驚かないんだね。ということは、知ってたんだな」
と言った。
「話してよ。そりゃあ俺は子供で、なにもできないけれど……ひとりで苦しむなよ」

「……」
「そっか。俺は信頼されてないってことか」
モールが肩を落とすと、シノンが口を開いた。
「そうじゃない。おまえを巻き込みたくないんだ」
「もう巻き込まれてる！　狙われてるのはほんとにスカーレットさんなのか？　シノンのほうじゃないのか？」
「どちらにしても、ここは出て行くよ」
「そんな話、してないだろうがっ！」
モールは地団駄を踏んで怒った。その様子に、シノンは思わず、ふっと笑みを漏らしてしまう。
「とにかく今夜は寝よう。おまえ、この間教えた剣の構え、ちゃんとできてたじゃないか」
「……そう？」
モールはとたんに照れたような表情になる。そして、話は明日にしたほうがいいかもしれないな、と思った。

朝靄の中を、スカーレット家まで歩く。
モールは、いつかもこんなことがあったなと思いながら、可愛らしいカーテンがかかっているリアの寝室らしき窓を見上げた。
(前は窓に板を打ちつけに来たんだっけ。あのときはまだ、リアさんと口をきいたこともなかったんだよなあ)
そんなことを考えていると、カーテンが揺れ、窓が開いた。
「嘘みたいだな……早いね、リアさん」
小声で呼ぶと、リアはすぐにモールに気づいた。
「待・っ・て」
と、くちびるが動く。
ほどなく外に出てきたリアは、
「みんなまだ寝てるのよ。いったいどうしたの?」
と、訊ねた。
「お願いがあるんです。といってもプロポーズじゃないんだけど」
モールは冗談めかして言ったが、リアがまったく笑わないので本題に入った。
「くわしい説明はあとでするよ。急いでご両親に許可をとってほしいんだ」

「父たちに？」
リアは怪訝な表情でモールの話に耳を傾けていたが、やがてほうっと息をついた。
「……わかったわ。そういうことなら、やってみましょう。でも」
「なに？」
「うまくいったら、アーチェも誘っていいかしら」
「もちろん」
リアは微笑むと、家の中に戻って行った。

「なんだって⁉　ベネツィアの山の中の宿屋に行く？　なんで私が」
シノンは驚いて大声を出した。
スカーレット家のリビングルームで、リアとモールが頷いた。
「前に話したろ？　そこの料理人になりたいって」
「屋台が繁盛しているのに、なぜ今なんだ」
理由は聞かなくてもわかっていたが、シノンはモールをぐっと睨みつけた。
「なぜだっていいじゃないか。今夜発つから準備をよろしく」
「おい、私に仕事があることを忘れているぞ」

するとリアがにっこりする。
「もちろんです。だからこそシノンさんは断れないんですよ。私も行くんですもの」
とんでもない、とシノンは顔色を変えた。
「だいいちご両親が許すわけが」
「もう許可はとりました。お父さまたち、数日前にサムズさんがミッドガルズから戻ってから、ずっと機嫌がいいんです。たまには羽根を伸ばしたいと言ったら、シノンさんが同行してくださるのを条件に――」
「ちょっと待って」
シノンはリアを遮った。
「サムズがミッドガルズに？」
「ええ。そのときの調査がうまくいったようで」
（ハーディア家についての調査か。そして私が〝実在の人物〟だということがわかって気を許した、というわけだな）
シノンは密かに納得したが、それでもジグビルに監視されている以上、ハーメルを出たところでどうなるものでもないことは明らかだった。
「モール、やっぱりやめたほうがいい。私は……」

そのとき、ドタドタという足音が聞こえた。

「やっほー、お待たせせっ！」

「アーチェ」

シノンははりきって部屋に入ってきたアーチェを見て、彼女もすっかりその気になっているのを知った。

「いやあ、可愛い娘がしばらく留守にするって言ったらお父さん、ぶーたれちゃってぶーたれちゃって、もう大変！」

ぺし、と額を叩く。

「おまえ、なに持ってきたんだ、それ。薬じゃないよな」

モールが、アーチェの提げている布袋を見て訊ねる。

「ああ、これ？　ねえ、宿屋までどれくらいかかるのかな。楽しみだねぇ♪　途中で食べるお菓子、これで足りると思う？」

アーチェはうきうきしながら、布袋をどさりとテーブルの上に置く。

「これで中止なんて言ったら殺されるぜ、シノン」

モールが笑いを噛み殺した。

第四章

翌朝、旅立つ四人を見送ったのは、リアの両親とサムズだった。
「気をつけるのよ、リア。本当にこの子ったら急に旅がしたいなんて言い出して、すみませんね」
ネリーは迎えに来たモールとシノンを見比べながら、複雑な笑みを浮かべて言った。
「頼むぞ、シノン君。きみが同行してくれるから許可した旅なのだからな」
「わかっております」
シノンはランブレイにそう答えながら、本当は逆なんだけどなあ、と思う。
「ちょうど私たちもしばらくユークリッドへ行く用事ができた。その間、楽しんでくるといい」
「まかせといて」
昨夜、スカーレット家の柔らかいベッドで熟睡したアーチェが、晴ればれと頷いた。

「ランブレイさん。わかっていらっしゃるとは思いますが……」
シノンが喋りかけるとランブレイは、
「言うな、シノン。私は大丈夫だ。サムズもいるしな」
と、助手のほうを振り向きかけた。が、すぐに口髭を歪める。包帯がとれたばかりのサムズの顔は、とても頼りになりそうには見えなかったからだ。
「行ってきます。お父さま、お母さま」
リアは仲間を促すと、両親に手を振りながら歩き出す。
ネリーは娘たちの姿が北への道の先で見えなくなってしまうまで見送っていたが、
「あなた、やはりやめさせたほうがよかったんじゃないかしら。山道を歩くんでしょう？」
とため息をついた。
「まったく、おまえがそんなに心配性だったとはね」
ランブレイは口髭を撫でる。
「リアは魔術が苦手な分、なにものにも頼らない生き方を身につけている。ちょっと遊びに出すくらい、なんでもないさ。それより私たちも早く準備をしよう。今回はユークリッドの都より南まで足を伸ばしてみるのだったな」

「はい、先生。ベルアダムという村の近辺まで行ってみようと思っております。最近、魔力の低下が著しいと訴えるエルフ族が多数出ておりますので」
　サムズが説明した。
「うむ。魔科学とは関係ないと思うが、調査の必要はありそうだ」
　ランブレイはネリーの関心を仕事に引き戻そうとするかのように、大げさに腕組みをした。

「なんとか無事に出発できましたね」
　ハーメルの町はずれまで来ると、リアがほっとしたように言った。
　すでに陽は高く昇り、道の両脇に繁った樹々が濃い香りを放っている。
「うんうん、よかったよね」
　ほうきに乗ったアーチェの能天気なあいづちに、なにがいいものか、とシノンは思う。
（これでは本末転倒だ。スカーレット夫妻を守るはずが、なりゆきとはいえ自分の身の安全のために逃げるなんて）
　ジグビルに気づかれるのも時間の問題だろう。とすれば、今度はリアたちを危険に巻き込むことになる。

それがいちばんいい)

(三人を宿屋まで送り届けたら、私は急ぎハーメルに引き返そう。モールには悪いが、

ふと視線を感じて顔を上げると、アーチェと目が合った。

「どうしたの。ぜんぜん楽しそうじゃないじゃん」

「あ……いや」

シノンが口ごもると、調理器具や食材を山ほど担いでいるモールが眉を寄せる。彼は

これらの大荷物の他に、ちゃんと剣も持ってきていた。

「あたりまえだろ、兄貴は命を狙われてるんだぜ」

「へっ、アニキ？　いつからあんたの兄さんになったのさ」

「うるさいな。いいだろ？」

モールが殴る真似をすると、アーチェはひょいと高度を上げてよけた。

「シノンさん、そろそろ訳を話してくれませんか」

リアが訊ねた。

「モールさんからだいたいのところは聞きましたけど、あなたを狙っている男と、以前うちをめちゃくちゃにした犯人が同一人物らしいというのは、いったいどういうことなんでしょう……父が狙われたわけではなかったということなんでしょうか」

「……」
「あ、あのさ」
シノンが沈黙するのを見て、アーチェは自分でも気づかないうちに口を開いていた。
「そろそろ山道だねえ。リア、後ろに乗らない？　このほうき、無理すればふたり乗れないこともないいんだよね」
「いいえ。まだちっとも疲れていないわ」
「そっか……じゃあ、ちょっと自分で飛ぶ練習でもしてみる？　いくらでも貸してあげ……」
アーチェはハッと息をのんだが、遅かった。
「なんでそんなこと言うんだ？」
モールが聞きとがめる。
（やっぱーっ！　せっかく、ここまでリアは人間だってことにしといたのに。バレたかなぁ）
「おまえさあ、ほうきで空を飛ぶなんて普通の人間のすることじゃないだろ？」
アーチェはムッとしたが、なにも言えない。
「リアさんにすすめてどーすんだよ、ばか。失礼しちゃいますよねえ」

モールに同意を求められたリアは、ぽかんとする。
「え、でも私だって……」
「あーっ！　鳥が鳴いてる。ほら、間の抜けた声でぴーぴーと！」
「……アーチェさん？」
頭のいいリアは、なんとなく事情を察したようだった。シノンに視線を移すと、彼も苦笑を浮かべていた。
「よくわからないけれど……いいわ。とにかくシノンさん、お話は宿屋に着いてからゆっくり伺うことにします。私だって、人が話したがらないことを無理やりほじくるような趣味はないんですよ。でも父に関することですし」
「わかっているよ。リアの言うとおりにしよう」
本当のことを知ったら彼女は自分を許さないだろうが、それは仕方のないことだとシノンは観念し、そう約束した。
四人がしばらく無言で進むうち、道は少しずつ険しくなってきた。
「アーチェさん、せっかくだから乗せてもらっていいかしら。う、し、ろ、に」
「う、うん」
アーチェは頬をわずかにひきつらせながら、地面に足が着く高さまで下降し、リアが

横座りに腰かけるのを待った。
「モールさん、宿屋ってどのへんにあるの？　ベネツィア寄り？」
「いや。距離的にはハーメルの方がずっと近いよ。このペースだと、たぶんふた晩くらい野宿になるけど平気かな」
もちろんよ、とリアが答える。
「つるはし亭だっけ。おかしな名前だよね」
つるばみ。と、モールがアーチェを軽く睨む。
「入り口の横にでっかいどんぐりの木があるんだよ。最初は別に名前があったらしいけど、主をなくしてからは誰言うとなく、つるばみ亭と呼ばれるようになったらしい」
「なんでまた？」
「どんぐりは別名つるばみというんだ。もっとも、つるばみ色というのは濃い灰色をしていて、実際の実の色とは違うんだが」
シノンが教えると、アーチェは感心したように、
「亀の甲より、ってやつ？」
とつぶやいた。そのとき、
「アーチェさん。少し先へ行って、休憩できそうな場所をさがしましょうよ」

と、リアが言い出した。
「オッケ」
アーチェはぐぐっと高度を上げる——といってもふたり分の重さのため、せいぜい背の高い木にわずかに勝つ程度だったが。
「アーチェさん」
「へっ」
「さっきのあれ、どういうこと？」
「は、はてさて。なんのことやら」
アーチェは、コキコキと左右に首を傾げてみせた。
「とぼけないでよ。私がエルフ族だとなにか都合の悪いことでも？」
リアはアーチェの細い腰に回している腕に、思いきり力を込める。
「んげぇっ！　く、苦しいって、リア！　わかった。言うからやめて、落ちちゃうよ！」
アーチェが悲鳴をあげると、リアはようやく腕を緩めた。
「だからあ、モールはエルフが嫌いなの。リアのことは人間だと思って惚れちゃってるんだってば。かわいそうじゃん、ほんとのこと言うの」
「おかしいわ、そんなの！」

リアはアーチェの背中で憤慨した。

「そんなことで変わってしまう気持ちなら、本当の愛じゃないのよっ！」

「愛って……なんかこの間にも増して本格的な話だね」

アーチェは、リアのエキセントリックな部分に久しぶりに触れた気がしていた。

「モールさんが好きだって言ったくせに、考えたことないの？　愛について」

「いや、そういうマジなのはちょっと。この先何百年も生きて行くわけだし、もうちょっとあとでいっかー、と」

リアは「んまあ」とあきれ、再び叫んだ。

「彼を傷つけまいとするアーチェさんの言動は間違ってる。偽りの優しさだわっ！」

「ははっ……こ、困ったな……」

リアは、へらへら笑うアーチェに腹が立ったらしい。さっきよりも強い力で腰を絞めつけ、アーチェにまた悲鳴を上げさせた。

地上では、モールが空を見上げて舌打ちしていた。

「あいつ、なにやってんだろ。がっくんがっくん飛びやがって、誰を乗せてるかわかってんだろうなぁ、ああっ、危ないっ」

「きゃあきゃあ言ってるようだが、聞きとれんな」

シノンも首を傾げる。
と、モールがぱっと顔を輝かせた。
「ひょっとしてメッセージじゃないか!? なあシノン、ほうきでハート型描いてるんだよきっと。リアさんも実は俺に気があって……そうだよなあ、でなきゃこんな旅につきあってくれるはず、ないもんなあ」
うれしさのあまりひとり身を揉むモールを横目で見て、シノンは思わず笑ってしまう。
「あんなめちゃくちゃな形のハートがどこにあるんだ。長生きするよ、弟」
「兄貴ぃぃ〜」
モールがシノンに抱きついた。

夕闇が迫るころ、野宿経験のあるシノンとモールによって、その日のねぐらが選ばれた。といっても、山道沿いの夜露の防げそうな大木の下で火を焚いただけだ。シノンは念のためにと、あたりを調べに行った。
むろん、夕食はモールが作ることになったのだが、彼がしきりに、
「おかしいなあ」
と繰り返しだしたのは、火力が弱いにもかかわらず、担いできた深鍋で器用に炒め物

ているときだった。
「なによ」
木の幹にもたれ、ういろうをかじっていたアーチェが、鍋の中を覗こうと首を伸ばしながら聞いた。彼女はすでに、持参のおやつをひとりであらかた食べきってしまっている。
「いやあ、今日はぜんぜん他の旅人と、出会わなかったなと思ってさ。ベネツィア港で仕入れをすませた商人は、船に乗る人たちは別として、ユークリッドの都に行くなら絶対この道を通るはずなんだ」
「そういう日もあるってことなんじゃないの？」
「海が時化て荷が遅れ、皆さん足止めされているとか」
リアが考えながら言う。
「かもしれない。でなきゃ俺の料理のかぐわしい匂いに誰も寄ってこないなんて、おかしいもんな」
「なーんだ。それが言いたかったんじゃん？」
アーチェが笑うと、
「おまえ、せめて食事の前は甘いもの食べるのやめろよ。まったく一日中のべつまくな

しに食いやがって、胃が気持ち悪くならないか」
と、モールが嫌な顔をした。
「ぜーんぜん。夕食に期待してるところだけど」
「そうかい」
モールはあきれ、ザッザッと鍋を揺すり始めた。
結局、その夜四人が眠りにつくまで、行商人はひとりも通りかからなかった。

ここはどこだろう、とシノンは考えた。
古い家並みに、懐かしさを覚える。見慣れた通りを横切り、角を曲がると、よく行く草原の景色が現れた。
（そうか。ミッドガルズの家の近くだ――）
草原には先客がいた。若者のようだ。まだなんとなく甘さの残る体つきをしている。こちらに背を向けているが、纏（まと）っている枯葉色のマントには見覚えがある。義姉のミリアムが作ってくれたものだ。
シノンはここで、違和感を覚えた。
（昔の私……そうか、これは夢――？）

気づいたとたん、シノンは数年の時を遡った。

「シノン・ハーディア」

誰かに名前を呼ばれ、ゆっくりと振り返る。

豊かな髪を無雑作に結い上げた女が立っていた。

全身が燃えたつように見えるのは、夕陽のせいだけではない。猛々しい瞳には恐ろしいほど強い光が宿っている。

「なぜ私の名を?」

「先日、城下でおまえを見かけ、気に入ってね。さっそく調べさせた」

「あなたはいったい……」

シノンは眩しさに目を細めた。

「ダオス、という名を聞いたことがあるか」

「ダオスだって!?」

シノンは驚愕の表情を浮かべる。世界征服をもくろむ大悪党の名を知らぬわけがない。

ミッドガルズにはダオス軍との戦いで親を亡くした子供たちの施設まである。

「そうとも。私はダオス様の腹心の部下、ジャミルという」

「そんな……」

「ふふふ。シノンよ、私の僕となり働くがよい。おまえは選ばれた」
「うるさい」
叫んだつもりが、恐怖に声が掠れる。
そのとき、ジャミルが一身に浴びていた夕陽が、渦を巻きながら彼女の瞳の中に吸い込まれるように消えた。
「えっ!?」
思わずシノンが光の行方を覗き込んだ、瞬間。
「シノン・ハーディア。私の命ずる者を殺せ。おまえはもう逆らえない。殺すのだ。これはダオス様のご意志だと思え。シノン・ハーディア――」
「っ！　くっ!!」
目をそらそうと抗ってはみたが、無駄だった。
ジャミルの瞳が加速度的に近くなる。
飲み込まれた――。

「うああっ！」
跳ね起きたシノンは、あたりがまっ暗なのに驚いて、自分が夢の中にいたことを再認

識した。
　視線を巡らすと、消えかかっている焚き火が見えた。
「どしたの、肩で息しちゃって」
　目の前に、アーチェの顔が突き出される。
「ああ、すまない。起こしてしまったか……ん？」
　シノンはアーチェのくちびるから漂う強い香りに気づいた。
「酒か」
「へへっ、料理用にしちゃいいものだよ。モールの荷物から、飲んでほしそーに壜が顔出してたもんでさ。キュッとやったら？」
　どうやらひとりで起き出して、飲んでいたらしい。
　シノンは無言のまま壜をひったくると、自分も酒をあおった。
　アーチェは、上下するシノンの喉をじっと見つめる。実はさっきから眠るシノンの顔をずっと眺めていたのだった。
　見るまいとしても、気がつくと目が行ってしまっている。なぜなのか、自分でもよくわからないのだ。
（気がつくと目で追ってしまっているっ？　いつかリアが言ってたっけ。それが好きっ

ていうことだって）

アーチェはどきりとして視線をそらしたが、またゆっくりと銀髪の若者を促えてしまう。

（いや～ん、意識しちゃうじゃん⁉）

「ね、ねえ。あっち、行こ。ちょっと話があるの」

アーチェが眠っているモールとリアを気遣って、木立ちの中を指した。

ふたりは、焚き火から充分に距離をとると、ひんやりした地面に腰を下ろした。

それを待っていたかのように、雲間から月が姿を現す。ややあって、ふたつめの月。

「昼間、なんだか話したくないみたいだった、例の男のことなんだけどさ」

アーチェは無理やり頭のすみにひっかかっていた疑問を引っぱり出すと、それを口にした。

「ああ。あのときは助かったよ」

「そんなことはい―い―の」

アーチェは酒壜を受け取りながら首をぶんぶん振った。

「あ、首振ったら回ってきちゃった……」

「飲みすぎじゃないのか」

いやいや、とアーチェはまた首を振る。
「えーと、リアのうちで鉢を外から爆発させたやつがいるんだけど、あたし見たんだ。あの光、魔術だと思う。相当強いよ……あれ、この話って前にもしたっけ？　ああ、うちのお父さんにしたんだよ。だからね、シノンもひとりで悩んでないでさっさとゲロして楽になっちゃったほうがいいのよねぇ。なに悩んでんの？」
「やっぱり酔ってる」
とろんとした目を見て、シノンは微笑んだ。月明かりの下、アーチェは——言っていることは別にして——ひどく大人びてなまめかしく映った。
「へっくしゅ」
「ほらほら、風邪ひくぞ」
小さなくしゃみをしたアーチェの肩に、シノンは自分のマントをかけてやる。それは見た目よりもずっと柔らかな感触でアーチェを包み込んだ。
（やだ。心臓がドキドキしちゃう）
アーチェは体が震えそうになる感覚を必死に抑えながら、考える。
（どうして？　でもこれは反発じゃないよね？　だいたいシノンはあたしのこと一度もバカにしたりしたことないもんね……）

目を上げると、おだやかな灰色の瞳がそこにあった。
「……ありがと」
アーチェは蓑虫のようにマントを巻きつけ、目だけ出したと思うと、突然笑い出す。
考えすぎて理性がはじけ、そこを酔いに占領された感じだった。
「きゃははは。こうやって包帯巻いてね、サムズが屋台におかずを買いに来たんだよ～」
「そうか」
「は」
シノンは、自分を見上げる真紅の瞳を見つめ返した。
「どうした？」
「ねえ。あたしの目、似てる？　シノンが好きだった人に。暗くて見えない？」
「いや、似てるよ。この間もそう言ったろ」
「でもあたしはその人じゃない！」
アーチェは拳を突き上げて叫んだ。が、すぐに力なく手を降ろす。
「どうしてかな、すごい疎外感なの……あれ、なんでこんな話してるのかなあ？　やっぱりちょっと酔っ払っちゃってたりしちゃって」
「もう戻ろう。少し寝ておかないと、じきに朝だぞ」

シノンはさっさと立ち上がったが、アーチェがまぶたを重たげにパチパチさせるばかりでその場を動こうとしないのを見て、マントごと軽々と抱え上げた。
「うわお。空がぐるんって回った」
アーチェがけらけらと笑う。
(この娘はこの娘なりに、心配してくれているんだな)
そう思うと、シノンはアーチェの体温とは別に、自分の胸に暖かいものが流れ込んでくるのを感じた。ジャミルの夢を見て飛び起きたときの、なんともいえない不快な気分は、今はもうほとんど消えてしまっている。
アーチェはしばらく黙ってシノンの歩みのリズムに揺られていたが、
「……エルフかエルフじゃないかなんて分けかた、まだ気が楽かもねぇ」
と、回らない舌でつぶやいた。

翌朝はあいにくの曇天(どんてん)だった。
いちばん最後に目を覚ましたアーチェが焚き火を踏み消していると、シノンと視線がぶつかった。が、ふたりは昨夜のことにはひと言も触れなかった。
やがて四人は予定通り、宿屋を目指してふたたび出発した。

「うー、なんかすっきりしないねえ。きのうとは大違い。曇ってるせいだね」
しばらく進んでから、アーチェが空を見上げてため息をつく。灰色がかった雲は、見るからに湿っぽかった。
すっきりしないのは飲んだせいだろ、と思いながら、シノンは先頭を歩いているモールの荷物を見た。こっそり酒壜を隠しておいたのだが、幸い中身がほとんど空になっていることにはまだ気づかれていないようだ。
「ほんと、いやな雲行きですねえ。どうぞ悪いことが起こりませんように」
リアが胸の前で指を組む。
「大げさだな、リアさんは」
振り返ったモールが笑い飛ばしたが、夕方近くなって、それは現実になった。
岩が多いためか植物の少ない一帯に、四人がさしかかったときだった。
視界を遮る樹々がないためにひどく見通しのいい道の向こうから、ひとりの男がやってくるのが見えた。
「あーっ、人だぁ。やっと人が来たじゃん」
アーチェはほうきの高度を上げると、
「やっほー」

と手を振ったが、
「あれ。なんであのおじさん、血相変えて走ってるんだろ」
と首を捻った。
「おおーい、大変だ！　助けてくれえぇっ!!」
男の叫びを耳にして、シノンとモールがハッと顔を見合わせた。
「どうしたんだ!?」
「ああよかった。このままハーメルまで走り続けるつもりだったんだ……」
男はようやくアーチェたちのところまで辿り着くと、膝を折ってその場に崩れた。年は四十代半ば、大きな荷物は持っていないが行商人らしい。
「しっかりしてください。モールさん、水は？」
「あるよ」
リアに頷き、モールが水筒を差し出すと、男はぐびぐびと喉を鳴らして水を飲む。
「ぷはっ。いや助かった――」
「訳を聞こうか」
シノンが静かに質問すると、男は恐ろしそうにぶるっと身震いをし、話し始めた。
「俺は見てのとおりの商人でね……ベネツィアで船荷を待っていたんだが、得意客に頼

まれていた品物だけが別便でちょっと遅れてさ。いつもは仲間と一緒なんだが、俺だけ港に残ったのよ。けっきょく半日待っただけで手に入れることができたんで、こっちに向かったんだが……仲間とはつるばみ亭で会えるはずだった。あ、知ってるかい、宿屋なんだが」
「ときどき世話になってるから、よく知ってるよ。それで？」
モールが促した。
「けさ、そこへ行ったら――仲間はいたにはいたんだが……会えたといっていいのかどうか」
「どういうこと？」
アーチェが、うつむいてしまった男の顔を覗き込む。
「く、喰われちまってたんだよ」
「出たのっ!?　モンスター！」
「い、いや……宿屋に、なんだ」
「……へ？」
アーチェはリアを見、シノンと視線を合わせた。が、さっぱり訳がわからない。
「おじさんの仲間が、つるばみ亭に喰われた。そういうことなの？」

モールが確認すると、男はこっくりと頷いた。
「言っておくが、俺は正気だからな。もうびっくりしてびっくりして、あわてて飛び出して走ってきたんだ……荷物もどっかに落としちまったらしい」
「よし。俺たち、ちょうどつるばみ亭に向かう途中でね。行って確かめてみるよ。なあ、シノン」
「そうだな。話だけじゃなにがなんだかわからないし」
「助けてくれ！　俺の仲間はどうなっちまったんだ⁉」
男が両手を広げるのを目の端に捉えながら、モールとシノンは走り出していた。
「あっ、ちょっと待ちなさいよっ」
アーチェはリアを後ろに乗せると、あわててあとを追いかけた。

ふた晩目の野宿は中止になった。幾度かの小休止をはさんだだけで夜通し山道を歩きつづけ、明るくなるころには宿屋のすぐ近くまで辿り着くことができた。
「あーあ、とうとう夜が明けちゃった」
アーチェがくちびるを尖らせた。
「ほんとにこんなに急ぐ必要、あったのかなぁ。あたしたち、あのおじさんにかつがれ

たのかもよ」
　前の晩も睡眠不足ぎみだったせいで、不機嫌になる。するとモールはもっと機嫌の悪い声で言った。
「大変なことになってるかもしれないんだぜ？　だとしたら、まるきり人と出会わなかったのも納得がいくじゃないか」
「それはそうだけど……」
「それに、つるばみ亭で旅人たちのために料理を作るのが俺の夢だって言ったろ？　気にしてなにが悪い。俺、いちおうおまえのことは友だちだと思ってたのに、おまえは俺のことなんてどうでもいいんだな。よくわかったよ」
「……！」
　アーチェはどきりとして、言葉を失った。
（ほんとだ……モールのことが好きなら、気になって仕方ないはずなのに。あたし……）
　傷ついた表情のモールの横顔にちらちら視線を当てながら、アーチェはくちびるを噛んだ。
「まあまあ、モールさん」
　アーチェの背後から、リアがとりなすように言ったとき、シノンが足を止めた。

「おい。あれか？」
道の左側の斜面を背に、一軒の古びた館がひっそりとたたずんでいる。あたりにたち込める朝靄を、昇ったばかりの太陽の光が幾筋もの帯となって貫いていた。
「うん。間違いなくつるばみ亭だよ」
モールはその場にどさりと荷物を降ろすと、宿屋の入り口に近づいた。煉瓦（れんが）造りの、なかなかりっぱな二階建てだ。
「おい、気をつけろよ」
シノンが声をかけると、モールはちょっと手をあげて応えた。
アーチェは一緒に降りたリアに、
「あたしも行く」
「ちょっと持ってて」
とほうきを渡し、モールを追いかける。
「ふーん、これが人喰い宿屋か」
入り口の扉の前に立ったアーチェは、その脇に生えているどんぐりの大木を見上げた。よく繋っているが、秋までにはまだ間があるため、実はつけていない。
「おかしいな。開かないぞ」

しきりに扉を引っ張っていたモールが、眉を寄せる。
「物騒だから鍵かけてるんじゃないの？」
「違うよ。ここはいつ旅人が辿り着いてもいいように、夜中も鍵はかけない習慣なんだよ。いつもみんなそうしてるのに！」
モールは扉をドンドンと叩き、
「おーい！　誰かいないか⁉」
と怒鳴る。が、シンと静まりかえった館からは、なんの気配も伝わってこない。
「扉、壊していい？」
「……しょうがないな。鍵だけだぞ」
「わかってるって」
アーチェは苦笑いしながら、ちょうどやってきたシノンとリアに、下がっているように言った。
(開いたとたん、骨がざらざらーっと出てくるなんてこと、ないよね？)
アーチェは振り上げた右腕をさっとおろしたが、おぞましい想像をしてしまったために思わず力が入りすぎた。
「えいっ‼　……ありゃ」

ドガアアァァァ――――ンッ!!

鍵どころか、扉一枚分よりはるかに大きな穴がぽっかりと開いてしまった。

「アーチェっ、おまえぇっ！　けっきょく破壊しやがって」

「はは……さあ、入ってみようよ」

アーチェは目を剥いているモールから逃れるように、ひょいと中へ飛び込んだ。幸い、骨が転がっているようなことはなかったのだが、廊下の突き当たりの大きな部屋に足を踏み入れたとたん、目の前に現れた巨大な壁画に驚いた。

「……えっ。なんか変わったシュミだったんだね、ここの主って」

それは眺めるほどに不思議な絵だった。

テーブルについて酒を飲んだり、世間話に興じているような男たちが四面ある壁の一面だけに描かれているのだが、その壁を隔てた向こうに、こちら側とまったく同じ部屋があるような錯覚をおぼえる。

どんな塗料を使ったのかはわからないが、人がいるかいないかの違いだけで、壁ではなく鏡を立てたようなリアルさなのだ。

「ああっ、これは!?　どうなってるんだ。前はこんなのなかったぞ」

あとから入ってきたモールが声をあげた。シノンとリアも立ちすくんでいる。

「モール、すべての部屋を調べよう。私は二階を見てくる」
「あ、あたしも！」
シノンのあとをアーチェが追った。
「モールさん。この人たち、なんだか生きているみたいですね……」
残ったリアが気味悪そうに壁を見つめた。
「絵画としては構図もめちゃくちゃですし……まるで、ここに泊まった人たちがそのまま吸いとり紙に吸われてしまったような……」
リアは自分の体を片手で抱きしめて身震いした。

「ベッドで寝てる絵だよ」
二階に上がったアーチェは、手近なドアを開けて壁を見た。四部屋しかないので、シノンと一緒に順番に見てまわる。
「手紙を書いてる……このふたりはなんかケンカしてるみたい……」
最後の部屋の扉は、シノンが開けた。
「ここはなにもないな」
白い壁を覗き込みながらひとりで部屋に足を踏み入れたとたん、アーチェの鼻先でバ

タンと扉が閉った。
「くっ、貴様！」
次の瞬間、シノンが誰かと揉み合っている気配が扉のむこうから伝わってきて、アーチェは焦った。
扉に手をかけたが、びくともしない。仕方なくアーチェはもう一枚ふっ飛ばすことにした。
ドカッ！
「シノンっ⁉」
部屋に飛び込んだアーチェが目にしたものは、シノンと剣を交えている見るからに邪悪な男の姿だった。
男はにやりと笑うと、姿を消した。
「待てっ、ジグビル！」
叫んだシノンの顔が、ガクンと後ろに倒れる。見えない手が彼の髪を摑み、壁際に引きずった。
「うっ⁉」
「シノン、行っちゃダメ。戻って！」

「く、来るんじゃない……アーチェ」
シノンは懸命に抵抗していたが、とうとう弾みをつけて宙に舞い上がる。アーチェは必死でシノンの片足首を両手に摑んだ。
(ダメ、ぶつかる……)
壁に激突するかと思われたとき、ふたりの体は壁を抜けた。
「きゃあああっ!?」
アーチェはシノンの足を抱きしめたまま、真っ暗な底へ落ちていった。

気がつくと、冷たくて平坦な場所に横たわっていた。暗さのために、どこなのかはわからない。が、アーチェの指はまだシノンの足首にかかっており、それが気を失っている間も無意識に彼女を安心させていたようだった。
「ん……」
ごそごそと身を捩ると、シノンが先に起き上がる。
「真っ暗だな。大丈夫か、アーチェ」
「うん、なんとかね。ちょっと待って」
アーチェはたった今まで革のブーツに触れていた指先を上に向け、すばやく円を描く。

すると、ポッと丸い光が灯り、ふたりの顔を淡く照らし出した。
「ここは……さっきの部屋に似ているが」
壁際のベッド、サイドテーブルと、その上に置いてあるよく使い込まれたランプ……。
シノンは用心深く歩き、ランプと一緒に置いてあった火打ち石を使って火を入れる。
ようやく部屋の中をはっきり見ることができたアーチェは、
「うん……やっぱりここ、さっきの部屋みたい。でもたしかあたしたち、なんでだか壁を通り抜けちゃったんじゃなかったっけ……だったらまた戻ったってこと？」
と視線を巡（めぐ）らせ、暗い窓を見た。
「それに、気を失ってたのはちょっとだけって感じがするんだけど、もう夜だよ？」
「ああ、確かに」
アーチェはつかつかとシノンのそばに歩み寄ると、
「ジグビルって誰よ」
と訊ねた。
「さっき揉み合ってたのが噂の男なわけ？　宿に着いたら話すっていう約束だよ」
そのとき、部屋の隅の空気がぐにゃりと歪むのをアーチェは感じた。
「余計な小娘がついてきたものだな」

「あっ、あんたはさっきの」
シノンと剣を交えていた男だった。アーチェは少しもひるまず、男に詰め寄る。
「ちょっとちょっと！　なによぉ、縄のれんみたいな頭しちゃって。いろいろ聞きたいことはあるけど、とりあえずここはどこよ」
ふん、とジグビルが鼻で笑った。
「威勢のいいことだ。それじゃあ教えてやろう。ここはさしずめ時間の裏側とでもいう場所だ」
「時間の、裏？」
アーチェがきょとんとする。
「時のひずみに落ち込んだというわけか」
シノンは目を細め、ジグビルを睨みつけた。
「そのとおり。使命を捨ててなぜ逃げる、シノン・ハーディア。我が主ジャミル様は、いたくご立腹である」
「関係ないだろう。それに私にはおまえに言われる使命など持っていない」
「なんだと？　貴様がこんなところでぐずぐずしている間にも、ターゲットはのうのうと生きておるわ！」

（ターゲット⁉）

アーチェは男の口から出た思いがけない言葉に、ドキンとした。

「まあいい。俺はいったん貴様を捕えた報告と、次のご指示を仰ぐために行かねばならん。待っているんだな」

ジグビルはまた、すっと姿を消した。

「シノン！　あんた一体何者なの？　ターゲットだなんて、殺し屋かなにか」

アーチェは一刻も早くこの場から逃れようと扉をさがしたが、どこにもなかった。窓からはちょうど宿の入り口とどんぐりの大木が見えるはずだったが、覗いてみてもただ恐ろしく暗い空間があるばかりだ。

「け、景色がなんにもないっ」

アーチェは頭を抱えてベッドに座り込んだ。

シノンは隣りに腰を降ろすと、静かに言った。

「聞いてくれるかい、アーチェ。私は悪魔に魅入られたんだ――」

「えっ」

アーチェは驚いて顔をあげた。

「数年前のことだった。ある夕暮れ、私はミッドガルズの草原でひとりの女に出会った。

女は、私のことが気に入ったと言った」
「そいつが悪魔だったの？」
シノンは頷いた。
「子供だったんだな、私も。気がついたときには、心を操られていた。私は命じられるままに、何人もの罪もない人を、殺した」
「……！」
アーチェはシノンの横顔を凝視したが、ランプの炎の揺らめきに邪魔されて表情を読むことができない。
「ひとり殺せばまたひとつの命を奪えと言ってくる……あるとき、いつものように男を殺そうとしたんだ……そして初めて失敗に終わった」
「どうして？」
「うん。義姉に見つかったんだ」
シノンは自嘲的な笑みを浮かべ、髪をかきあげた。
「義姉は二番目の母の連れ子でね。親たちはみんな早くに死んでしまっていたから、私たちはふたりきりの家族だったんだ。誰にも知られていないと思っていたのに、義姉は私の様子がおかしいのにちゃんと気づいていたんだな」

闇夜だった、とシノンは思い出す。

ランブレイ・スカーレットに狙いを定め、剣を振り上げた瞬間、力いっぱい体当たりしてきたのが義姉のミリアムだった。ランブレイはシノンをただの酔っ払いだと思ったようだ。

「そのあと義姉は、もうバカなことはするなと私を諭した。が、それくらいで悪魔の洗脳が解けると思うかい？　彼女は私を正気に戻すために、その場で……私のこの剣で自害して果てた」

「……うそっ」

アーチェの肩が小刻みに震える。

「さすがに目が覚めたよ。しかし、それで終わりじゃなかった。悪魔は私を執拗に追ってくる……今も！」

今度はシノンが頭を抱える番だった。長身を折り曲げ、まるで消えてなくなってしまいたがっているように見える。

「シノン……いいお義姉さんだったんだね……」

アーチェはシノンの広い肩にそっと触れようとした。

「ああ。私にとっては最高の義姉さ。彼女……ミリアムはハーフエルフだったんだ」

「え」
　真紅の瞳が驚きに見開かれた。
「やっぱりいなかったな。いったいどこへ行っちまったんだ、あのふたりは」
　つるばみ亭の前まで戻ってきたモールは、リアと顔を見合わせてため息をついた。陽が高くなって、汗ばむほどに暖かい。
「もう一度中を捜してみましょう」
　ふたりはアーチェが壊した入り口から再び宿の中へ入った。
　二階を見てくるといったきり、シノンとアーチェが消えてしまったのである。モールとリアは四つの部屋を入念に調べたあと、念のために宿のまわりを歩いてみたのだった。
「階下にはいない、と。二階へ行こう」
　モールは階段を昇り、さっきもそうしたように、手前の部屋から順に覗いていった。
「兄貴──っ、いないのか？」
　三つ目の部屋までは、何も変わりがなかった。が、最後の部屋の扉を先に開けたリアは、
「モールさんっ！」

と叫んだ。
「こ、これ、この絵……」
「絵？　この部屋の壁にだけはなにも描いてなかったじゃないか」
モールはリアの肩越しに壁を覗き込んだが、さっと顔色を変えた。
壁一面に浮き出ているのは、シノンとアーチェの姿だった。アーチェはシノンのブーツを両手に抱き、ふたりで宙を舞っているように見えた。シノンの顔は髪に隠れていたが、アーチェは驚愕の表情でなにごとか叫んでいるように見える。
「も、もしかしてこれが、宿屋に喰われた状態ってやつ？」
モールはあんぐりと口を開け、
「どうりでみんな実物大なわけだよ。とすると、ほかの部屋の人たちも……」
とつぶやいた。
「助けなくっちゃ！」
リアはおろおろと壁の前を往ったり来たりしていたが、
「そうだわ」
とひとりで階下へ降りて行った。そしてアーチェがリアに渡したままになっていたほうきを手に、ものすごい速さで戻ってきた。ふだんの彼女からは考えられないような敏(びん)

捷さだ。
「そんなんでなにするんだ？　まさか、壁を叩いて追い出そうっていうんじゃないだろうな」
「違うわよ。まあ見てなさい」
リアはベッドにひょいと跳び乗ると、
「魔術は気合いっ！」
と叫んだ。
「おいおい、リアさん」
「えいっ！」
ほうきにまたがったリアが、ベッドを蹴る。ドシンと背中から落ちた。
「いたた……もう一回っ！」
「バカなっ。人間がどうあがいたって無理に決まってるじゃないか」
「えいっ！」
ドシンっ。
モールがはらはらしながら見守るなか、リアは頬を紅潮させ、何度も何度もベッドを蹴る。

「んもうっ！　私はアーチェを助けたいのよっ、えーい、気合いっ！」
ふわり。
信じられないことに、リアを乗せたほうきが浮いた。
「のわぁっ」
モールは部屋の入り口まで飛びすさる。扉横の壁に背中を押しつけると、ふわふわと上下するリアの後ろ姿が目に入った。
「ふふふふふ」
リアが笑い出す。
「貰いっ子なんじゃないかと思って……よく泣いたものだわ。今ごろ目覚めるなんて、私ったら、なんておくてなのかしら。ふふふっ、あぁおかしい」
「……リ、リアさん？」
リアがゆっくりと振り返る。
「なんて顔してるの、モール。私が魔法を使うのはあたりまえのこと。だってエルフの血が流れているんですもの」
「ウソだ！」
モールはいやいやをした。

(俺のリアさんが魔女だなんて……)
「ほら、早く後ろに乗んなよ。私たちが助けに行かなきゃどうしようもないじゃん？」
「リ、リアさん……アーチェ入ってる……」
「ほらっ、早くってば！」
ずいと手を出す。その琥珀色の瞳の奥に真紅の光が灯っているのを見て、モールは呆然とした。

アーチェは暗い小部屋の中で、すばやく考えを巡らせていた。
シノンの話を聞いてもなお、疑問はいくつも残っている。
(お義姉さんがハーフエルフ……じゃあ、シノンが言ってた大切なひとってお義姉さんのことだったの？)
アーチェはシノンの辛そうな横顔を見つめた。
(この人につきまとっているジグビルという男……さっきのあいつがリアの家の鉢を壊した奴だとしたら……どういうことなんだろう。ターゲットってもしかしたら、リアのお父さん!?)
ズキン、と胸が痛んだ。

（でも、だったらもうとっくに殺してるよね？　リアの身を守る仕事を頼まれて、スカーレット家への出入りは自由……チャンスなんていくらでも転がってたんだし。だいいちカーニバルの日に、わざわざモンスターからリアのお父さんを助ける必要がどこにあったっていうの？　ああ、さっぱりわかんないっ）

「あのさ、シノン」

アーチェは直接本人に聞いてみることにした。生来、黙って考え続けることなど大の苦手なのだ。

が、そのときランプが灯っているサイドテーブルの横に、誰かが立っていることに気づいてギョッとなる。

「シノン……」

か細い女の声が、シノンを呼んだ。

「シノン……あなたが使命を果たさないので、わたしは死ななければならなくなったのよ」

「ミリアム!?」

シノンは、そこに立っている美しいハーフエルフを見た。心臓をわし掴みに揺すられる、強烈な懐かしさ——。が、シノンはうめくように言った。

「違う。おまえはミリアムなんかじゃない」
「さようなら、シノンン。あなたのせいよ――」
女はルビーのように燃える瞳を伏せると、手にしていた剣を自分の首のつけねに当てた。
「やめろぉっ！」
ビシュウウウッ。
血しぶきが部屋中に飛び散った。なま暖かい液体を体中に浴びたアーチェが悲鳴を上げる。
「いやああっ、血、血がこんなにいっ！」
「あわてるなアーチェ。これは幻だ。悪魔に惑わされるな」
だが、アーチェは服を通して染み入ってくる強い血の匂いに気分が悪くなり、そのまぐったりと意識を失った。倒れ込んだベッドのシーツがみるみる赤く染まる。
「おい、しっかりしろっ」
シノンがアーチェを抱き起こそうとしたとき、
「戻ったぞ、シノン」
ジグビルの野太い声がした。ハッと顔を上げると、すでにミリアムの姿はない。それ

ばかりか、部屋中を染めていたはずの血が一滴残らず消えている。
「なんの真似だ」
「ふふふ、ちょっとした余興さ。面白かったろう」
「きさま」
ジグビルは薄笑いを引っ込めると、シノンを睨みつけた。
「ジャミル様にお会いしてきた。その気になるまでここに閉じ込めておけとのご命令だ」
「なんだと!?」
シノンはいきりたった。
「なぜ私がやらなければならないんだ。なぜつきまとう? 誰がスカーレットを殺しても同じことではないか。いっそおまえが手を下したほうが、よほど早いぞ!」
ジグビルはふっと苦笑した。
「ジャミル様はプライドの高いお方でな。貴様のような虫けら同然の人間に裏切られたことが許せんとおっしゃる。おとなしく言うことを聞いていればやがてそれなりの地位も与えられようというのに」
「馬鹿な。あの邪悪な女悪魔はどこにいる? 会わせろ」

「さあ、知らんな」
「ならばおまえと決着をつけるまでのこと」
シノンはくちびるを嚙みしめ、剣を抜いた。
「望むところよ。と、言いたいところだが……」
ジグビルはしばし耳をそばだてるような仕草をしていたが、
「ちいっ。邪魔が入ったようだ」
いまいましそうに舌うちし、ふたたび姿を消した。
「なんだ?」
シノンは異変に気づいて体を固くする。
正面の壁にほんの小さな亀裂が入り、そこから光が射しているのだった。それはまるで清冽(せいれつ)な水のようにあとからあとから流れ込んでくる。
突然、亀裂はバリリと音をたてて大きな裂け目となり、まばゆい光の洪水がシノンの目を襲った。
(うわっ)
「やっほーっ!　助けにきたわよーっ!」
逆光の中に現れたシルエットは、ほうきの乗ったリアとモールだった。

第五章

「リア！　モール……！」
シノンは光とともに現れたふたりを見るなり、驚いて手を差し伸べかける。
その瞬間、まるで本のページがめくられるように、表の時間の中に戻ったのを感じた。
「助かったよ……」
「あら？　壁をぶち破ったと思ったのに、もとの部屋ね」
リアはきょろきょろとあたりを見回していたが、壁の絵がきれいさっぱり消えているのに気づいて、つまらなそうな顔になった。
それから「どう？」とでも言いたげに、ほうきを上下させる。
「うん。見たときすぐに気づいたが、いったいどうなってるんだ、リア……」
シノンが問いかけると、モールはするりとほうきから降り、
「どうもこうもあるかよ、シノン。リアさんが、覚醒したんだ。エルフ族だったなんて

……。それより、そっちこそどうなっちゃってたんだよ。壁にくっきり浮き出てたんだぞ、ふたりの姿がっ」
とつめ寄り、顎（あご）をしゃくった。
「アーチェは？　寝てるのか？」
「ああ、心配ない。実はな……」
シノンが説明しようとしたとき、ベッドに転がっていたアーチェが、
「うーん、うるさいなあもう」
と、目を開けた。そしてハッと体を起こすと、大騒ぎを始める。
「きゃっ。血、血、血がドバーッと！　……あれ？」
自分の服や身のまわりをくまなく調べ、
「ついてないや」
と不思議そうにつぶやいた。
「アーチェ」
「ん？　ああリアか……ええっ!?」
ほうきを操る友人の姿に、アーチェはあんぐりと口を開けた。
「すごいじゃん、リア。とうとうマスターしたのね？　それともこれも幻なの？」

「いや。私たちはもとの世界に戻ったらしい」
「そっか」
と、シノンに頷く。
リアは目をキラキラさせ、狭い室内をぐるりとまわってみせた。
「アーチェたちを助けたい一心だったの。そしたら飛べたわ！　生まれ変わった気分。やっぱりアーチェの言ったとおり、魔法は気合いねっ」
お嬢さまっぽい外見が失われてしまったわけではない。だが瞳に真紅の光が宿り、華奢(きゃしゃ)なその体には、以前とは違う強い力が満ちあふれているように見える。
「……はは。よかったね」
(リアってばすっかり勇ましくなっちゃって。でも、せっかく黙ってたのにこれですっかりバレちゃったなあ)
アーチェは苦笑しながら、そっとモールを盗み見た。
「さあシノン。話してよ。俺、もうなにがなんだか、頭が爆発しそうだよ」
「とっくにしてるじゃん。黒コゲちりちり頭」
アーチェがからかうと、モールは、
「なんだと、このっ」

と拳を握った。
「しっ」
シノンが鋭くモールを制した。
どやどやという物音と人の話し声がいっせいに聞こえてきた。続いて、誰かが階段を転げ落ちるように降りる音。
「どうやら他の絵の中の人物たちも戻ってこられたようね。私たちも階下へ行ったほうがいいでしょう」
リアは床にトンと足を着くと、アーチェにほうきを返した。
「なんだよ。みんなで邪魔しやがって。あとで絶対説明してもらうからなっ」
モールはぷりぷりしながら階段を降りていったが、食堂に集まって騒いでいた十数人の男たちを見たとたん、料理人としての血が騒いでしまったようだった。さっそく食物貯蔵庫の点検にかかる。
いつのころからか、つるばみ亭で疲れを癒(いや)した旅人たちは、宿賃のかわりに何がしかの食べ物をそこに置いてゆくのが習わしになっていた。次にここを訪れる旅人のために、という意味合いがあるのだが、それがいくらかは残っているはずだった。
シノンは行商人のなかに、きのう山中で出会った男の連れだという者を見つけた。彼

は、一階の廊下の突き当たりにある大部屋にいたという。
「仲間が遅れて来ることになってたんでね、ここで待ち合わせしたんだ。俺がここに着いて、そうさなあ、半日近くは普通にやってたんだが。夕暮れごろ、目つきの悪いおかしな男が入って来たんだよ。それでここに居合わせたみんなと、そいつに話しかけようとしたとたん、フッとあたりが暗くなって。なあ、そうだったな？」
男は、隣りに座っている太った商人に同意を求める。
「そのとおり。こんなことは初めてだよ。いったいどうしちゃったのかね、この宿は」
太った男は下くちびるを突き出した。
シノンは礼を言い、ひとり窓際へ立った。すでに午後の太陽が傾き始めている。
（私たちが山中で出会った男の話と考え合わせると、ここの男たちが閉じ込められていたのはせいぜい一日……先回りして私を捕らえやすい状態にしておいたのか……。やはりジグビルには私の動向がすべてお見通しというわけだ）
シノンは窓を細く開けた。緑の匂いが鼻腔（びくう）に流れ込み、意識がはっきりと一点に向かう。
（なにか方法を考えなくては。私がこの世から消える以外の、執拗な悪魔の手から逃れる良策を。アーチェたちやモールを、本当にこれ以上危険な目に遭わせるわけにはいか

ないからな)
木立ちの向こうから誰かに見られている気がして、シノンはピシャリと窓を閉める。
そして、つぶやいた。
「私が、消える……この世から……?」

つるばみ亭の夜は早い。いつもなら酒を飲む者もいるのだが、さすがに今夜は思い思いの部屋に引き揚げてしまった。すきっ腹にモールの料理をたらふく詰め込み、自分たちが遭遇した災難となんとか折り合いをつけるために、ベッドに潜り込んでいるのだろう。
アーチェたちは一階に空いていたふた部屋を使うことにしたが、がらんとした食堂でいつまでもお茶を飲んでいた。
「悪魔に魅入られた、ねえ」
モールはようやくシノンの話を聞き、ため息をついた。
「俺の家の二階に現れたのも、時間の裏側にシノンとアーチェを連れていったのもそいつだってのか。悔しいなあ！　ここなら絶対安全だと思ったのに、ごめんよ」
「おまえが謝ることはない。だがけっきょく行商人たちも、巻き込んだ。おまえたちも

……謝るのは私のほうさ」
シノンがモールの肩に手を置く。リアはあわててアーチェに目くばせした。
「あ、あのさっ。私たちがいるじゃない。力になるわよ」
「そうだよ。あたしとリアなら最強のコーンビ！　うわーっはっはっはっはっはっ」
アーチェはリアと頬を寄せ合って笑う。
「あーあー、そうですか。エルフの血を引く者ふたり、ね。しっかしアーチェ、なんで黙ってたんだよ、リアさんのこと」
モールがアーチェを睨むと、リアがすかさず口を開いた。
「わからないの、モール。あなたは私が好きだって言ってくれてたわよね。でもエルフは死ぬほど嫌い。あなたがショックを受けないよう、アーチェは気を遣ってくれてたんじゃないの」
「あ」
「それだけじゃないわ。私が疎まれて辛い思いをしないように。何も悪いことをしてないのに、自分がたまたまエルフの血を受けて生まれてきたというだけの理由で疎まれるなんて、どんな気がすると思う？　モールはアーチェの気持ちを考えたこと、ある？」
「……そう、か。そうだよな」

モールはがっくりと肩を落としてうなだれた。
「い、いいよ別に。あたしはちっとも気にしてないもん。リアもそんなにマジにならないでよ」
アーチェは顔の前で手のひらをぶんぶん振っていたが、
「でもさ、モール。リアのことは嫌いにならないでよね」
と、真顔で言った。
「もちろんだよ。そりゃ、最初はびっくりしたさ。ウソだろ、かんべんしてくれよーって感じだったけど、でも俺を呼び捨てにする元気のいいリアさんも好きだ」
「へっ、ごちそーさま」
席を立とうとするアーチェの腕を、モールが掴んだ。
「ごめん、アーチェ。俺、ひどいこと言ったよな」
「もういいって。口の悪いのは、お互いさまじゃん」
アーチェは静かに言うと、モールの指をそっとはずした。
シノンはその様子を微笑みながら眺めていたが、思い出したように、
「モール、このあたりの地図はないかな」
と訊ねた。

「あそこにあるよ。でも、なんで」
モールは壁に貼ってあるかなり古びた地図を指さしながら、心配そうにシノンを覗き込む。
「安心しろ。どこかに行こうってわけじゃないよ。夜が明けたら、木を切り出しに行こうと思って」
シノンはいかにも気楽な様子で地図の前まで歩いて行くと、つるばみ亭の位置を確認し、すばやくあたりの地形を頭に叩き込む。
「アーチェが壊してくれた玄関まわり、あのままにしておくわけにはいかないだろう?直さなくちゃな」
忘れてたぁ、とアーチェはペロリと舌を出した。

その夜遅く、アーチェとリアはひとつのベッドに並んで横たわりながら、眠れずにいた。
「シノンさんのこと、ショックだわ。カッコいい剣の達人だとばかり思っていたのに」
「そうだね」
アーチェは、ひやりとしながらあいづちを打った。

（このままリアが気づきませんように。シノンが狙っていたのがリアのお父さんかもしれないって）
「男なのにあんなに綺麗だから、悪魔に目をつけられたのかもね……」
「もう寝るよ。疲れちゃった」
リアの軽口に、アーチェはシーツをかぶって寝返りを打つ。
「あっ、それじゃ私が寒いじゃない」
「なんの」
ふたりはしばらくの間、笑いながら一枚のシーツを引っぱり合っていたが、やがて身を寄せ合い、眠りに落ちていった。

翌朝、つるばみ亭に泊まっていた行商人たちは、行程の遅れを取り戻そうと早くから発って行った。彼らの身に起きた不可解な出来事は、けっきょく、宿を訪れた不審な男の仕業だろうということで、いちおうの結論が出たようだった。
モールは、おかしな噂がたってこの宿に人が寄りつかなくなるのではと心配したが、彼がゆくゆくはこの宿の料理人になりたいのだというと、男たちは喜び、いつもより多めに食料や雑貨類を置いていってくれた。

シノンは本当に木を切り出しに行ってきた。一度には運びきれなかったといい、何往復もして修理に必要なだけの分量をひとりで調達してしまった。それでもまだ昼までには時間があった。

「ふうん、うまいもんだね」

前庭で、雑木林で切ってきた木を鋸（のこぎり）で引くシノンを眺めながら、アーチェは感心する。そして、鋸の柄を握る指がやけに細く長いことに気づくと、なぜかまた胸がドキリとした。

「あ……昔、大工さんでもやってたのかなー」

「カマをかけてるつもりか」

シノンは、しゃがみ込んでいるアーチェを横目で捉えると、ふっと笑みを漏らした。

「そんなんじゃないって。ほら、あたしって不器用だからさ。純粋に褒めたたえただけだって」

「それはどうも。父を亡くしてから男手がほかになかったんでね。こう見えてもたいていのことはできるんだ」

「そうか……」

しばらくは規則正しい鋸の音と、小鳥の鳴き声だけがあたりに響いた。

「ねえ。お義姉さんも器用だった？」
え、とシノンが手を止める。
「義姉か。彼女は縫い物が好きでね。このマントも、ほら」
シノンは自分の枯葉色のマントをアーチェに示した。
「げっ。それ、カッコいいなと思ってたのに、お手製だったの？」
「なぜ義姉のことなんか聞くんだ」
シノンはアーチェを優しげに見つめた。
「……それはまあ、なんとなく」
（あたしなんか、できあがった薬を袋に詰めるときも、いまだにぽろぽろこぼしてお父さんに叱られてるっていうのに、えらい違いだなあ）
負けた、という意識がアーチェを切なくさせた。
ミリアムと自分を比較しても仕方がないと思いつつ、比べてしまう自分に焦れる。
カロン、と音がして、切り終わった木が落ちた。
「さあ。応急処置だが、陽が落ちないうちに直してしまおう」
「うん。手伝うよ」
アーチェはあたりに散らばっている木屑を寄せ集める。

「刺(とげ)、気をつけろよ」
シノンに気遣われ、アーチェはあわててにこっと笑ってみせた。

入り口と二階のドアの修理がなんとか終わったころ、つるばみ亭には三人の客がやって来た。ひとりはユークリッドから、他のふたりはベネツィアからの行商人だった。
夕食後、彼らが自室に引き揚げてしまうと、モールは食堂でなにやらぶつぶつつぶやいていたが、
「やっぱりもう少し調理器具が欲しいな。今日みたいな小人数ならなんとかなるけど、きのうは大変だったし――」
と、腕を組んだ。
「そうね。一度ハーメルに戻ってきたら?」
リアがすすめたが、
「いや。せっかくだからベネツィアで買おう。向こうの方が鍋でも食器でも種類が豊富だし、父ちゃんに相談もできる」
モールは言い、シノンをちらりと見る。
「行ってきていいかな。もちろん、シノンが落ち着いてからでいいんだけど」

「私は今でも落ち着いているよ。いつでも行ってくるといい」
シノンは肩をすくめ、ゆっくりと食堂の椅子から立ち上がった。
「今日は少し疲れた。きこりと大工の二本立てだったからな」
「おやすみなさい。今夜はふたり部屋だから、ゆっくり休んでね」
リアはシノンを送り出してまうと、
「深刻そうね……無理もないけど」
と、微かに眉をひそめた。
「っていうか、今日はマジで疲れたんだよ。誰かさんの尻拭いでさぁ」
「それは失礼しましたわねっ」
アーチェはモールに向かって、思いきりあかんべをした。

夜半過ぎ、眠っていたシノンはふと目を覚ました。そっと起き上がり、ちろちろと燃えるランプの炎を見つめる。
サイドテーブルを挟んだ向こう側では、モールがぐっすりと寝入っている。
確かに眠っていたはずなのに、ずっと考えごとをしていたような気分だった。頭の芯が鈍く痺れる——。

シノンは意を決し、すばやく身支度を整えると剣を手にした。昼間、体を動かしながらずっと迷っていたことだった。

(長引かせるのは、よくない)

シノンは気配を殺すと、モールの枕元に立つ。シノンが買い与えた剣が大切そうにベッドに立てかけてあった。

「モール……」

(私はもう戻れないだろう。いくらも剣術を教えてやれなかったのが心残りだが、リアとアーチェを守ってくれ——頼んだぞ!)

どこか幼さの残る寝顔から目を背け、シノンは部屋を出た。

リアは、隣りのベッドが軋む微かな音を背中で聞いていた。

(アーチェ?)

つい今しがた、誰かが足音を忍ばせ、部屋の前の廊下を通り過ぎて行ったばかりだ。

アーチェはしばらくリアの寝息を確かめている風だったが、やがて静かにドアを開ける。

(……七、八、九……)

十まで数えてリアはベッドから降り、ランプを吹き消すと窓からそっと外を覗いてみた。

今夜彼女たちが使っている一階の部屋は、宿の入り口から少し離れてはいるが、ちょうど人の出入りが確認できる位置にある。

扉が開いたようだ。まず、ほんの一瞬だったが、ひるがえるマントが木立ちに消えるのが見えた。

間を置いて、もう一度扉が開く。リアは軽いため息をついた。

「やっぱりね。私は、最初から年上のひとのほうが、いいんじゃないかと思っていたのよ……悪魔がまた出てきたりしないといいけど」

「いてっ」

アーチェは木の幹にまともにぶちあたり、思わず声をあげた。あわてて口を押さえる。

暗闇の中を、シノンはまるで夜行性の獣のように危なげなく進んで行くのだった。魔術で明かりを灯すことは簡単だが、それでは気づかれてしまうだろう。

アーチェは仕方なく、何度もあちこちに体をぶつけ、下草に足を取られそうになりながら必死でシノンのあとを追った。

「うわっぷ！」
つるばみ亭から、もうずいぶん距離を隔ててしまったと思われるころ、突然アーチェはまたドンと何かにぶつかり、行く手を遮られた。が、木にしては柔らかい。
「こら」
「ひょえっ⁉」
腕を掴まれ、アーチェは飛び上がった。
「シ、シノン……。いやその、べつに尾行していたというわけでは……」
「帰れ」
「え」
アーチェの頭上から、抑揚のない声が降りかかる。
「この先は危険だ。戻るんだな」
「いやっ！　帰らないもんねーだ」
アーチェはシノンの手をふりほどくと、走り出した。いくらもいかないうちに、ガクンと体が沈む。
「危ないっ！　そっちには湖が」
「あああっ⁉」

水際の傾斜ですべったアーチェは、派手な水しぶきをあげて背中から水に落ちた。
「きゃーっ、冷たいぃぃぃ〜っ！　溺れるぅ」
「アーチェ！」
シノンが駆けてきて湖に飛び込む。
「しっかりしろ、ほらっ、私につかまるんだ！」
アーチェは必死でシノンの肩に手を回した。シノンはその手からほうきを取り上げると、岸に放る。それからなんとかアーチェを首にぶらさげたまま、這い上がった。
「ふう……なんてやつだ。だから危険だと言ったろ」
「み、湖がこんなとこにあるなんて思わないじゃん。早く教えてくれてれば、こんなことにはならなかったのにぃ！」
ふたりは荒い息をくり返し、お互い相手に責任を押しつけていたが、アーチェが大きなくしゃみをたて続けにした。
「ううっ、寒ぅ」
服はもちろん、髪の毛までぐっしょりだった。
「どこか暖まれるところへ行こう。ここから東へ少し入ったところに、小さな洞窟がある」

「洞窟？　やけにくわしいじゃん」
アーチェは上目遣いにシノンのシルエットを見た。
「昨夜、地図で見たんだ」
（けさ、木を切りながら確認してたりして？）
アーチェはそう思ったが口には出さず、ぽたぽたと水滴を垂らしている髪を絞った。

「振り返ったら殺すよ」
アーチェは濡れて体にはりつく服をすっかり脱いでしまうと、シノンが貸してくれたマントにすっぽりとくるまった。
「見やしないって……もういいか」
「うん」
マントからちょこんと出ている彼女の顔は、洞窟の奥に今おこしたばかりの焚き火の炎を映して赤あかと輝いていた。
「この間もそう思ったんだが。そのかっこう、蓑虫みたいだな」
「ほっといて。シノンは脱がないの」
「くるまる蓑がもうない」

彼はそう言うと、火の近くに座る。その髪の色は濡れて濃さを増し、白い顔に陰影を作っていた。
「あのさ、ちょっと質問していい？」
「ああ」
「なんでこのマントだけ、濡れてないのかなー」
するとシノンは、にっと笑った。
「エルフ族秘伝の、雨風を凌げる布なんだそうだ。このおかげで今までどれだけ助かったか知れないよ」
「秘伝ね……うちのお父さんの薬も、お母さんの秘伝なんだ」
「そうだったな」
シノンは、パチパチと爆ぜる炎越しにアーチェを見つめた。
「教えて、シノン」
「また質問か」
アーチェはくちびるを噛んでいたが、キッと目をあげる。
「もうあたしたちのところへは戻らないつもりだったんでしょ？　それとも、死に場所捜すのに地図とにらめっこしてたの？」

「……」
「それですべてが解決するならいいかもしれないけど。その前にどうしても聞いておかなきゃならないことがあるの……シノン、昔ミッドガルズで誰かを襲って、お義姉さん――ミリアムさんにとめられたって言ってたよね」
シノンの瞳がすっと細くなる。
「その誰かって、もしかしてランブレイ・スカーレット?」
「……なぜ」
「簡単なことだよ。そう考えればすべてのつじつまが合うもん」
アーチェは大きな瞳をくるくるっと動かしてみせた。
「幸い、リアはまだはっきり気づいていないみたいなんだけどね」
「それを確かめるために、わざわざ追って来たのか」
「それだけじゃないよ。シノンのこと、いろいろ気になって……」
シノンは足元に落ちていた小枝を拾い、ペキッと折って火にくべた。
「命じられていたのは、スカーレット夫妻を葬り去ることだった。たまたまあの夜はランブレイがひとりだったんだ。彼は私の顔は見なかったらしい」
「まさかまだ狙ってるわけじゃ」

シノンは、
「バカな」
と声を荒げた。
「ミリアムが命と引き換えに取り戻してくれた私自身の心だぞ？　私はランプレイ夫妻を守るためにハーメルに行き、カーニバルを利用して近づくつもりだった。あのとき浮島で、ジグビルがランプレイにモンスターをけしかけたのは、まったくの偶然だったけどな」
ごめん、とアーチェがうなだれる。
「けど、どうしてリアのお父さんたちは殺されなきゃいけないの？　ちょっと厳しいけど、そんなに悪い人たちには見えないよ」
「くわしいことは知らない。だが、彼らが長年続けている研究が、悪魔の存在自体を脅かすものらしいと私は睨んでいるんだ」
「……そう」
アーチェは無意識にマントから出した指先で、縫い目を撫でていたが、
「きれいな運針(うんしん)！」
と声をあげた。目を落とすと、マントとほとんど同色のステッチがきれいに整列して

いる。
「ほんとに器用だねえ……好きだったんでしょ、ミリアムさんのこと」
アーチェは静かに訊ねた。
「いや」
シノンは即座に首を振る。
「なにかカン違いしているようだが、私は彼女とは、姉と弟——最後までそう接していたよ」
「うそばっかり」
アーチェはマントにくるまったまま、シノンのそばへにじり寄った。
シノンは、困ったやつだなというようにアーチェを見たが、
「ん？　これじゃ髪が乾かないじゃないか」
と、ポニーテールに結んでいるリボンをほどいた。湿った髪が背中に広がる。
「私は心臓に鉄の楔（くさび）を打ち込んでいるんだ」
「えっ」
「もちろん本当にじゃない……正直に言うけど、確かに私にとってミリアムは女性としても最高に魅力的だった。これが、まったくの赤の他人とか、血のつながりのある姉だ

ったりしたら、気は楽だったろう。だが義姉ではね――中途半端はいつも人を苦しめる」
シノンはピンクの髪に指を差し入れる。アーチェがぴくんとするのがわかった。
「だから、彼女は姉だという楔を打ち込んだ。それで終わりさ」
からまった髪をほぐすように、シノンはゆっくりとアーチェの頭を撫でた。
背中から腰にかけて、甘い痺れが駆けおりるのを感じながら、アーチェは訊ねる。
「……ミリアムさんは？」
「もちろん、私を弟として、それ以上でもそれ以下でもなく扱ったよ。本当のところはわからないが……」
なんだか熱い、とアーチェは思った。火に当たりすぎたのだろうか？
シノンの手がアーチェの背中へ降りる。ふいに、胸に込み上げるものを感じてアーチェはシノンを見上げた。
「死ぬの!?」
「……これはまた単刀直入な」
シノンはおかしそうに笑い、
「たぶんな」
と頷く。

「だったらあたし、ミリアムさんの代わりでもいい！」
指が止まった。シノンの顔から笑みが消える。
「しつこいぞ。人の話を聞いてなかったのか」
「聞いてたよ！　だからっ」
ふいに引き寄せられ、アーチェはそれ以上しゃべることができなくなった。
(反発でもないし、意地を張るわけでもない)
苦しいよ、とアーチェはシノンの胸から顔を離す。
「アーチェはアーチェだろう？」
(あたしはシノンが……)
「……うん」
こっくりと頷く。
(好き)
枯葉色のマントが滑り落ち、細い肩があらわになった。

冷たい水の上に立っている。気がつくとアーチェは水面をすべり、自由に歩き回って

いた。
（ここ、さっき落ちた湖かも……違うかな）
考えてみるが、よくわからない。
（なんで沈まないのかなぁ、あたし）
アーチェは自分の足の裏に意識を集中させてみた。すると、こんどは空気の流れを感じる。
「んん……？」
ぽっかりと目が開く。アーチェはしばらく黒ぐろとした岩の天井を見つめていたが、ガバッと身を起こした。
（夢……!?）
「シノン？　どこっ、シノン!?」
アーチェはシノンの姿が見当たらないのに気づき、あわてて立ち上がろうとした。
とたんに、体にかけていた枯葉色のマントがするりと裸の胸を撫でる。
「……」
燃えさしの枝からはまだ細く煙がのぼっている。アーチェはマントを胸のところで押さえながら、シノンが自分の隣りで眠っていたことを思い出した。ついさっきまでそう

だったはずだ。
洞窟の入り口からは、冷たい霧が流れ込んで来ていた。アーチェは、こっちに素足を向けていたからあんな夢を見たのだろうと納得しながら、近くに広げてあった服をかき集め、手早く身につける。
手袋もズボンも完全には乾いておらず、その意地の悪い冷たさにアーチェは身震いした。リボンも滑りが悪く、うまく髪がまとまらない。
「なんで黙って行っちゃうのよ……」
霧の中を泳ぐようにして洞窟を出る。まだ夜明け前だった。ちょっと迷ってから、マントをていねいにたたんで――生地が柔らかいので意外にかさばらない――胸に抱いた。
「……どっちへ行ったんだろう」
つるばみ亭のある方角さえわからない。
「シノン」
途方に暮れて名前を呼んだアーチェの脳裏に、さらさらとこぼれる銀色の髪が浮かんだ。
「シノン！　死なないでよぉっ！」
アーチェは霧の中をめちゃくちゃに走り出した。

シノンはジグビルに導かれるままに山道を歩き続けていた。
ジグビルは洞窟でまどろむシノンのもとに現れ、
「ジャミル様が貴様にお会いになるそうだ」
と告げたのだった。
いつの間にか霧は晴れてきたが、いっこうに明るくならない。それどころか、あたりはぐんぐん暗さを増しているようだった。
「おい……」
シノンがジグビルの背中に声をかけたとき、それまで自分を取り囲んでいた圧倒的な木々の連なりが、ふっと消えた。
「なに!?」
驚いてあたりを見回すシノンの目の前に、夕陽に輝く草原が現れた。
(ここは……まさかあのミッドガルズの?)
「久しぶりだね、シノン・ハーディア」
シノンはハッと声のするほうへ顔を向ける。ジャミルだった。
「再会は懐かしい場所で、と思ってね。もう何年になる?　いい人生を送ってきたかし

ら」
「黙れ」
シノンは、猛々しい目を夕陽にきらめかせている女をキッと睨みつけた。
「おまえのおかげでミリアムは……」
「知っているよ」
ジャミルは頷いた。
「壮絶な最期だったそうだねえ。やるじゃないのさ。同じ女としてほめてやるわ」
「それだけか?」
シノンは剣の柄に手をかける。
「あわてるな、シノン。もう一度チャンスを与えよう。ランブレイ・スカーレット、ネリー・スカーレットを」
「断るっ!」
シノンは叫んだが、ジャミルの言葉は淀みなく続く。
「殺すのだ。魔科学への扉をこれ以上開かせてはならない。もしおまえが見事にやってのけたなら、家臣にとりたてていただけるよう、このジャミルがダオス様に直々にお願いしてやろうではないか」

「ふん。バカバカしい」
シノンの冷笑に、ジャミルはさらに言葉を重ねた。
「私はおまえが気に入っているのよ、シノン。そうでなくてなぜ、こんな裏切り者を今日まで自由に生かしておくものかね？　さあ、忠誠をお誓い」
「話にならんな。時間の無駄だ」
吐き捨てるシノンを見、ジャミルは微かなため息をつく。
「仕方ない。同じような手を二度も使うのは、私の美学に反するのだが……ジグビル！」
ジャミルは宙空に向かってさっと手を上げた。とたんに、誰かが激しくもがく気配が生じ、そのまま着地する。
「アーチェっ⁉」
シノンは自分の目を疑った。
ジグビルに羽交い締めにされ、身をよじっているのはアーチェだった。
「なぜ来たんだっ」
「シノン！　わかんないよ。シノンを捜してたら急にこいつが」
アーチェはふいに言葉を切ると、ジャミルを食い入るように見つめた。
「こいつが……？」

ダオスに命じられ、ジグビルは短剣をアーチェの喉に突きつけた。
「ひっ」
（こ、殺されちゃうよぉ）
氷のような感触に、アーチェは思わず目をつぶり、顔をそむける。
「やめろっ！　彼女を放すんだ！」
「おやり、ジグビル。この星に流れる愚かな血を、いま一度この男に浴びせてやるがよい」
シノンの顔色が変わった。
「承知しました」
ジグビルが短剣を握る手に力を込めたとき、
「わかった。言うとおりにする、から……その娘を放せ。スカーレット夫妻は殺す……だからアーチェを」
シノンが掠れ声で訴えた。
「なに言ってんの！　ダメだよっ」

アーチェが怒鳴る。
「あたしは平気だから早くこいつらをやっつけちゃってよ、シノン！」
シノンは苦しそうにアーチェを一瞬見つめ、ジャミルに詰め寄った。
「先に彼女をもとの世界に帰してくれ。そのあとで私をいくらでも好きに使うがいい」
「よかろう。だがこのままではまずい」
ジャミルが目配せすると、ジグビルはアーチェをドンと突き飛ばした。
「きゃ」
よろよろとよろけたが、なんとかほうきを杖がわりにして体勢を立て直す。
シノンは、アーチェのもう片方の腕に枯葉色のマントがしっかり抱えられているのを見てとった。
（ミリアム……頼むからアーチェを守ってくれ）
ジグビルがずいと一歩アーチェに迫る。
「さあ、娘。おまえのその派手な頭の中をきれいに掃除してやろう」
「来ないでよ、縄のれんっ」
アーチェはまっすぐにジグビルを睨みつけた。
「ふふふ。俺の目を見ろ……記憶の引出しが、すぐにカラになるぞ……」

ジグビルの意識が完全に自分に向けられたとわかったとき、アーチェは叫んだ。
「シノン！　今よっ！」
「くっ」
アーチェから視線を外したジグビルが剣を構え、シノンに襲いかかろうとしたのと、アーチェに異変が起きたのはほとんど同時だった。
「あんたを許さない」
瞳がカッと真紅の光を放った。強い光は帯となり、ジグビルの自由を奪う。
だが迸(ほとばし)り出た力の反動で、アーチェの軽すぎる体は後ろに押され、弧を描いて跳んだ。
「きゃあああ」
悲鳴の途中で姿が消える。
「アーチェっ!?」
シノンは思わず駆け寄ろうとしたが、ビュンと空を斬るジグビルの剣にハッと身構えた。ジグビルの体にはまだ赤く透けた帯が巻きついていたが、ぎらつく目を見開いて気力で襲いかかってくる。
シノンは剣を上段から振り下ろした。が、ガッキと止められる。
「貴様……殺してやる。そしてスカーレットだけではない、魔科学に関わるすべての者

ども俺がやる。そしてダオス様の重臣に！」
ジグビルが狂ったように突き出してくる切っ先に翻弄(ほんろう)されながらも、シノンは少しずつジグビルとの距離を縮めた。
(今だ！)
「やあああぁぁぁぁぁ――――っ！」
ジグビルの息が乱れた一瞬の隙をつき、シノンは深々と敵の心臓を刺し貫いた。
「ぐわあああああ」
仁王立ちになったままのジグビルの口から、どす黒い血が吹き出す。シノンはそれでも憎しみのあまり、剣を突き立てたままでいた。
が、それが命取りになった。ジャミルの気配を感じた時にはすでに遅く、シノンは背後からまともに刃を浴びた。激痛が斜めに走る。
「ぐうっ！」
(し、しまった)
「馬鹿め。私怨のために己が闘いの途中だということを忘れたか」
「うう」
シノンは必死でジグビルの胸から剣を抜こうと試みたが、それは深く刺さり過ぎてい

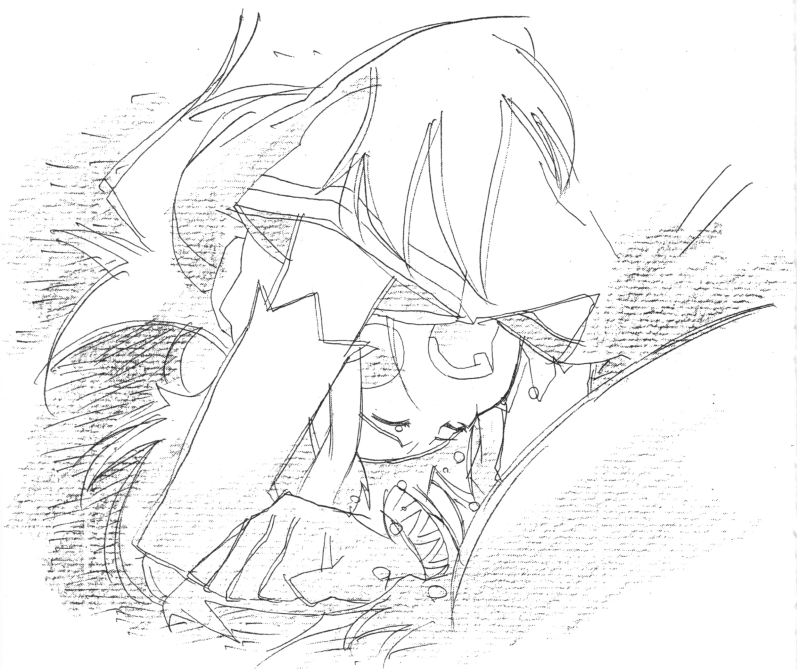
た。
「目をかけてやったのに……これで最後だよ。シノン！」
ジャミルはシノンの銀髪に隠れた首の付け根を狙い、薙ぎ払う。シノンはそのまま
つ伏せに倒れた。立ったまま息絶えていたジグビルも、剣を胸に戴いたかっこうで地響きをたてた。
ジャミルはしばらくふたつの屍を見下ろしていたが、やがてその薄いくちびるに皮肉な笑みを浮かべた。
「これしきのこと、大事の前にあっては何ほどの意味もない。刺客などいくらでもいるからね」
すでに目をつけてある男たちを思い浮かべる。
（ユークリッド独立騎士団のマルス・ウルドール……いや、スカーレットならデミテルのほうが似合いか……）
ジャミルはブーツの先でシノンの肩をそっと蹴ってみた。美しい顔を持ち上げ、振り返って自分を睨みつけるのではと待ったが、微動だにしない。
残念なような淋しいような気分がジャミルの心に生まれたが、彼女はそれを即座に握り潰し、なにも感じなかったことにした。

やがてジャミルがゆっくりと姿を消してしまうと、草原には静寂だけが残った。
永遠に沈まない夕陽は、いつまでもシノンたちを照らし続ける——。

「アーチェ、アーチェ起きて」
肩を揺すられて、アーチェはうっすらと目を[illegible]た。
「起きろ、このバカ女っ」
自分を覗き込んでいるふたつの顔が見えた。それがリアとモールだとわかったとき、アーチェはっきりと目覚めた。
「あれ、あたし……どうしちゃったんだろ」
起き上がった拍子に、体にかけていた枯葉色のマントが滑り落ちそうになる。
「きゃっ、見ないで」
胸を押さえたアーチェに、モールは不審な目を向けた。
「なに言ってんだよ」
「あ……」
(あたし、服着てる。たしか裸で寝ていたような……)

「おかしいな」
アーチェは手袋の先をじっと見つめて首を傾げた。
「なにがおかしいんだよ、寝ぼけてんのか。ったく無断でふた晩もあけやがって、心配して捜しに来たんだぞ」
「ふた晩？　ひと晩じゃなくて？」
アーチェは驚いてモールの顔を覗き込んだ。リアが横から頷く。
「そうよ、アーチェ。あなたはシノンを追って部屋を出て行ったでしょ？　私はてっきり朝までには戻るものだとばかり思っていたのに」
「シノンは、兄貴はどこへ行ったんだ」
モールに詰め寄られ、アーチェは呆然となった。
「え……いないの？」
「だから聞いてんじゃねーか」
「あれれ……えーっとね……わかんないな。やだ、どうしちゃったんだろう」
リアとモールは黙って顔を見合わせた。
アーチェはおろおろしながら自分の顔を撫でていたが、ふと目のあたりに違和感を感じた。泣きはらしたときのように、重たい感じなのだ。

（あたし、泣いた？　いつ？　裸で目が覚めたとき……ううん、もっと前……）
視界の端で、さらりと銀髪が揺れた気がした。
かきあげてもかきあげても、さらさらとこぼれてしまう銀色の髪……。それを見上げながら泣きじゃくっていた気がする。背中に敷いた柔らかなマントの感触……。
「アーチェ？」
「わからない」
アーチェは首を振った。すがるような目をリアに向ける。
「シノンを追いかけて……湖に落ちちゃったの。それでこの洞窟で火を焚いた。気がついたらシノンはいなくて……でも、それからどうなったのか、あああっ、ぜんぜん思い出せないぃっ！　どうしようリア」
「だいじょうぶ。落ち着いて。シノンはちょっとどこかへ行っただけよ」
リアはアーチェの頭を自分の胸に押しつけ、優しく言い聞かせた。
「どこかに行くのにマントを置いていくのか？　それはおかし……」
リアがすばやく目でモールを制した。少年はびくっとして口をつぐむ。ふたりとも、シノンの身になにかよくないことが起きたのだと確信した。
「あ、ああ。そうだアーチェ。腹減ってないか。どうせなんにも食べてないんだろ？」

モールはがさごそと紙包みからサンドイッチをだすと、無理やりアーチェの手に握らせた。
「ほら、おまえの親父さんも絶賛してくれたっていう特製のやつ、作ってきたぜ」
「おいしそう」
アーチェの喉がコクっと鳴る。
「だろ？　食え食え」
「うん」
アーチェはのろのろとサンドイッチを口に運び、しばらく無言で咀嚼していたが、
「……ってこないよ」
とつぶやいた。
「え？」
「もう帰ってこないよ、シノン」
「ばっ！　なんにも覚えてないってのに、なに言ってんだっ」
モールが怒鳴る。
「じゃあ、なんでこんなに悲しいの⁉　胸がつぶれるっ」
アーチェはサンドイッチを力まかせに投げつけた。洞窟の岩壁にぶつかり、自家製パ

ンといっしょに中身が飛び散った。
「こんなのちっともおいしくないよっ。なんの味もしないじゃん。なんにも覚えてないのに、味もわかんないくらい悲しいなんて！」
うわあん、とアーチェは地面に突っ伏して泣き出した。
リアは静かに息を吐くと、ほうきとマントを手にとった。
「とにかくつるばみ亭へ戻りましょう。少し休ませなきゃ」
「そうだな……こいつは俺が背負っていくよ」
モールは激しくしゃくり上げているアーチェの、震える背中を見つめた。

一週間が過ぎた。
始めの数日はこんこんと眠るだけだったアーチェも、ここ二日ほどは客室の掃除を手伝うまでに回復してきていた。食事も以前と同じ量とまではいかないが、人並み程度には胃に収めることができるようになった。
「なあ。アーチェ、いったん親父さんのところに帰したほうがよくないかな」
モールが廊下でリアをつかまえて言う。

「ええ、私もそう思っていたところ。モールはベネツィアに行くんだったわよね」
「でも、女ふたりじゃなあ」
モールが腕組みすると、リアはにっと笑った。
「ふつうの女の子じゃないのよ私たち。だいじょうぶ、アーチェは私が責任をもってローンヴァレイまで送って行くから」
「いいのかい」
「だってそうしたほうが、つるばみ亭を早く再開できるじゃない」
ありがとう、とモールはうれしそうに礼を言った。

翌朝、ベネツィアに発つモールを見送ってから、アーチェとリアも帰ることになった。入り口の鍵はかけない。午後になればまた旅人がやってくるだろう。
「乗って」
ほうきにまたがったリアがアーチェを促す。
「ほんとに？　疲れたら途中で交代するから無理しないでよね」
アーチェはおそるおそる乗ると、リアの背中につかまった。
「じゃ、行きまーす、よっ、と」

ふわりとほうきが浮かび上がった。
「やるじゃんリア」
「へっへえ、簡単じゃん？　なんてねー」
ふたりはきゃあきゃあ言いながら、緑燃える山道を飛んだ。
「あのさ、あたしの記憶のことなんだけど……」
アーチェがおずおずと言い出したのはハーメルに近づいた二日目、木陰で小休止をしていたときのことだった。
「やっぱりあの間だけ、ほとんど抜け落ちててさ」
「もういいじゃない」
「え」
「私は、アーチェが私のことをちゃんと覚えていてくれただけでいいの」
リアはきらきらと落ちてくる木洩れ陽を見上げる。
「それ以上のことは、いつかアーチェが何かを思い出して、もしそれを話したくなったら、ね」
「うん。そうする」
アーチェはこっくりと頷いた。

ハーメルからローンヴァレイへ渡る橋のたもとでリアと別れたアーチェは、ようやく懐かしい我が家へ辿り着いた。
「ただいま〜」
が、彼女を迎えたのは父親のおそろしい雷だった。
「バッカも――んっ！　この不良娘が！　親が眠ってる間に黙って行くやつがあるか。まったく、どんなに心配したことかっ！」
薬の調合をしていたバートは、アーチェをひと目見るなり怒鳴りまくった。
「ごめんなさい。だってお父さん、あたしが遠出するって言ったらぶーたれちゃって、口きいてくれなかったじゃん」
「だからってなあ……」
くちびるを尖らす娘にバートはなおも文句を言いかけたが、ふっと口をつぐむ。
「なんだ、ちょっと感じが変わったな……おまえ」
どこが、と聞かれたら返事に困るような、娘の微妙な変化をバートは感じとっていた。
「そう？」
アーチェはソファにどさりと転がる。

目の色だ、とバートは気づいた。鮮やかな赤だったのが、今は、霞（かすみ）がかかったように薄桃色を帯びている。
ある程度の成長をとげることによってエルフ族の女性の瞳の色が変化するということはバートも常識として知っていた。
「まさか」
「ほえ？」
「い、いや、なんでもない。今お茶いれてやるから待ってなさい」
バートはどきどきしながら、台所に入った。
(俺の見間違いか……？)
こんなとき母親のルーチェがいてくれたら、と思わずにはいられない。
「ねえねえ。父親としては、なにか変わったことがあったかどうか、聞きたいんじゃないの？」
背後から声をかけられて、バートは飛び上がる。
「べ、別に俺は……」
「まずねえ、リアがすっごく明るくなったんだ」
「あ」

と、バートは間の抜けた声を発してしまう。
(なんだ、そんなことか)
それから、あわててとりつくろった。
「へ、へええ……朱に交われば赤くなる、ということか？　気の毒に」
「朱に……なにそれ。たしかに目はちょっと赤くなったかな。あとさあ」
アーチェはバートのたてる水音に負けまいと、声を張った。
「お父さんがお母さんをなくしたときの気持ちが、わかったような気がしたよ！」
ガチャン。バートがやかんを取り落とす。
「旅の空でつらつら考えてたら、ふっとね」
「アーチェ……それは」
「まっ、あたしもオトナになったってことかしらねー。きゃははははっ！　あ、早くしてね、お茶」
バートは絶句し、くちびるをひくつかせた。

「それじゃ、行ってきまぁす」
アーチェが玄関のドアから、父親に声をかけた。
つるばみ亭から戻って、すでにひと月がたとうとしていた。
今日はハーメルの薬屋に、薬を届けに行くのだ。
「気をつけてな」
バートは薬草を入れた鉢から目を上げずに言う。
「へーきへーき。あ、帰りにリアのとこに寄るからね。ベネツィアからモールが戻ってるらしいから、ちょっと遅くなるよ」
「毎度のことで」
アーチェは後ろ手にドアを閉めた。淋しいローンヴァレイにも、今日は燦(さん)さんと陽が降り注いでいる。
ひと月という時は、アーチェの心の健康を取り戻すには充分な時間だった。問題のふた晩の記憶はほとんど失われたままだったが、今はシノン・ハーディアを想うことができる。

やがて、アーチェは美しいハーメルの町へと続く橋が見えるところまでやって来た。
「もしこのまま……」
アーチェはつぶやく。
「このまますんなり橋を渡れちゃったら、シノンにはもう会えない。けど、誰かがあたしを引き止めたら、そのときは……」
おーい、と小さく呼ぶ声が聞こえた。
アーチェがゆっくりと振り向く。バートがゼイゼイいいながら走ってくるのが見えた。
「このバカ娘！　かんじんの薬を忘れて行きやがって。どこがオトナになったっていうんだよ」
バートは大きな布袋をアーチェに向かって放る。
「ありがと、お父さん」
アーチェは微笑みながら両手で布袋をキャッチした。バートが眉を寄せる。
「なにニヤニヤしてるんだ。さては早く遊びたくて、わざと忘れたな？　そういうのを確信犯というんだ」
「そうかもしれない。だって信じたいんだもん」
ふっと真顔を見せた娘に、バートは「おや」という表情になる。が、アーチェはすぐ

に、

「じゃあね」

と笑顔に戻り、布袋を担ぐとほうきで舞い上がった。

(きっとまたどこかで会えるよね……なーんて、月並みなセリフだけど)

橋の上を一直線に飛ぶと、余計なものが風に削ぎ落とされていくようで爽快だった。

「ふふふ。今日はどんなおいしいものが食べられるのかなあ」

アーチェは、友人たちの待つ町に入って行った。

『テイルズ　オブ　ファンタジア　真紅の瞳』完

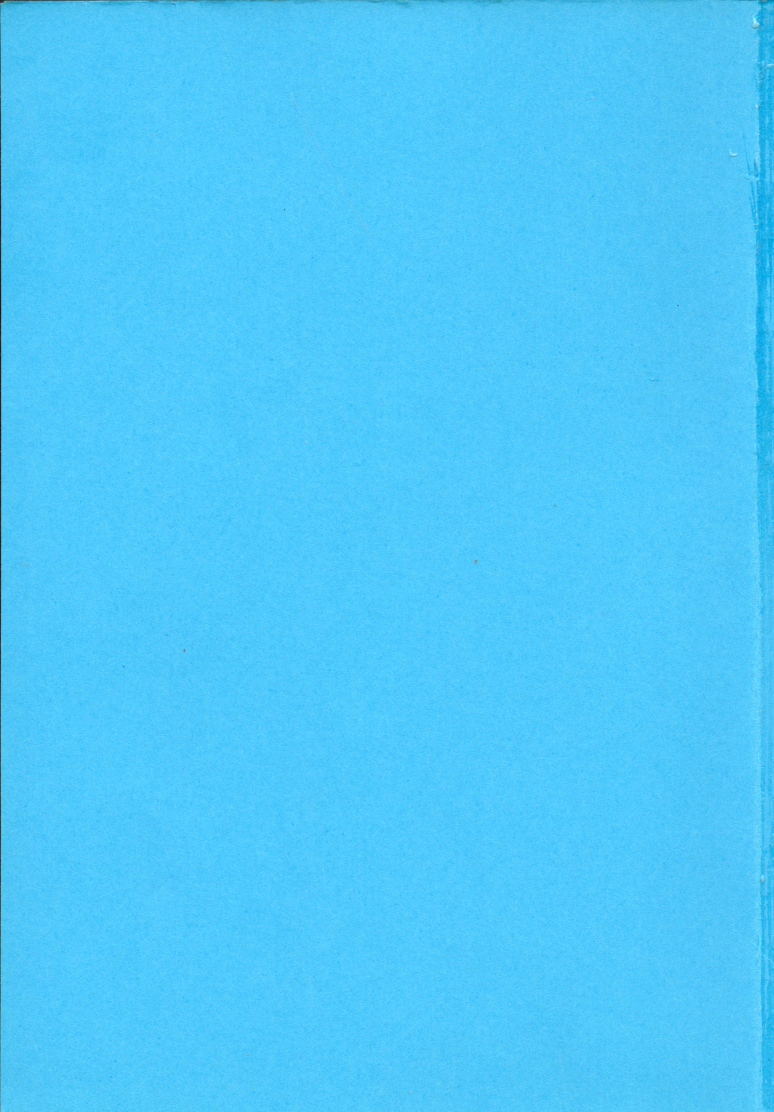
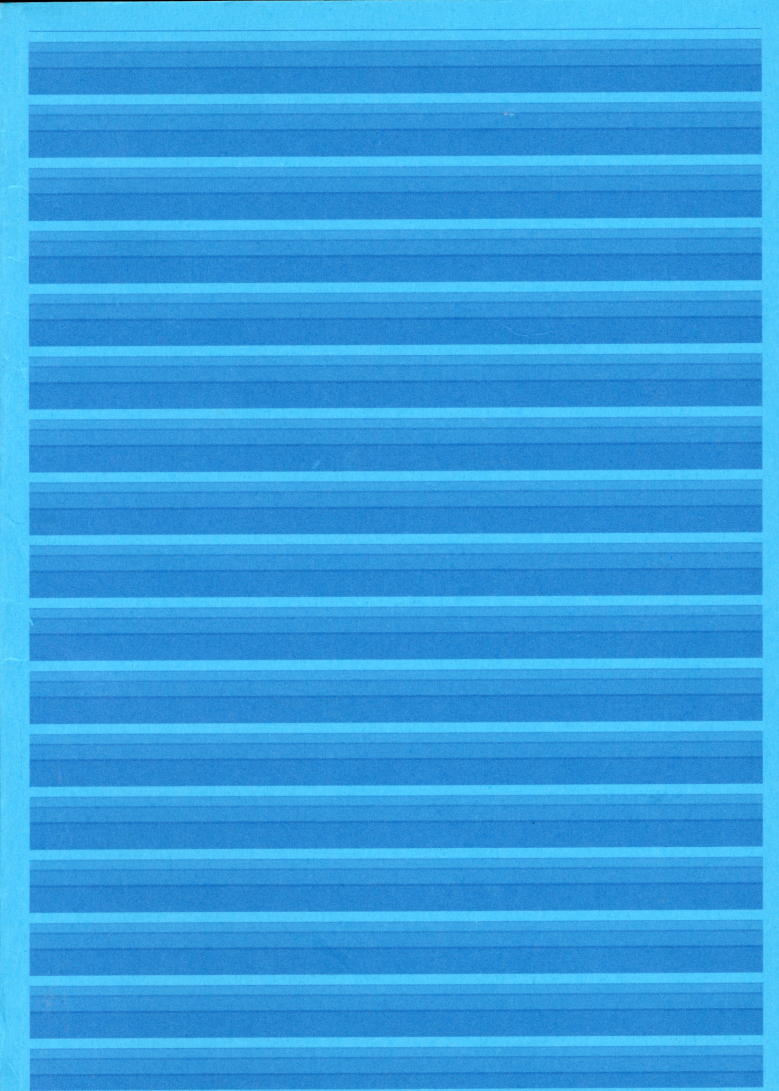
あとがき

こんにちは。矢島さらです。
今回は『テイルズオブファンタジア』の外伝で、サブタイトルからも一目瞭然！ですが、アーチェ・クラインのお話です。
本編で、アーチェがユニコーンに会いに行く途中に「むかし彼氏がいて……」という理由でいなくなってしまう場面がありますが、じゃあその彼ってどんな人だったんだろう、と疑問に思ったのがこれを書くきっかけでした。
アーチェといわれてまず思い浮かぶのはあのピンクの髪ですが、私はどちらかといと彼女の目の色のほうがずーっと気になっていまして……エルフの血が入っている証としての真紅の瞳、ですね。
ほんとにああいう人が目の前にいたら、それでもって自分の友だちだったりしたら、どんな感じかなあと想像してみたりして。でもカラーコンタクトでも赤っていうのはなかなかないですしね（あったらちょっとコワイ?:）。むかし、写真を撮るとたまに赤目

現象が出ましたが（目がまっ赤に写るやつですね）、それもぜんぜん違うし……。
　自分なりにアーチェのイメージをつかみたかったので、近所で飼っている美形の白ウサギを観察しに行ったりしました。さすがにウサギの赤い目というのはかわいい～！そうか、アーチェも愛らしさの点ではこんなふうなのかな、と納得。
　髪の色については、美容師をやっている友だちが、「あれで傷んでないのは信じられないっ」と言ってました。日本人がピンクにしようと思ったらまず脱色で真っ白にして、そこにきれいなピンクを入れ直すので、へたをするとシャンプーのときに髪が動かないほどからまって傷んでしまうそうなのです。アーチェは自毛だから、関係ないですけど。
　実はそのむかし、ものすごーくむかし、若気の至りで私も髪にピンクを何か所かすじに入れてみたことがあるんですが、相性悪かったみたいでシャンプーのたびにお風呂場の床にピンクのお湯がドボドボと……！すぐに上から茶色を入れて事無きを得ましたが、なんであれは定着しなかったんだろう。アーチェがうらやましい～～～～（だから自毛だってば）。
　そうそう、アーチェのお父さんのバートの職業についてちょっと書きます。
　ゲームでは設定がなかったのでエルフ秘伝の薬を作っていることにしました。隠遁生活っぽいかな、と。

で、いろいろ資料を調べていたら、なんと「アーツェー」という名前の薬を発見したんですよ。びっくり。これが胃腸薬とか整腸剤だったらできすぎだけど、残念ながら止血剤でした。アーチェというよりはミントの守備範囲ですね。
というわけで、機会があったらぜひまたファンタジアの世界を書いてみたいと思っています。では。

一九九九年三月
矢島さら

追伸：その後、美形ウサギは歯を悪くして獣医さんに出してもらった痛み止めを飲んでいるそうです。アーチェもみなさんも、甘いものの食べ過ぎには気をつけましょう（笑）。

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命(とき)をつぐもの 上 下

テイルズ オブ デスティニー
青の記憶

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空(とき) 上 下

テイルズ オブ ファンタジア
真紅の瞳

ISBN4-7572-0372-1

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○アスキー
発売○アスペクト

ときは、アセリア暦4201年。ローンヴァレイで父親のバートとふたり暮らしのアーチェは、風邪薬を求めて出向いたハーメルの町で、リア・スカーレットと出会う。研究者の両親のもと物静かな性格に育ったリアと楽しい日々を過ごすアーチェ。だがある日、ダオスの手先がリアの両親の研究を巡りその命を狙っていることを知る――「はるかなる時空」に続く待望の新作登場。